一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 17

鳥取県米子市

石井要害跡 Ⅱ

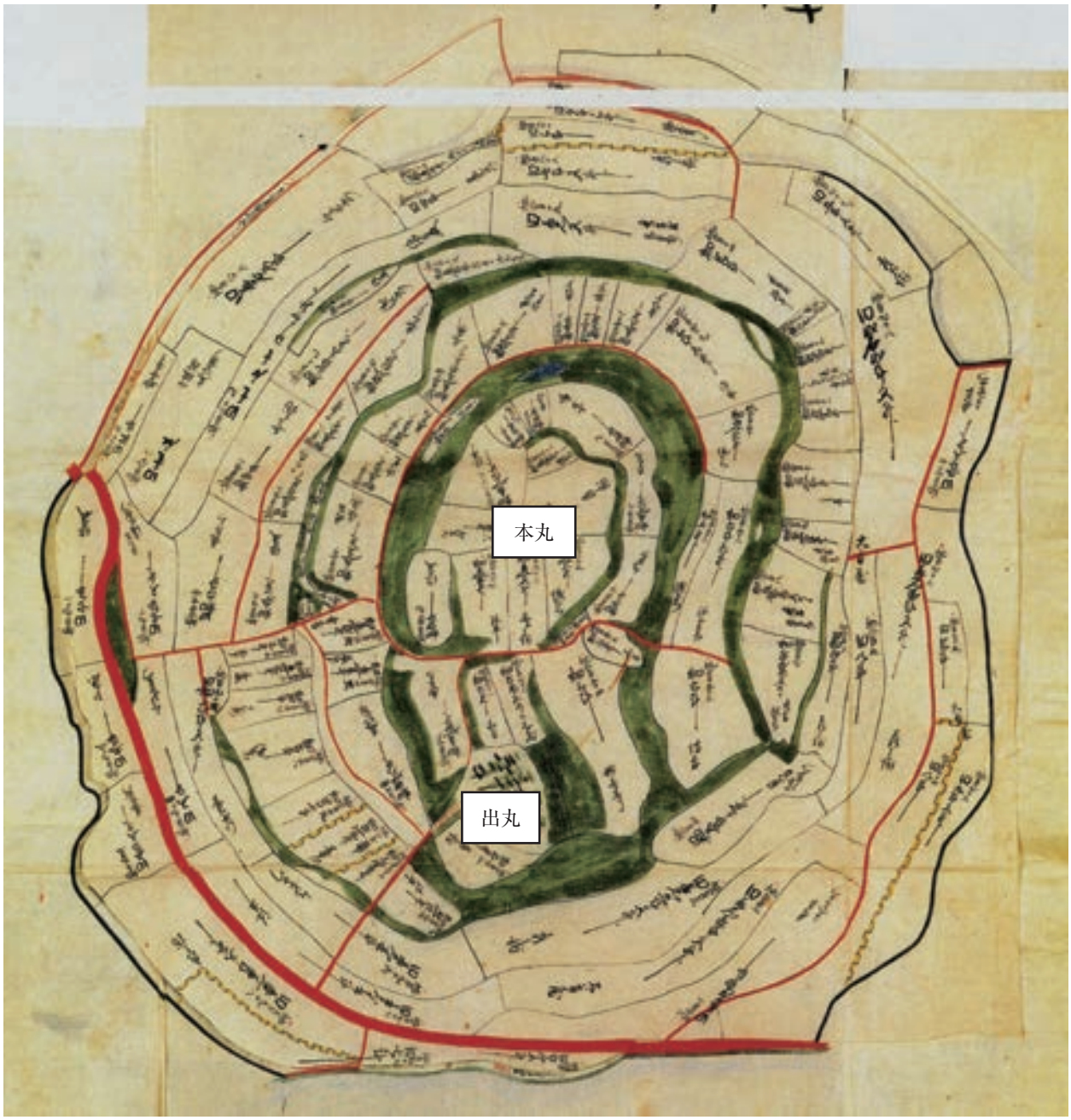
２０１９．３
一般財団法人　米子市文化財団

一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 17

鳥取県米子市

石井要害跡 Ⅱ

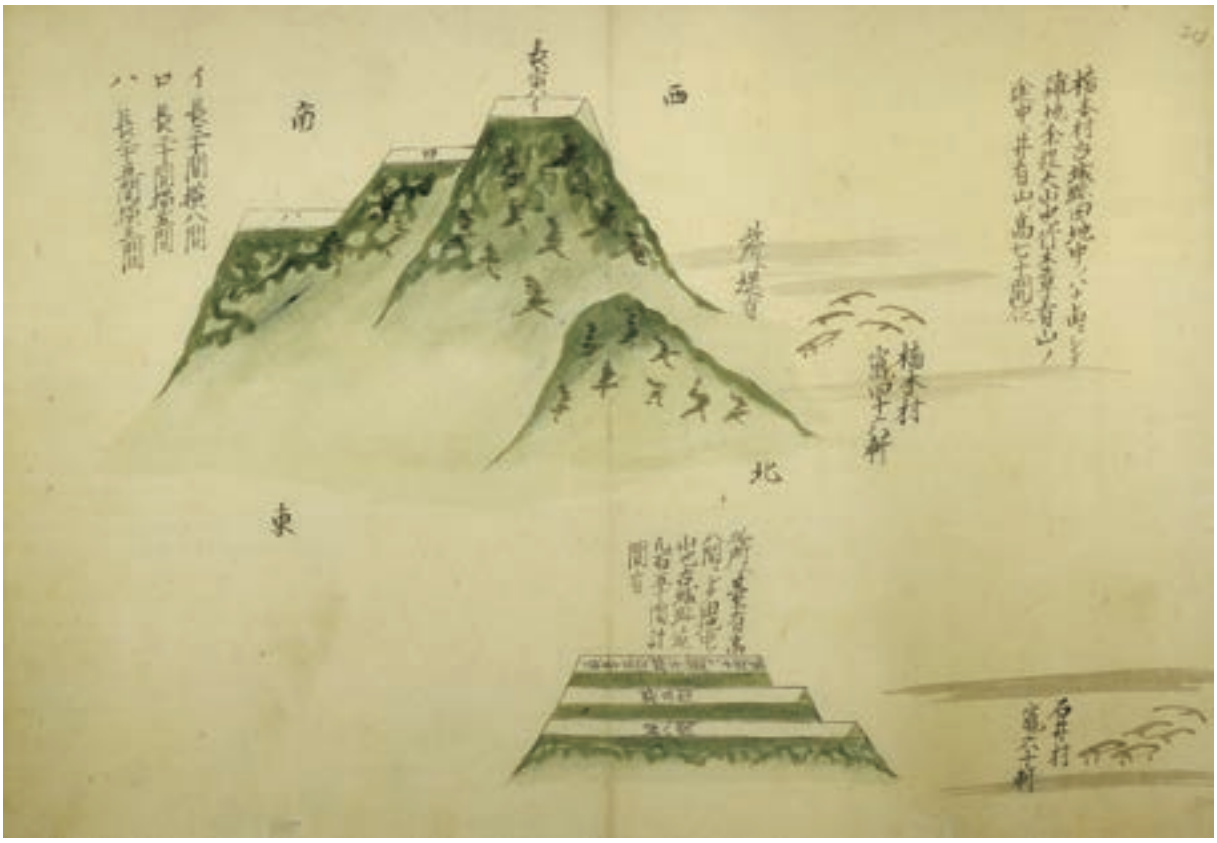
２０１９．３
一般財団法人　米子市文化財団



石井村田畑地続字限絵図・字要害（明治２年）

米子市立山陰歴史館所蔵

巻頭図版２



石井村・橋本村古城跡（『因伯古城跡図志』）　　鳥取県立博物館所蔵

石井要害跡全景（西から）

序

当財団では、平成30年度に米子市の委託を受け、市道石井要害団地４号線及び石井要害公園法面補修工事に伴い中世城館の石井要害跡の発掘調査（第２次調査）を実施しました。

調査の結果、出丸の頂部の平坦面北側では空堀が検出され、土塁の存在も想定されます。また、土塁を削平して空堀を埋め立てて郭を拡張しており、徐々にではありますが石井要害跡の様相が明らかとなってきました。

この度、調査成果をまとめ、発掘調査報告書として『石井要害跡Ⅱ』を刊行することができました。本報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解、関心がより深まることを期待しています。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました米子市都市整備部道路整備課ならびに関係各位に対し、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成31年３月

一般財団法人　米子市文化財団
理 事 長　杉　原　弘一郎

例　　言

1．本報告書は、米子市が計画する市道石井要害団地４号線及び石井要害公園法面補修工事に伴い、平成30年度に米子市石井地内で実施した石井要害跡第２次調査の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、米子市の委託を受けて一般財団法人　米子市文化財団が実施した。
3．本報告書における方位は公共座標北を示し、X、Yの数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅴ系の座標値である。また、レベルは海抜標高を示す。
4．本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の１/50,000地形図「米子」、米子市作成の１/2500「米子市都市計画図」、及び鳥取県西部総合事務所米子県土整備局作成の１/500「石井地区急傾斜地崩壊防止工事平面図」を加筆して使用した。
5．出土遺物を整理、評価するにあたり、貿易陶磁については、松江城調査研究室　西尾克己氏、備前焼については、岡山市教育委員会　乗岡　実氏、石製品の石材鑑定については鳥取県教育委員会　高橋章司氏にご教示いただいた。記して感謝いたします。
6．出土鉄製品のX線写真撮影については、鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。記して感謝いたします。
7．本発掘調査における調査後空中写真撮影、放射性炭素年代測定は業者に委託した。
8．本報告書に掲載した遺物の実測、浄書は、一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財調査室で行った。
9．本報告書で使用した遺構、遺物写真は調査担当職員が撮影した。
10．本報告書の執筆及び編集は、高橋が行った。
11．発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類及び出土遺物は、米子市教育委員会で保管している。

凡　　例

1．遺構の略称は「ISYG2」とした。
2．本報告書における遺構名及び遺構番号は、調査地が近接する第１次調査との混同を防ぐため、ピット番号を除いて、第１次調査からの通し番号とし、発掘調査時のものと変更した。新旧の遺構名及び遺構番号の対応は、挿表目次末尾に付した新旧遺構名対照表に示した。
3．本報告書における遺物の縮尺は以下のとおりである。
　土器、陶磁器：１/３　石製品：茶臼、燈篭（１/３）・碁石、管玉（１/１）　金属製品：１/２
　瓦：１/４
4．本文中、挿図中、遺物観察表中及び写真図版中の遺物番号は一致する。
5．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで示した。
6．遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
7．ピット計測表において（　）で表したものは残存部分での計測値である。

目　　次

序
例言
凡例
目次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯 ……1
　第２節　調査の経過 ……1
　第３節　整理作業の経過 ……2
　第４節　調査体制 ……2

第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境 ……4
　第２節　歴史的環境 ……4

第３章　調査の概要
　第１節　調査の方法……10
　第２節　遺跡の立地と層序
　　１．遺跡の立地と現状……10
　　２．出丸の頂部平坦面の層序……11
　　３．出丸の北東側斜面の層序……11
　第３節　検出した遺構と遺物
　　１．築城以前……11
　　２．Ⅰ　期……13
　　３．Ⅱ　期……26
　　４．Ⅲ　期……39
　第４節　遺構外出土遺物
　　１．築城以前の遺物……43
　　２．中世の遺物……43
　　３．近世以降の遺物……43

第４章　自然科学分析
　第１節　石井要害跡における放射性炭素年代測定……47

第５章　総　　括
　　１．出丸の構造と機能……50
　　２．存続時期……51
　　３．築城以前の様相……51
　　４．出土遺物について……51

遺物観察表……53

写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図 ……1
第２図　調査地位置図 ……3
第３図　周辺遺跡分布図 ……8
第４図　石井要害跡位置図及び周辺の山城・砦分布図 ……9
第５図　築城以前の遺構分布図及び土坑４……12
第６図　築城以前の出土遺物分布図……13
第７図　Ⅰ期の遺構分布図及びグリッド設定図……15・16
第８図　Ⅰ期　頂部平坦面出土遺物分布図……17
第９図　Ⅰ期　北東側斜面出土遺物分布図……18
第10図　腰郭４、５……19
第11図　腰郭５出土遺物……20
第12図　腰郭６出土遺物……20
第13図　腰郭７出土遺物……20
第14図　北東側斜面土層図……21・22
第15図　腰郭６、７……23
第16図　空堀２、柵列２平面図……24
第17図　空堀２、柵列２断面図……25
第18図　Ⅱ期の遺構分布図……27・28
第19図　Ⅱ期　頂部平坦面出土遺物分布図……29
第20図　Ⅱ期　北東側斜面出土遺物分布図……30
第21図　郭１造成土出土遺物……31
第22図　郭１出土遺物……31
第23図　P2礫（燈篭）出土状況図 ……32
第24図　P2出土遺物 ……32
第25図　P14遺物出土状況図 ……33
第26図　P14出土遺物 ……34
第27図　腰郭４造成土出土遺物……35
第28図　腰郭４出土遺物……36
第29図　段状遺構１～３及び段状遺構１出土遺物……37
第30図　段状遺構３……38
第31図　段状遺構３出土遺物……39
第32図　Ⅲ期の遺構及び出土遺物分布図……40
第33図　集石１……41
第34図　集石１出土遺物……41
第35図　集石２～５……42
第36図　遺構外出土の築城以前遺物……43
第37図　遺構外出土の中世遺物（１）……44
第38図　遺構外出土の中世遺物（２）……45
第39図　遺構外出土の近世以降遺物……46
第40図　暦年較正結果……49

挿 表 目 次

第１表　周辺遺跡一覧表 ……7
第２表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果……48
第３表　石井要害跡　第２次調査出土土器・陶磁器集計表……52
第４表　腰郭５出土土器観察表……53
第５表　腰郭５出土石製品観察表……53
第６表　腰郭６出土陶器・土器観察表……53
第７表　腰郭６出土石製品観察表……53
第８表　腰郭７出土磁器・土器観察表……53
第９表　腰郭７出土石製品観察表……54
第10表　郭１造成土出土陶磁器・土器観察表……54
第11表　郭１造成土出土石製品観察表……54
第12表　郭１造成土出土金属製品観察表……54
第13表　郭１出土陶磁器・土器観察表……55
第14表　P2出土石製品観察表 ……55
第15表　P14出土陶磁器観察表 ……55
第16表　腰郭４造成土出土陶磁器・土器観察表……56
第17表　腰郭４出土陶磁器・土器観察表……57
第18表　腰郭４出土石製品観察表……57
第19表　段状遺構１出土磁器観察表……57
第20表　段状遺構３出土陶器・土器観察表……57
第21表　集石１出土土器観察表……58
第22表　集石１出土石製品観察表……58
第23表　遺構外出土の築城以前土器観察表……58
第24表　遺構外出土の築城以前石製品観察表……58
第25表　遺構外出土の中世陶磁器観察表……58
第26表　遺構外出土の中世石製品観察表……59
第27表　遺構外出土の中世金属製品観察表……59
第28表　遺構外出土の近世以降陶磁器・土製品観察表……59
第29表　遺構外出土の近世以降瓦観察表……60
第30表　遺構外出土の近世以降金属製品観察表……60

石井要害跡　第２次調査　新旧遺構名対照表

新遺構名	旧遺構名
土坑４	P64
腰郭４	腰郭１
腰郭５	腰郭２
腰郭６	腰郭３
腰郭７	腰郭４
空堀２	空　堀
柵列２	柵　列

写真図版目次

巻頭図版１　石井村田畑地続字限絵図・字要害
巻頭図版２　石井村・橋本村古城跡
（『因伯古城跡図志』）
石井要害跡全景（西から）
図版１　北東側斜面　調査前状況（北東から）
北西側及び南西側斜面　調査前状況
（西から）
図版２　頂部平坦面　調査前状況（北東から）
南西側腰郭　調査前状況（北東から）
図版３　北東側斜面　調査前状況（北西から）
調査位置全景（上が北西）
図版４　調査地全景（上が北西）
調査地全景（南西から）
図版５　調査地全景（北西から）
調査地全景（北東から）
図版６　築城以前の遺構全景（北西から）
土坑４（北西から）
図版７　腰郭５（南西から）
腰郭４、５土層断面（南東から）
図版８　空堀２（北東から）
空堀２（南西から）
図版９　空堀２土層断面　A―A´（北東から）
空堀２土層断面　B―B´（北東から）
図版10　柵列２（南東から）
腰郭６、７（北東から）
図版11　北東側斜面　南東壁土層断面
（北西から）
北東側斜面　北西壁土層断面
（南東から）
図版12　頂部平坦面　Ⅱ期の遺構全景
（北東から）
頂部平坦面　Ⅱ期の遺構全景
（南西から）
図版13　P2燈篭検出状況
P14礫・遺物出土状況
図版14　腰郭４（南西から）
腰郭４（南東から）
図版15　段状遺構１～３（北東から）
段状遺構１～３（北西から）
図版16　段状遺構３内礫検出状況推移
（北東から）
図版17　集石２～５検出状況（南東から）
集石１上面
集石１下面（P27）
集石２
集石３
図版18　集石４
集石５
郭１　焼土検出状況（南西から）
郭１造成土遺物（15）出土状況
郭１造成土遺物（17）出土状況
郭１造成土遺物（18）出土状況
腰郭４遺物（71）出土状況
茶臼（106）出土状況
図版19　腰郭５～７出土遺物
図版20　郭１造成土出土遺物
図版21　郭１出土遺物
図版22　P14出土遺物
図版23　腰郭４造成土出土遺物（１）
図版24　腰郭４造成土出土遺物（２）
図版25　腰郭４出土遺物
図版26　段状遺構１、３出土遺物
図版27　遺構外出土の中世遺物
図版28　段状遺構３出土遺物
P2出土石製品
図版29　腰郭４出土石製品
集石１出土遺物
図版30　遺構外出土石製品（１）
遺構外出土石製品（２）
腰郭５、郭１造成土、遺構外出土石製品
郭１造成土、遺構外出土鉄製品

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県米子市石井地内において計画された市道石井要害団地４号線及び石井要害公園法面補修工事に伴い、工事対象地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。

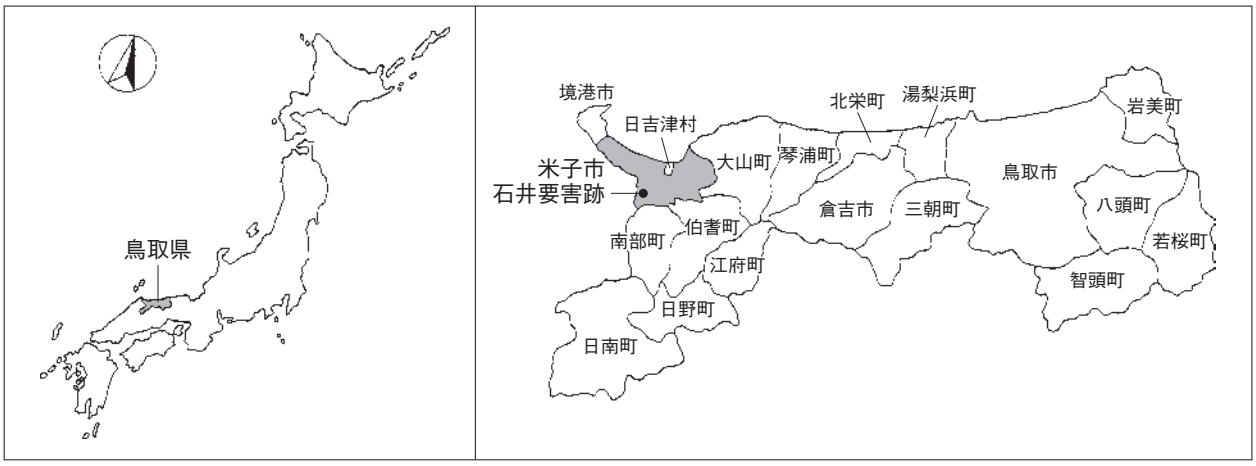
工事対象地は、周知の遺跡である石井要害跡の出丸として認識されており、工事に先立って工事対象地内の遺跡の有無及びその範囲を確認する必要が生じた。現地踏査では、丘陵の頂部は平坦地形となっていることから、郭の存在が窺え、その南西側では腰郭が観察された。また、米子市教育委員会が平成28年度に実施した試掘調査では、丘陵の北東側斜面で腰郭が検出され、須恵器、陶磁器、瓦が出土した。

この結果を受け、米子市都市整備部道路整備課と米子市教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行い、発掘調査が必要との判断に至った。そのため、米子市は、一般財団法人米子市文化財団に発掘調査を委託することとなり、当財団は、平成30年５月２日付で文化財保護法第92条に基づく発掘届を鳥取県教育委員会に提出し、平成30年６月６日付で米子市と契約をした。それに基づき当財団埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過

発掘調査は、出丸の工事対象地の1,039㎡を対象とし、平成30年８月27日から平成30年10月31日までの期間で現地調査を行った。

調査対象地は、出丸の頂部平坦面の北西側とその北東側斜面であり、急斜面であるため、重機の搬入ができないことから、人力で表土及び包含層の掘削を実施し、遺構の検出と掘削を行った。調査の最終段階では、業者委託により調査後の空中写真撮影を実施した。



第１図　遺跡位置図

調査日誌抄

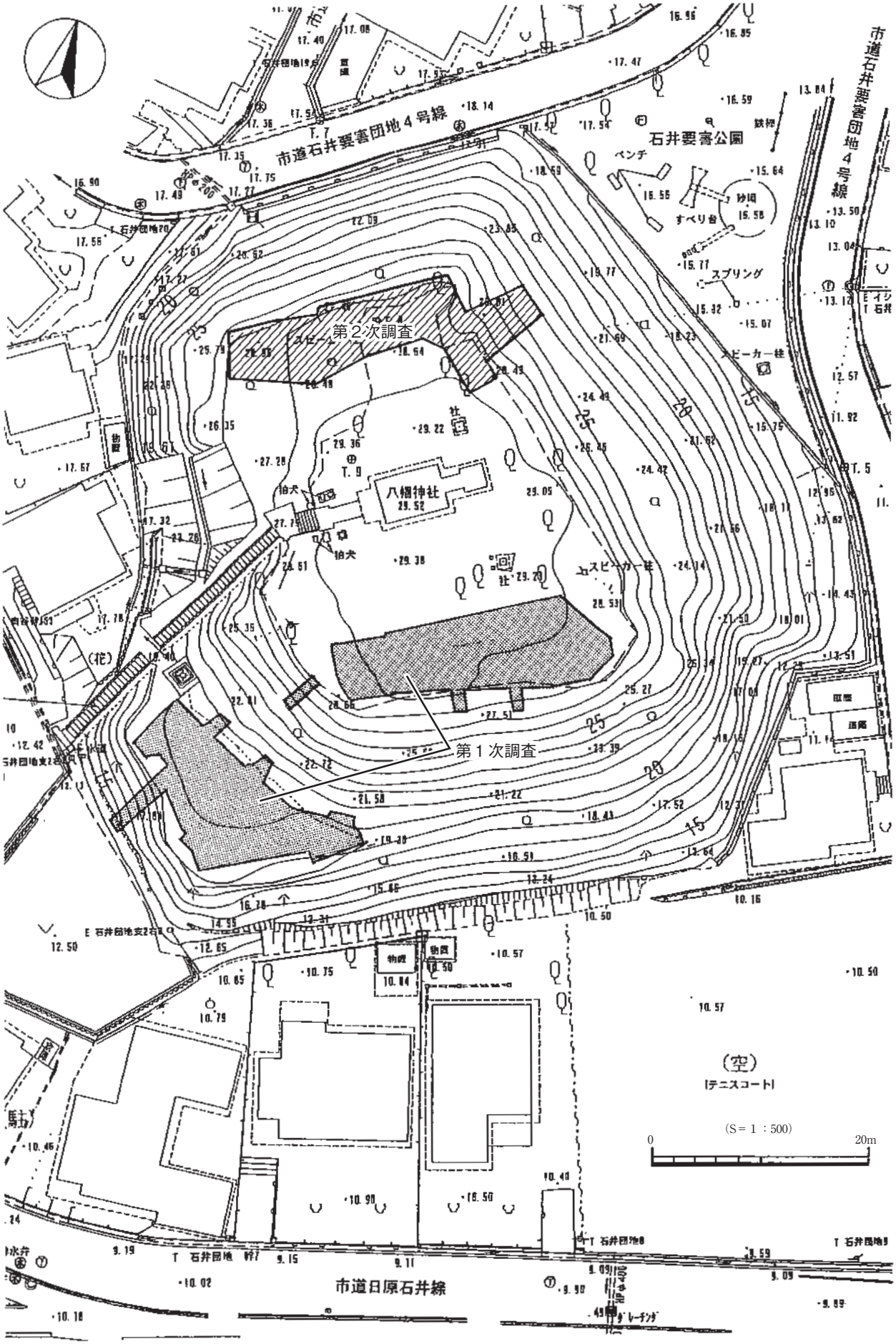
８月24日	発掘器材搬入
８月27日	発掘作業員稼働開始
８月27日～28日	調査地及び周辺の環境整備
８月28日	調査区割のための杭打ち
８月28日～	発掘作業員稼働による表土・包含層の掘削及び遺構検出
９月５日	北東側斜面の調査開始
９月19日	段状遺構３で集石を検出
10月５日	空堀２の掘削開始
10月９日	腰郭４完掘
10月９日	管玉出土
10月16日	段状遺構１～３完掘
10月18日	腰郭６完掘
10月26日	腰郭７完掘、空堀２掘削終了、T5掘削
10月30日	業者委託による調査後空中写真撮影実施
10月31日	発掘調査現場片付け、発掘器材撤収
10月31日	調査終了

第３節　整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、平成30年度に実施した。出土遺物の洗浄と注記、接合作業を行い、遺物の実測、トレース、写真撮影を実施し、年度末に報告書を刊行した。

第４節　調査体制

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団
理　事　長　杉原弘一郎
常 務 理 事　先灘達也（一般財団法人　米子市文化財団事務局長）
埋蔵文化財調査室
室長兼調査員　小原貴樹
主査兼統括調査員　平木裕子
主幹兼統括調査員　佐伯純也
非常勤職員　田中昌子
事業担当　室長兼調査員　小原貴樹
主任調査員　高橋浩樹
調査補助員　秦　美香
調査協力・管理・指導・助言　米子市教育委員会・鳥取県教育委員会


市道石井要害団地４号線
石井要害公園
ベンチ
すべり台
スプリング
スピーカー柱
第２次調査
八幡神社
第１次調査
(空)
(テニスコート)
(S＝１：500)
0
20m
市道日原石井線

第２図　調査地位置図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

米子市は、鳥取県の西端に位置する鳥取県西部の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。

地形的には、中国山地に源を発する日野川の沖積作用によって形成された米子平野を中心に、それを取り囲むようにしてその周縁部には大山、中国山地からつづくなだらかな山地や丘陵によって構成されている。さらに、米子平野は日野川によって形成された扇状地性の沖積地である日野川扇状地を中心にして、その北側の低地と発達した２条の砂州からなる日吉津低地、南西側の法勝寺川によって形成された沖積世の河谷低地である法勝寺川埋積谷低地（法勝寺平野）、西側の米子市街地の大部分をのせる米子低地（沖積地）からなっている。また。北西には日野川からの流出土砂が北西の季節風や沿岸流の影響で堆積し、これによって形成された弓浜半島が南北にのび、その西側にはこの半島によって外海と遮断されて形成された汽水湖の中海がある。

米子市は、弓浜半島南部から米子平野北部、そして大山北西麓にかけて市域が広がり、北は境港市、東は大山町、南東は伯耆町、南は南部町、西は島根県安来市とそれぞれ接している。

石井要害跡は米子市西部の米子市石井に所在する。この地は米子市街地の南約３㎞にある農村地帯で西へ約２㎞行けば島根県との県境となる。

調査地は加茂川左岸の標高29mの独立丘陵上に立地し、南から東側にかけては法勝寺平野が開ける。石井要害跡が立地する丘陵は、昭和44年に住宅団地造成工事のため大半が削平されているが、明治２年作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』によると、楕円形の城郭として丘陵は３段に削られ、その周囲を堀跡と考えられる水田が囲んでいる。また、この辺りは出雲や備後に至る街道が通過し、橋本七尾城とともに西伯耆の防御拠点であった。

第２節　歴史的環境

旧石器時代

周辺での人々の生活の痕跡は旧石器時代まで遡る。長者原台地の諏訪西山ノ後遺跡(21)では、ローム層中から頁岩製のナイフ形石器が１点出土し、古墳の周溝からもナイフ形石器が出土している。また、坂長村上遺跡（58）ではローム漸移層からであるが、黒曜石製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代

縄文時代草創期には奈喜良遺跡（22)、陰田宮の谷遺跡（31)、吉谷亀尾ノ上遺跡（42)、福成石佛前遺跡（46)、境北井埒遺跡（44)、境矢石遺跡（45)、諸木遺跡（51）から尖頭器が出土している。

縄文時代早期には大山西麓に遺跡が集中しており、日野川左岸では当該期の遺跡は少なく、清水谷遺跡（48）で黄島式～高山寺式に比定される押型文土器、新山山田遺跡（38）で早期中葉の押型文土器が少量出土しているのみである。

早期末から前期になると中海沿岸で集落の形成が行われるようになり、このような遺跡には目久美遺跡（４）、陰田第１遺跡（30）、陰田第７遺跡（27）、陰田第９遺跡（29）がある。目久美遺跡では当該期には土器とともに多量の石錘と動植物遺体が出土している。また、陰田第９遺跡では、轟式の影響を受けた土器が出土している。

中期には現在のところあまり明確ではないが、遺跡の数が減少する傾向にある。目久美遺跡では、この時期のドングリ貯蔵穴が多数確認されている。

後期には大山西麓や中海沿岸の低湿地に加えて米子平野南部の丘陵上にも遺跡が見られるようになる。この時期の遺跡には、目久美遺跡、陰田第１遺跡、陰田第７遺跡、古市河原田遺跡（40）、青木遺跡（16）などがあり、青木遺跡では多数の陥穴が確認されている。

晩期には目久美遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡、新山下山遺跡（36）、古市河原田遺跡などがあり、古市河原田遺跡からは晩期後葉の突帯文土器がまとまって出土している。

弥生時代

弥生時代になると海岸線が後退するとともに沖積が進み、低湿地にて農耕が開始される。

前期には、目久美遺跡では低湿地水田と微高地に営む集落が形成され、長砂第１遺跡（６）でも前期後葉～中期初頭の水田跡が確認されている。また、前期末～中期前葉には清水谷遺跡、諸木遺跡、宮尾遺跡（53）天王原遺跡（56）で断面Ｖ字状の環濠が確認されている。

中期には遺跡の数が増加し、その立地範囲も拡大し、丘陵や台地上、低湿地の微高地上、高原地域にも見られるようになる。目久美遺跡、長砂第２遺跡（７）は低湿地に立地する遺跡で、目久美遺跡では中期中葉～中期後葉と中期後葉～中期末の２面の水田跡が検出され、長砂第２遺跡でも前期末～中期前葉と中期後葉～後期の水田跡が確認されている。

後期には前期～中期の拠点的な集落は継続するものは少なく、中期後葉から後期にかけて青木遺跡、福市遺跡（15）、妻木晩田遺跡、越敷山遺跡群（61）のように新たに拠点的な集落が形成され、古墳時代へと継続する。また、中期後葉～後期には遺跡は低地から低丘陵へ立地が移動する傾向にあり、このような遺跡には陰田第１遺跡、陰田第６遺跡（28）、吉谷銭神遺跡（41）などがあるが、これらは比較的短期間で廃絶する。

古墳時代

前期の古墳には日原６号墳（13）、普段寺１号墳・２号墳（54）などがある。日原６号墳は一辺21mの方墳で、箱形木棺３基、割竹形木棺１基、土壙墓２基が検出されている。普段寺１号墳は全長23mの前方後方墳で、三角縁唐草文帯二神二獣鏡、碧玉製管玉、鉄剣が出土している。普段寺２号墳は直径22～23mの円墳と考えられ、三角縁四神四獣鏡が出土している。青木遺跡では小型の方墳10基と円墳７基からなる古墳群と、これらとの階層差を示す方形周溝墓群が確認され、福市遺跡日焼山地区では土壙墓群が検出されている。

前期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡などがあり、池ノ内遺跡（５）では水田跡が検出されている。

中期の古墳には陰田41号墳、水道山古墳（８）、新山山田古墳群（39）、三崎殿山古墳（52）、浅井11号墳、福成春日山古墳などがある。陰田41号墳は直径30mの円墳で、若年の女性を埋葬した箱式石棺

を有する。新山山田古墳群は10基からなる古墳群で、７号墳からは珠文鏡が出土している。三崎殿山古墳は全長108mの前方後円墳で、西伯耆最大の規模を誇る。福成春日山古墳は全長30m級の前方後円墳で、頭蓋骨を朱塗りした人骨が箱式石棺に埋葬されていた。また、水道山古墳からは斜縁八神鏡、浅井11号墳からは画文帯神獣鏡が出土している。

中期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡、新山山田遺跡、新山研石山遺跡(37)などがある。

後期には群集墳が造られるようになり、この周辺には東宗像古墳群（11)、宗像古墳群（12)、新山山田古墳群などがある。また、この地域は横穴墓の隆盛する出雲地方の影響を受けて、６世紀後半に横穴墓の築造が開始される。50基にも及ぶ陰田横穴墓群、大埒山横穴墓群（10)、マケン堀横穴墓群（50）などがあり、これらはいずれも後背墳丘を有するという特色をもつ。

この時期の集落には青木遺跡、福成早里遺跡（47)、清水谷遺跡などがある。

飛鳥～平安時代

この時期の遺跡は法勝寺川西岸と長者原台地に多く分布している。法勝寺川西岸では、陰田遺跡群（24～26、28、31～35)、新山遺跡群（36～38）などがあり、これらはいずれも丘陵斜面を加工して平坦面をつくり、そこに掘立柱建物などを構築している。また、これらの遺跡では鍛冶、製鉄関連の遺構、遺物が検出され、さらに、木簡や円面硯、墨書土器などが出土しており、７世紀後半以降、官衙的性格を有するようになる。また、陰田第６遺跡では石敷道路が確認されており、古代山陰道の支道と考えられている。以上のことから伯耆、出雲国境近くに位置するこの地域は極めて重要な場所であったと考えられる。

一方、長者原台地では法起寺式の伽藍配置をもつ白鳳期の大寺廃寺跡や平安時代の坂中廃寺跡があり、さらに、これらに近接する長者屋敷遺跡（57)、坂長下屋敷遺跡（59)、坂長第６遺跡（60）では官衙的配置をとる大型建物群が確認されており、長者原台地上に会見郡衙が存在していたことが明かとなりつつある。

集落としては青木遺跡、樋ノ口第４遺跡（17)、諏訪西山ノ後遺跡などがあり、樋ノ口第４遺跡からは石帯が出土し、諏訪西山ノ後遺跡では土師器甕に和同開珎３枚、刀子、鋤先、墨挺を入れて埋納した胞衣埋納遺構が検出されている。

中　　世

南北朝から戦国期の動乱を背景として米子市内には石井要害（14)、橋本七尾城（23)、新山要害（43)、戸上山城（９)、飯山城（２)、河岡城、尾高城などが築かれる。『伯耆志』によると、橋本七尾城は守護山名氏の重臣行松氏が在城し、石井要害は片山小四郎が在城し、出雲からの侵攻に備えたという。

古墓は長者原台地で多く確認されており別所長峰古墓（18)、諏訪１号墳（19)、青木遺跡、別所中原地下式横穴(20)がある。別所長峰古墓と諏訪１号墳は、方形の墳丘の周囲に溝を巡らせるもので、墳丘上に宝篋印塔あるいは五輪塔を建てていたと思われる。別所中原地下式横穴では地下式の横穴墓が３基検出された。経塚は長砂町と奥谷で発見されているが、いずれも遺構は不明である。錦町第１遺跡（３）では畠跡が検出されている。

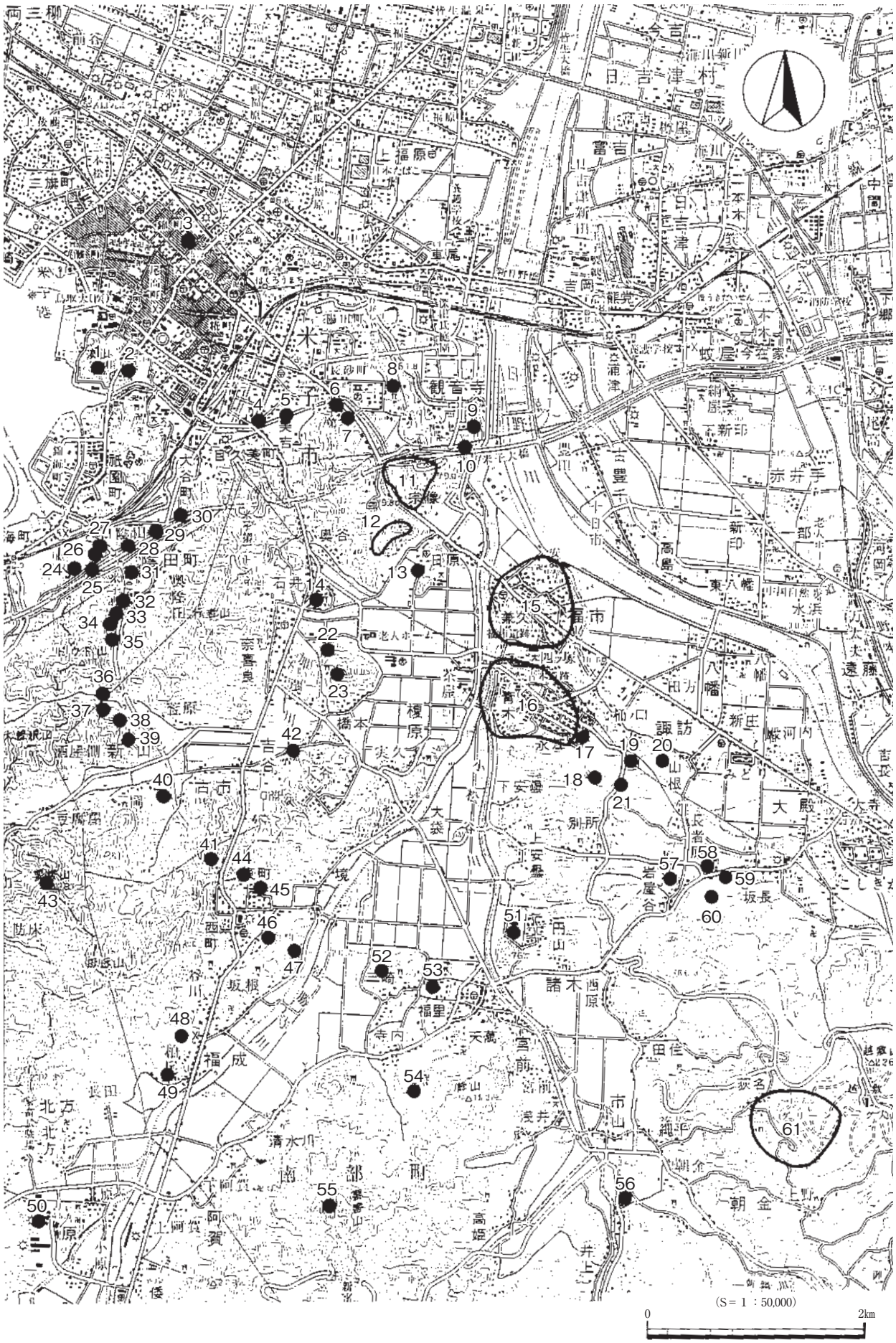
近世・近代

近世の城下町の中心であった米子城は天正19年（1591）に東出雲、西伯耆、隠岐12万石の吉川広家によって築城が開始されるが、慶長５年(1600)周防国岩国に転封される。かわって中村一忠が同年、伯耆18万石の領主として入城したが、慶長14年（1609）に中村家は断絶し、その後、慶長15年（1610）に加藤貞泰が伯耆国汗入・会見郡６万石を領有し、米子城主となる。やがて元和３年（1617）池田光政が因伯２国の領主となり、池田由之が米子城主となる。寛永９年（1632）の国替えによって池田光仲が鳥取藩主となると光仲の首席家老の荒尾成利が米子城を預かることとなり、その後、明治２年（1869）まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

米子市石井は近世には石井村と称した。法勝寺往来がほぼ南北に通り、藩政期の拝領高は419石余、本免は四ツ五分で、全村が米子荒尾氏の給地であった。幕末の『六郡郷村生高竈付』では生高471石余、竈数66とあり、『伯耆志』では林46町２反余、家数66、人数300とある。また、明治12年の『共武政表』では家数66、男102、女121、牛27、馬１とある。石井村は明治22年（1889）には会見郡成実村大字石井となり、昭和29年（1954）には米子市石井となり、現在に至っている。

1	米子城跡	2	飯山城跡	3	錦町第１遺跡	4	目久美遺跡
5	池ノ内遺跡	6	長砂第１遺跡	7	長砂第２遺跡	8	水道山古墳
9	戸上山城跡	10	大埒山横穴墓群	11	東宗像古墳群	12	宗像古墳群
13	日原６号墳	14	**石井要害跡**	15	福市遺跡	16	青木遺跡
17	樋ノ口第４遺跡	18	別所長峰古墓	19	諏訪１号墳	20	別所中原地下式横穴
21	諏訪西山ノ後遺跡	22	奈喜良遺跡	23	橋本七尾城跡	24	陰田荒神谷遺跡
25	陰田小犬田遺跡	26	陰田ヒチリザコ遺跡	27	陰田第７遺跡	28	陰田第６遺跡
29	陰田第９遺跡	30	陰田第１遺跡	31	陰田宮の谷遺跡	32	陰田広畑遺跡
33	陰田隠れが谷遺跡	34	陰田ハタケ谷遺跡	35	陰田夜坂谷遺跡	36	新山下山遺跡
37	新山研石山遺跡	38	新山山田遺跡	39	新山山田古墳群	40	古市河原田遺跡
41	吉谷銭神遺跡	42	吉谷亀尾ノ上遺跡	43	新山要害跡(長台寺城跡)	44	境北井埒遺跡
45	境矢石遺跡	46	福成石佛前遺跡	47	福成早里遺跡	48	清水谷遺跡
49	丸山固屋跡(小鷹城跡)	50	マケン堀横穴墓群	51	諸木遺跡	52	三崎殿山古墳
53	宮尾遺跡	54	普段寺１・２号墳	55	手間要害跡	56	天王原遺跡
57	長者屋敷遺跡	58	坂長村上遺跡	59	坂長下屋敷遺跡	60	坂長第６遺跡
61	越敷山遺跡群						

第１表　周辺遺跡一覧表



第３図　周辺遺跡分布図

第４図　石井要害跡位置図及び周辺の山城・砦分布図

第３章　調査の概要

第１節　調査の方法

市道石井要害団地４号線及び石井要害公園法面補修工事は、石井要害跡の丘陵斜面が災害等により崩壊するのを防止する工事であり、本工事は、既に崩壊対策工事が行われている一部分を除いた、丘陵のほぼ全周が対象となっている。しかし、工区によって工事の事業主体が鳥取県・米子市と異なっているうえに、さらに鳥取県・米子市とも工区が各々２工区に分かれているために、全体として調査区を４つに分けて調査を実施することとなっている。本調査は、その第２次調査である。

発掘調査は、出丸の丘陵頂部平坦面の北西側と北東側斜面を対象として実施した。なお、南西側及び北西側斜面と北東側斜面の中腹以下は、昭和44年の住宅団地造成工事によって大きく削平されており、調査対象から除外した。

調査地は、急斜面であるために重機の使用ができないことから、人力で表土及び包含層の掘削を実施し、遺構の検出と掘削を行った。

調査にあたっては、調査区に沿うように任意で５m画のグリッドを設定し、グリッド単位で調査を行った。グリッドは北西から南東へ向かってA～Cとし、南西から北東へ向かって１～７とした。グリッド名は西側の杭の名称をとって呼称した（第７図）。

空堀２と腰郭５は工事による法面よりも深く掘り込まれている部分があり、工事の関係上、工事による法面よりも深く遺構掘削ができないため、その部分については極力遺構を掘削することは避け、空堀２については断面形態と深さを確認するためにトレンチを２ヶ所設定して最小限の掘削に留めた。

また、B5グリッドからC5グリッドにかけては包含層が残存しており、下層の遺構、遺物を確認するため、T4とT5のトレンチを２ヶ所設定して調査を行った。その結果、T4では遺構は確認されなかったが、管玉、青磁、瓷器系陶器が出土した。一方、T5ではピット２基を検出し、土師器が出土した。

検出した遺構と遺物の記録には、遺跡調査システムを用いた。また、写真撮影は、35㎜の一眼レフカメラを使用し、白黒とリバーサルフィルムで撮影した。また、サブカメラとしてコンパクトデジタルカメラも使用した。

第２節　遺跡の立地と層序

１．遺跡の立地と現状

石井要害跡は、米子平野の西部に位置する。調査地は加茂川左岸の標高29mの独立丘陵上に立地し、南から東側にかけては法勝寺平野が開ける。石井要害跡は、明治２年作成の「石井村田畑地続字限絵図・字要害」によると楕円形の城郭として丘陵は三段に構築され、その周囲を堀跡と考えられる水田が囲んでいる。昭和44年に住宅団地造成のため大半が削平され、南側の八幡神社が鎮座している丘陵が残存しているのみである。この丘陵の頂部は平坦となっており、郭として機能したと考えられる。また、南西側及び南東側の切岸と南西側の腰郭は比較的良好に遺存しているが、北西側は住宅団地造成工事のため大きく削平され、北東側は斜面上部に切岸と腰郭が僅かに旧状を留めているのみである。

２．出丸の頂部平坦面の層序（第14、17図）

丘陵の頂部には40m×20～25mの平坦面が広がり、その中央に八幡神社が鎮座する。

層序は、B5グリッドからC5グリッドにかけては、現地表面から褐色土（現表土）、灰茶色土（旧表土）、地山ブロックが混じる褐色土、地山となっているが、それ以外の部分は現地表面から褐色土(現表土)、灰茶色土（旧表土）、地山となっている。

したがって、遺構はB5グリッドからC5グリッドにかけては褐色土上面、それ以外は地山上面で検出した。

３．出丸の北東側斜面の層序（第14図）

北東側斜面は、北西側には腰郭６があり、南東側は切岸となっていることから、北西壁と南東壁の土層の堆積は異なり、北西壁は腰郭６の埋め立て土で、版築状となっている。一方、南東壁は自然堆積層で、現地表面から褐色土（１層：現表土)、淡褐色～暗褐色を呈する褐色系土（３、４、７、10、11層)、地山ブロックが混じる黄色系土（５、６、８、９層）の大きく３つに分けられる。なお、淡褐色～暗褐色を呈する褐色系土（３、４、７、10、11層）を流入土、地山ブロックが混じる黄色系土（５、６、８、９層）を流入土２として遺物を取り上げた。

第３節　検出した遺構と遺物

今回の調査は、出丸の頂部平坦面の北西側と北東側斜面を対象として調査を実施した。今回の調査では、築城以前の遺構も含めて４時期の遺構が確認された。本稿では、石井要害跡に関わるものについては、第１次調査との整合性を持たせるために時期の古い順にⅠ～Ⅲ期とし、それ以前のものについては築城以前として報告する。

各時期の帰属時期については、築城以前は、遺構の形態や埋土の状況、T4、T5から出土した遺物から弥生時代～古墳時代に帰属する可能性がある。Ⅰ期は、出土遺物から15世紀後半に帰属すると考えられる。Ⅱ期は、出土遺物や空堀２を埋め立てて第１次調査と同様に郭の拡張を行っていることから16世紀前半～中頃に帰属すると考えられる。Ⅲ期は、出土遺物から近世以降に帰属すると考えられる。

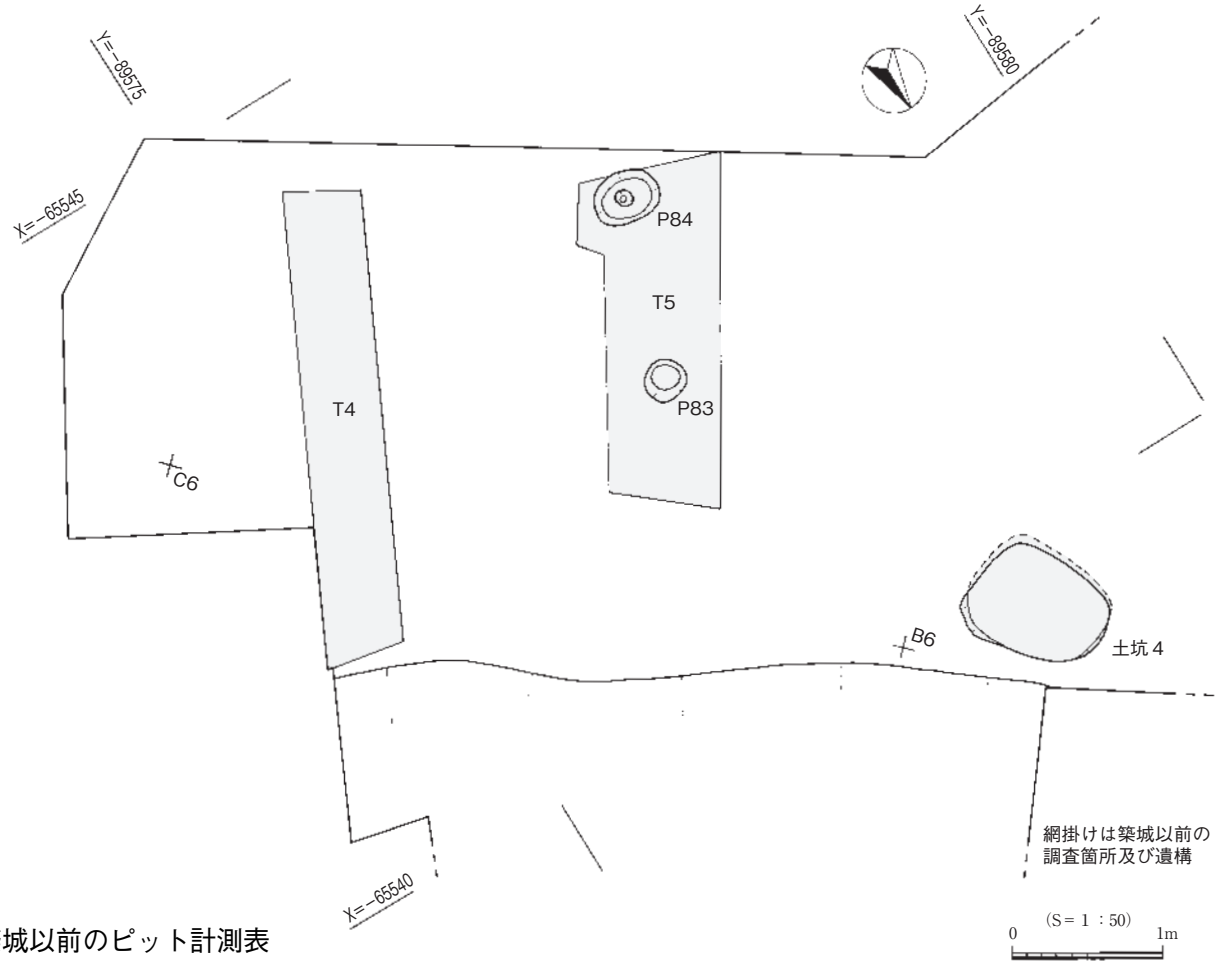
１．築城以前

築城以前には、土坑１基とピット２基を検出した。遺構内から遺物が出土していないため、帰属時期は特定できないが、土坑は袋状を呈しており、形態的特徴や埋土の状況から築城以前のものと考えられる。ピットも同じく埋土の状況から築城以前のものと考えられる。なお、各ピットの規模は第５図のピット計測表を参照されたい。

土坑４（第５図）

土坑４は、頂部平坦面の北東端のA5グリッドで検出した。北東側は削平されているが、平面形態は楕円形を呈し、断面形態は袋状を呈する。規模は上端で長径90㎝、短径66㎝、底面で長径90㎝、短径71㎝、深さは最大で36㎝を測り、埋土は褐色土の単層である。

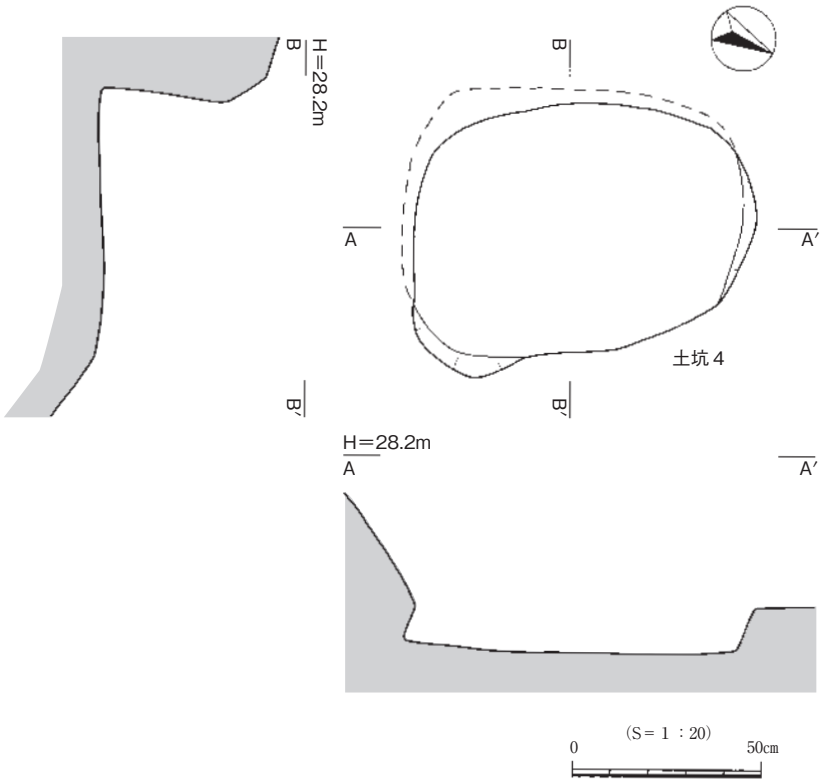
本遺構からは遺物が出土しなかったため、帰属時期は特定できないが、遺構の形態的特徴や埋土の



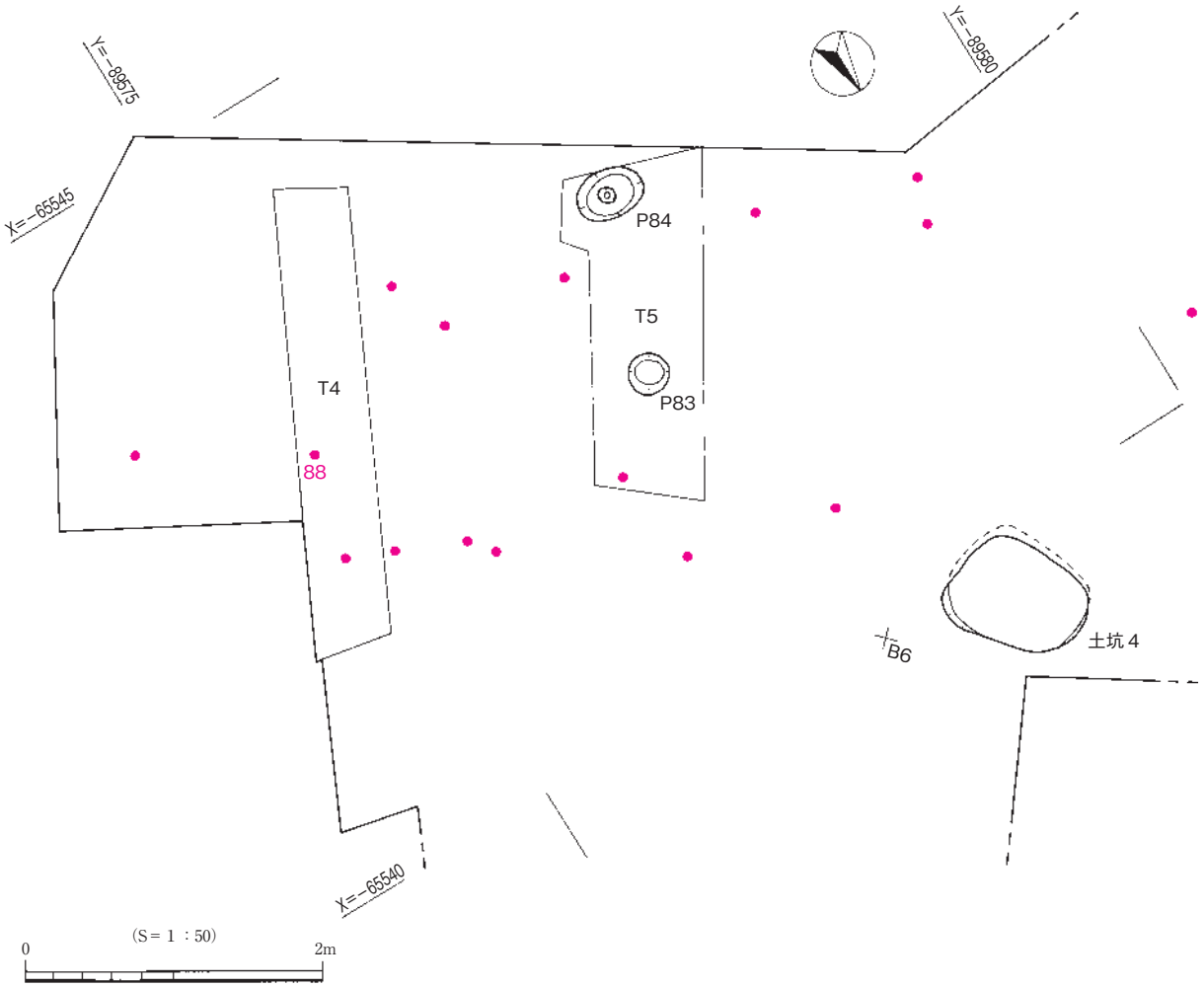
築城以前のピット計測表

（単位：cm）

P	長径	短径	深さ
83	30	29	24
84	43	35	9



第５図　築城以前の遺構分布図及び土坑４



第６図　築城以前の出土遺物分布図

状況から築城以前のものと考えられ、また、T4から緑色凝灰岩製の管玉、T5から古墳時代の土師器が出土していることから、弥生時代～古墳時代のいずれかに帰属する可能性がある。

２．Ⅰ　期

Ⅰ期には、腰郭４基、空堀、柵列１条を検出し、空堀２の埋土の状況から土塁の存在が想定される。頂部平坦面には北東―南西方向にのびる空堀２があり、空堀２の埋土の状況から、その北西側には土塁の存在が想定される。空堀２の南西側には土塁は存在しないと考えられ、柵列２を設けている。また、頂部平坦面の南西側には腰郭４と腰郭５が２段に構築され、北東側斜面には腰郭６と腰郭７の２郭が構築されている。

腰郭４（第10図）

腰郭４は、調査区の南西側で検出した。北西―南東方向にのび、南西側には腰郭５が隣接する。規模は検出した範囲で長さ4.8m、幅1.5～1.9m、頂部平坦面との比高差1.4mを測る。平坦面は地山を削り出しており、整地土は認められない。また、平坦面では遺構は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

腰郭５（第10、11図）

腰郭５は、調査区の南西端で検出した。北西―南東方向にのび、法面工事の関係で南東側は完掘できなかったが、規模は検出した範囲で長さ4.5m、幅2.3～3.7m、高さ0.5m、頂部平坦面との比高差1.9mを測る。平坦面は地山を削り出しており、整地土は認められない。埋土は上層が炭化物の混じる暗褐色土（Ⅱ期の腰郭４の拡張に伴う埋め立て土)、下層が暗褐灰色土で硬く締まっている。平坦面では10基のピットを検出したが、調査区の制約もあり、建物跡として断定できなかった。なお、各ピットの規模は、第10図のピット計測表を参照されたい。

遺物は、土師質土器と石製品が出土した。

１～４は土師質土器である。１は皿で、外傾して立ち上がり、底部外面には静止糸切りが施されている。２～４は坏身で、いずれも外傾して立ち上がり、３、４は摩滅のため不明であるが、２の底部外面には静止糸切りが施されている。

５は粘板岩製の碁石で、平面形態は楕円形を呈し、長さ2.0cm、幅1.3cm、厚さ0.6cmを測る。

腰郭６（第12、14、15図）

腰郭６は、北東側の斜面で検出した。北西側は調査区外にかかっているが、平面形態は弧形を呈すると考えられる。規模は検出した範囲で長さ2.4m、幅1.3m、頂部平坦面との比高差3.5mを測る。平坦面は地山を削り出しており、整地土は認められない。埋土は人為的に埋め立てられており、２、４、９層は硬く締まっており、版築状を呈する。

遺物は、陶器、土師質土器、石製品が出土した。

６は越前焼の甕で、口縁部は外反し、口縁端部は屈曲して上方へ立ち上がる。７は土師質土器の埦で、内湾して立ち上がり、外面には漆が付着している。

８はデイサイト製の茶臼の下臼の受け皿部で、台座から外開きに立ち上がり、腰部を曲げて端部を水平に成形している。内外面とも平滑に磨かれている。

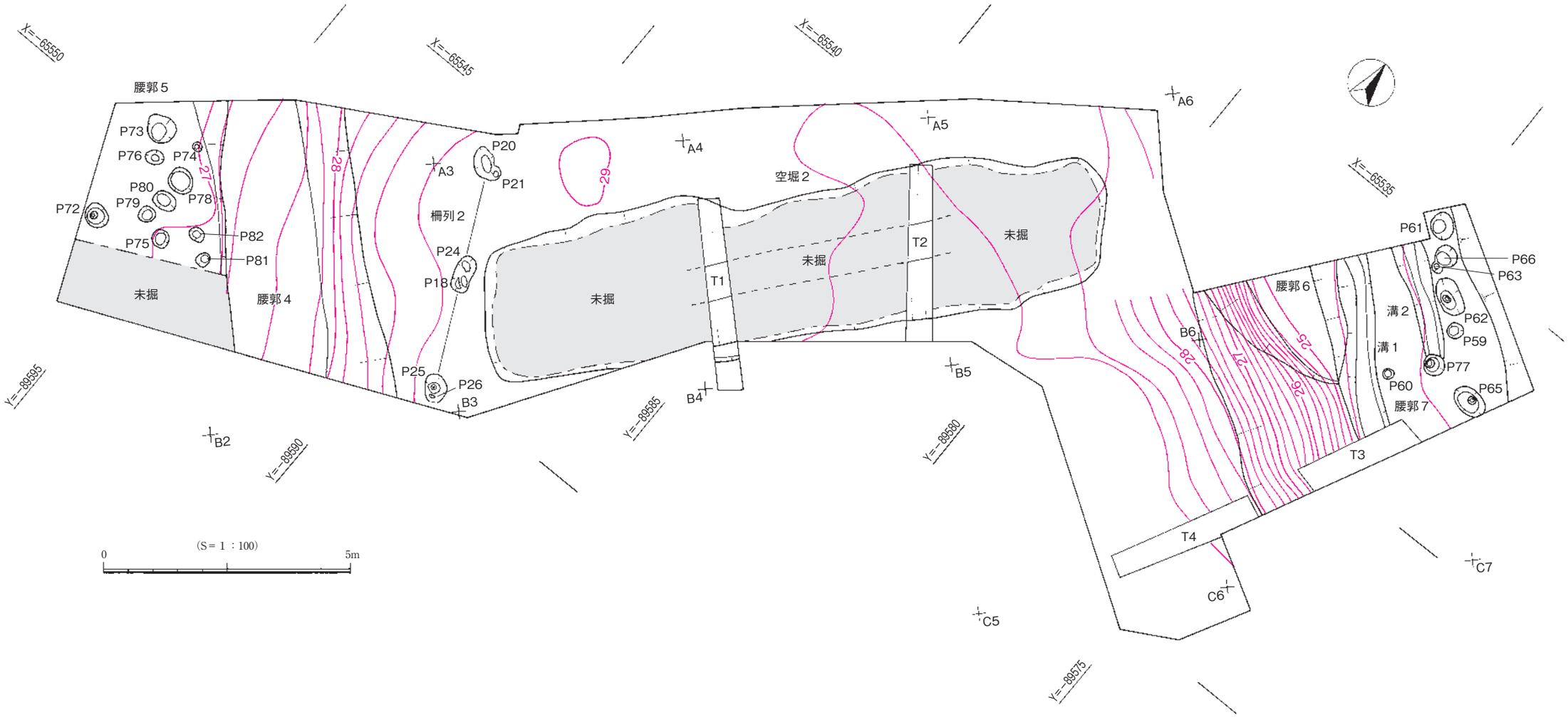
腰郭７（第13～15図）

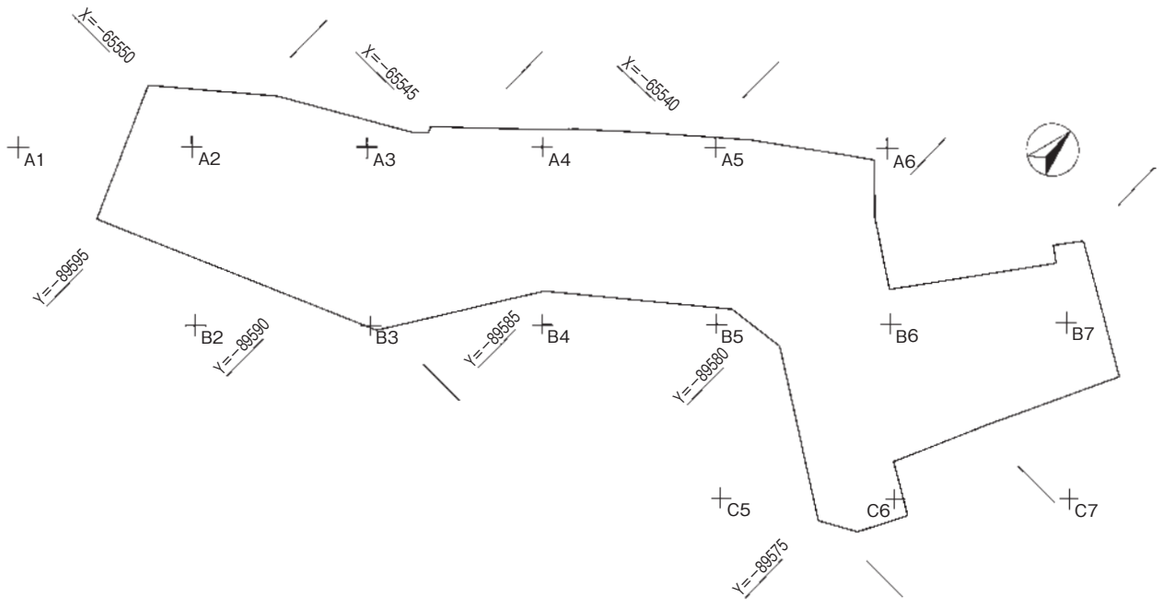
腰郭７は、北東側の斜面で検出した。北西―南東方向にのび、北東側は住宅団地造成工事により削平されているが、規模は検出した範囲で長さ4.2m、幅2.5～3.3m、頂部平坦面との比高差4.0mを測る。平坦面は地山を削り出しており、整地土は認められない。平坦面ではピット８基と溝２条を検出した。P65・59・62・66・61は一直線上に北西―南東方向に並んでおり、調査区の制約や住宅団地造成工事による削平により現状では確認できないが、建物跡が存在したと推察される。なお、溝２はこれらのピット列の南西側に隣接し、並行していることから、ピット列との関連が考えられる。また、平坦面の南西側では幅75～115cm、深さ20cmの排水用と考えられる溝（溝１）を検出した。なお、各ピットの規模は、第15図のピット計測表を参照されたい。

遺物は、青磁、土師質土器、石製品が出土した。

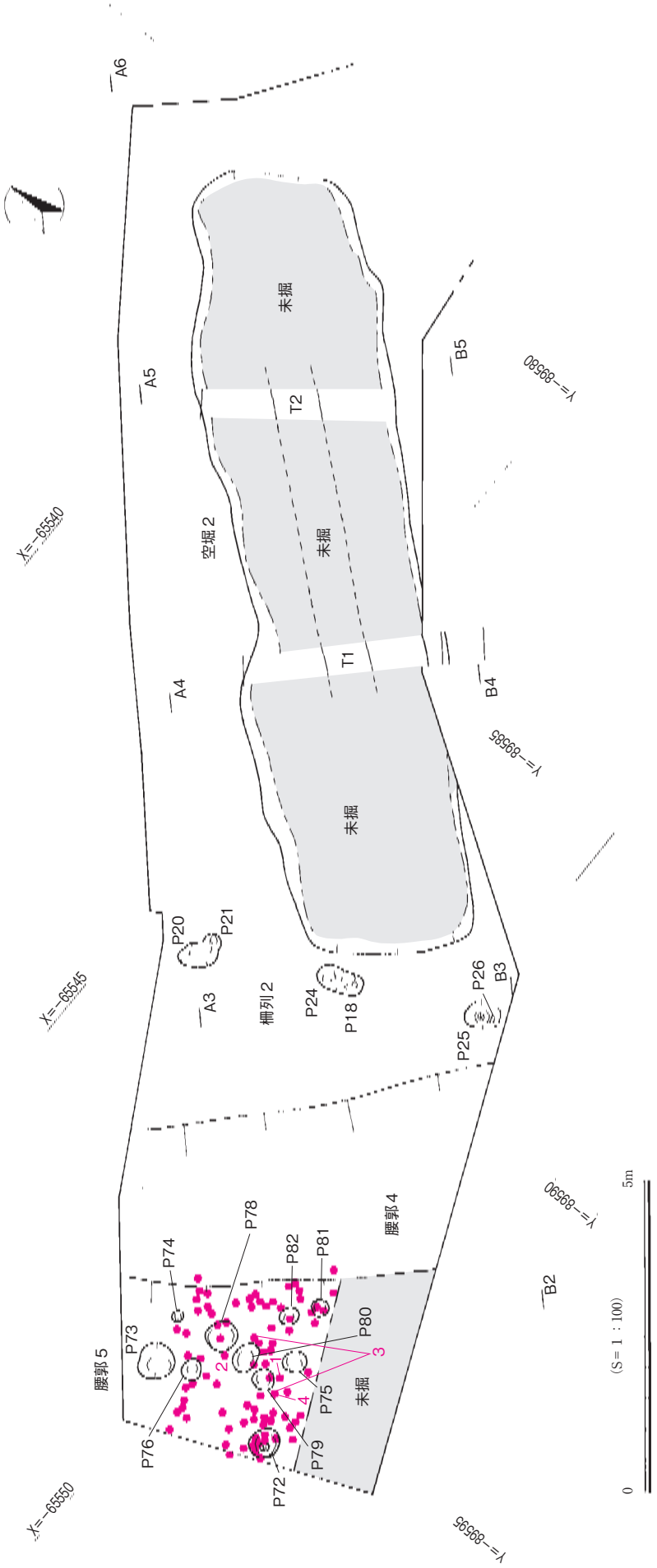
９はP62から出土した青磁の香炉の底部である。10はP77から出土した土師質土器の坏身で、外傾して立ち上がり、底部外面には糸切りが施されている。

11はデイサイト製の茶臼の下臼の受け皿部で、台座から外開きに立ち上がり、腰部を曲げて端部を水平に成形している。内面と端部は平滑に磨かれているが、外面は鑿状工具で削り出したままで未調

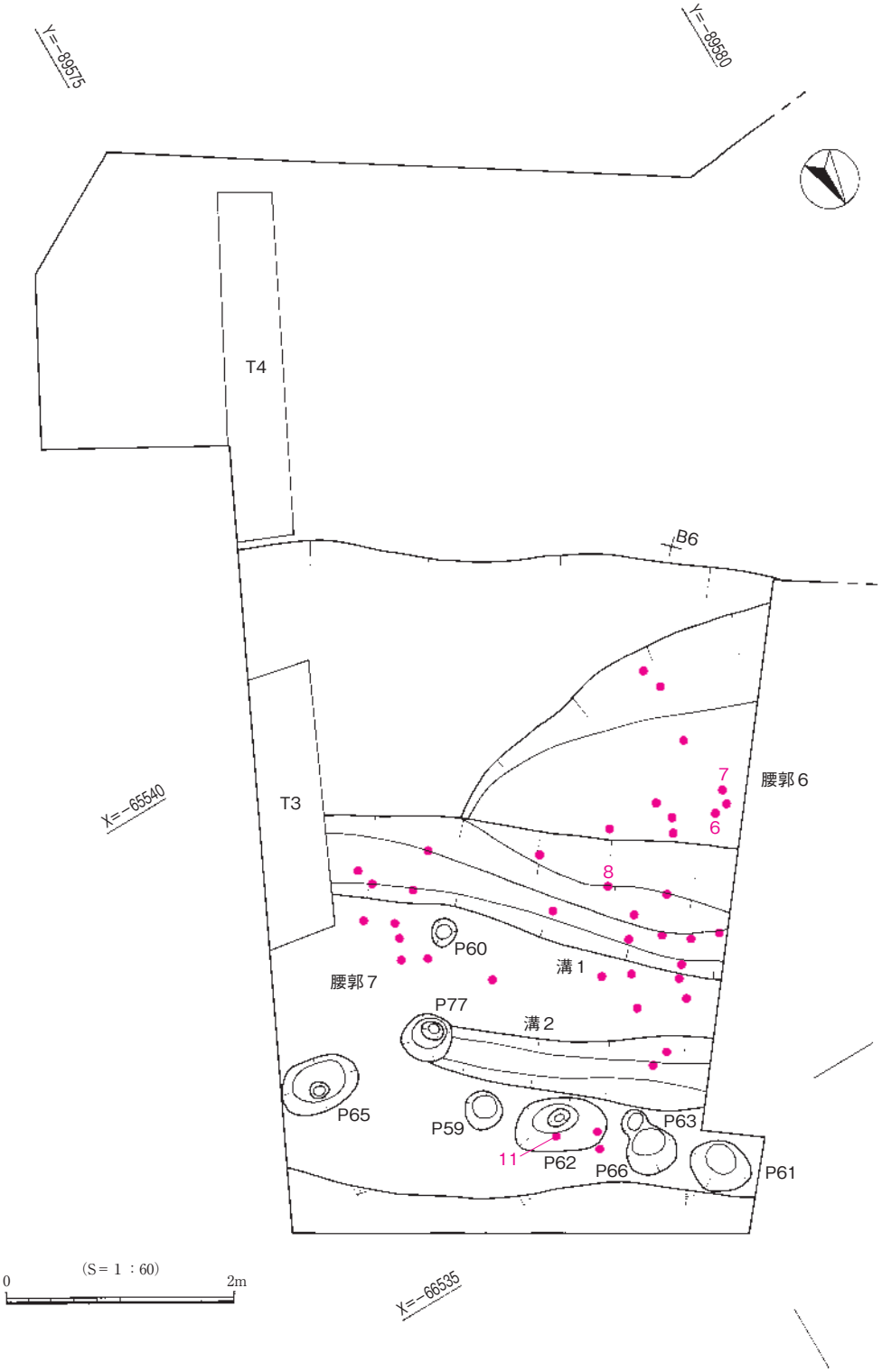




第７図　Ⅰ期の遺構分布図及びグリッド設定図



第８図　Ⅰ期　頂部平坦面出土遺物分布図

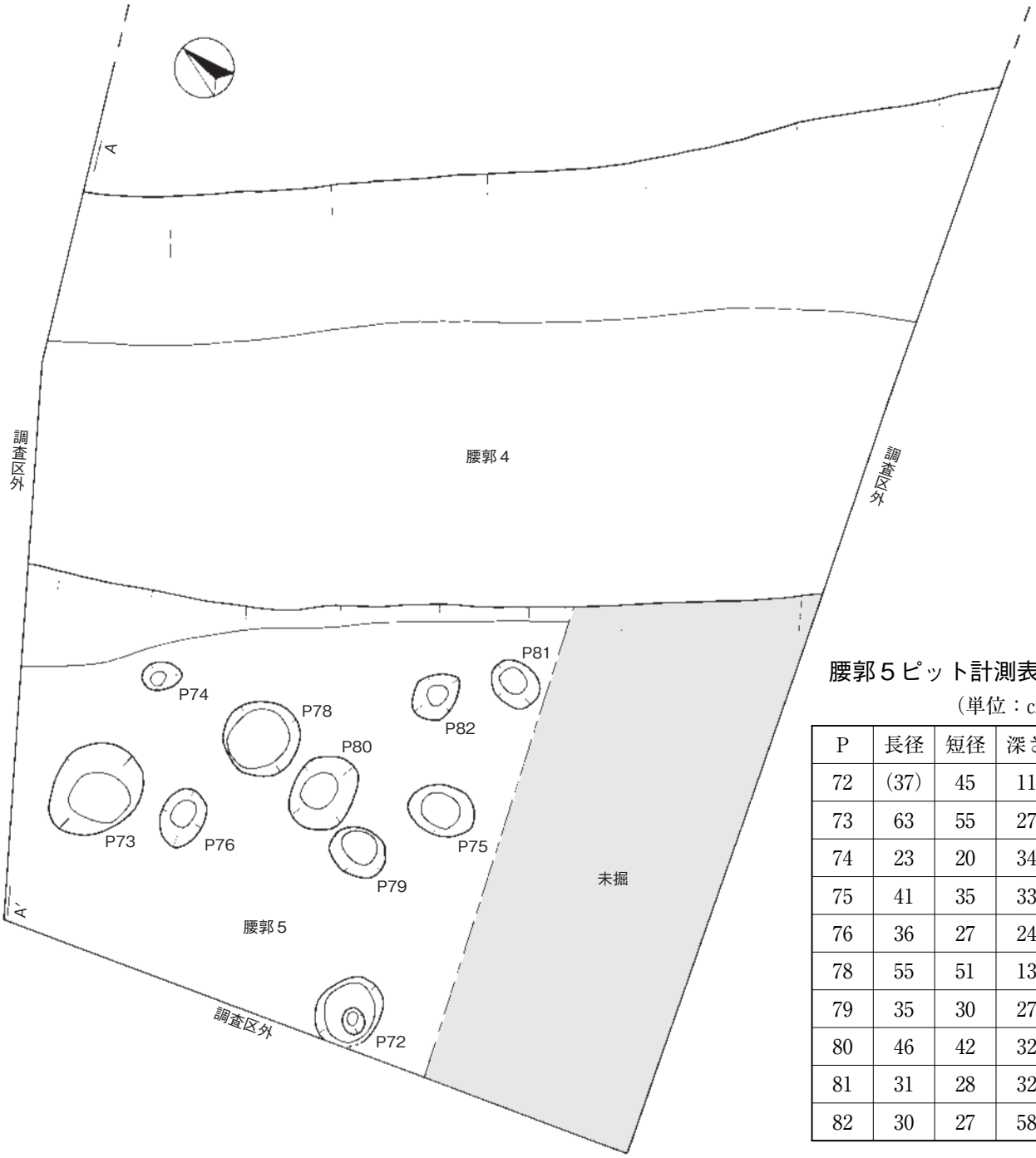


第９図　Ⅰ期　北東側斜面出土遺物分布図

整である。

空堀２（第16、17図）

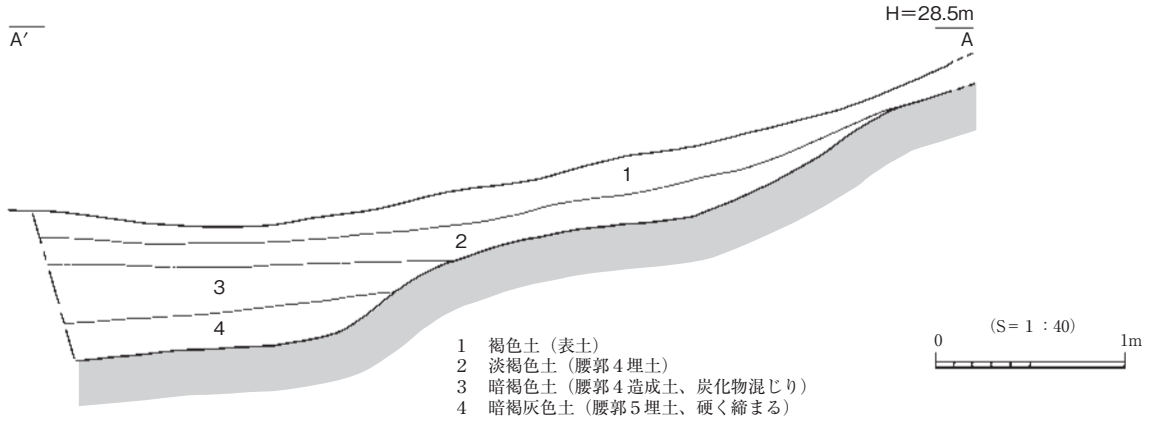
空堀２は、頂部平坦面のA3グリッドからA5グリッドにかけて検出した。北東―南西方向にのび、規模は長さ12.7m、上部幅2.5～3.2m、底面の幅はT1、T2とも0.7m、深さはT1、T2とも1.7mを測



腰郭５ピット計測表

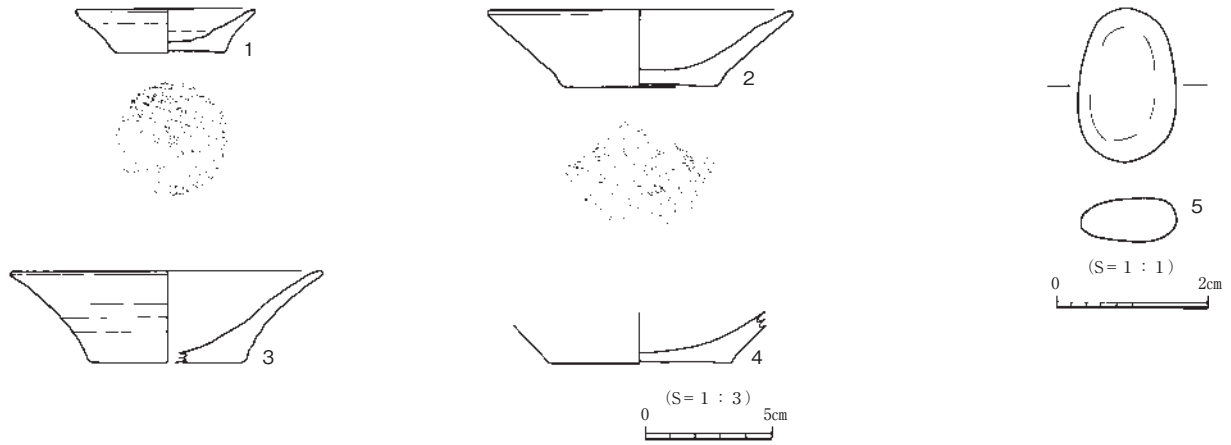
（単位：cm）

P	長径	短径	深さ
72	(37)	45	11
73	63	55	27
74	23	20	34
75	41	35	33
76	36	27	24
78	55	51	13
79	35	30	27
80	46	42	32
81	31	28	32
82	30	27	58

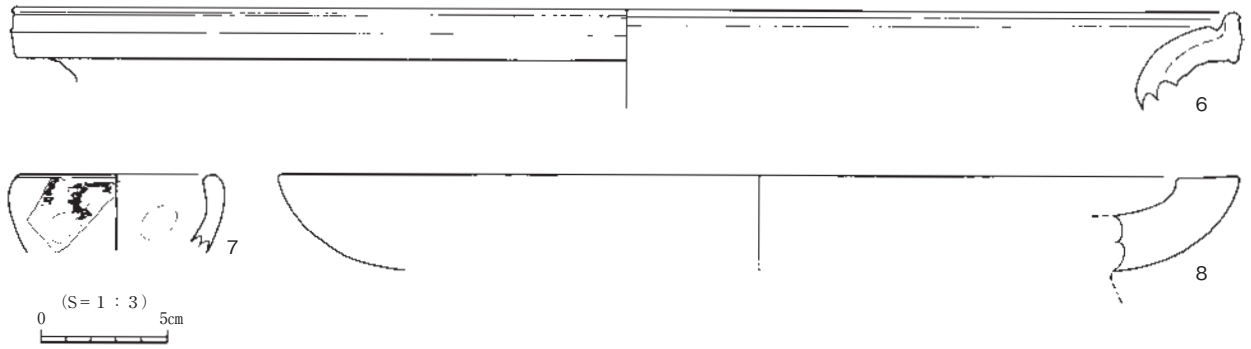


1　褐色土（表土）
2　淡褐色土（腰郭４埋土）
3　暗褐色土（腰郭４造成土、炭化物混じり）
4　暗褐灰色土（腰郭５埋土、硬く締まる）

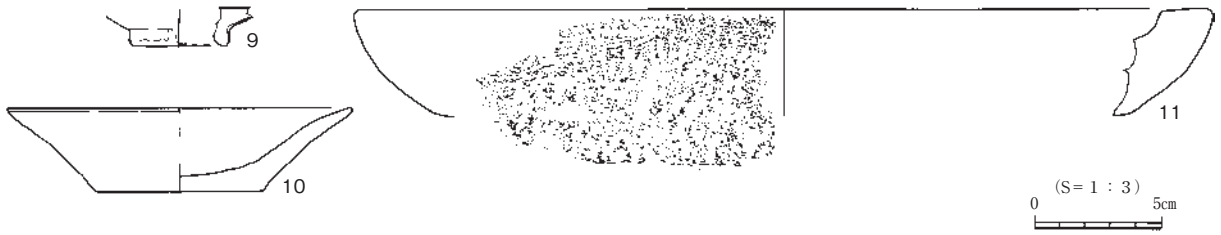
第10図　腰郭４、５



第11図　腰郭５出土遺物



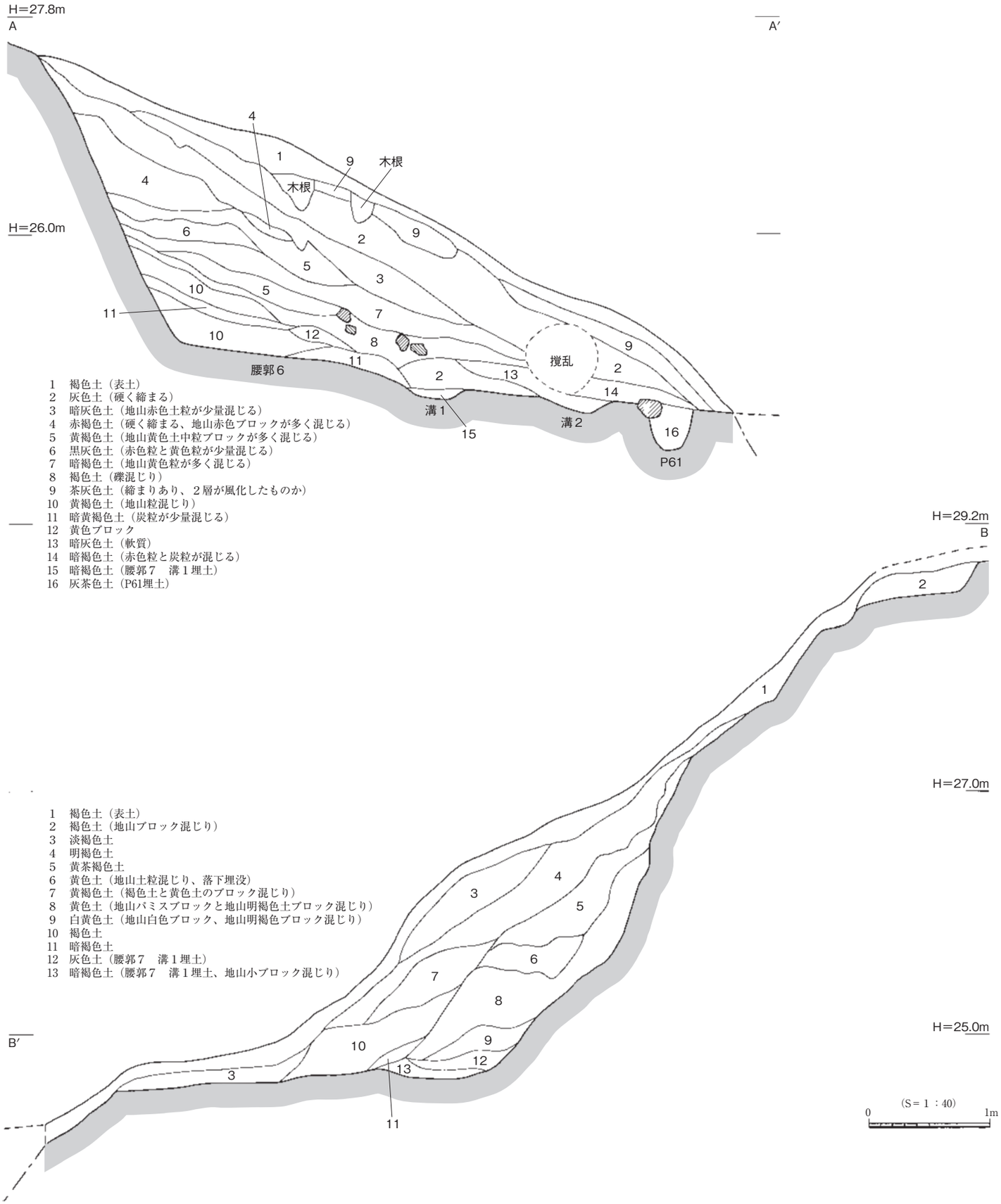
第12図　腰郭６出土遺物



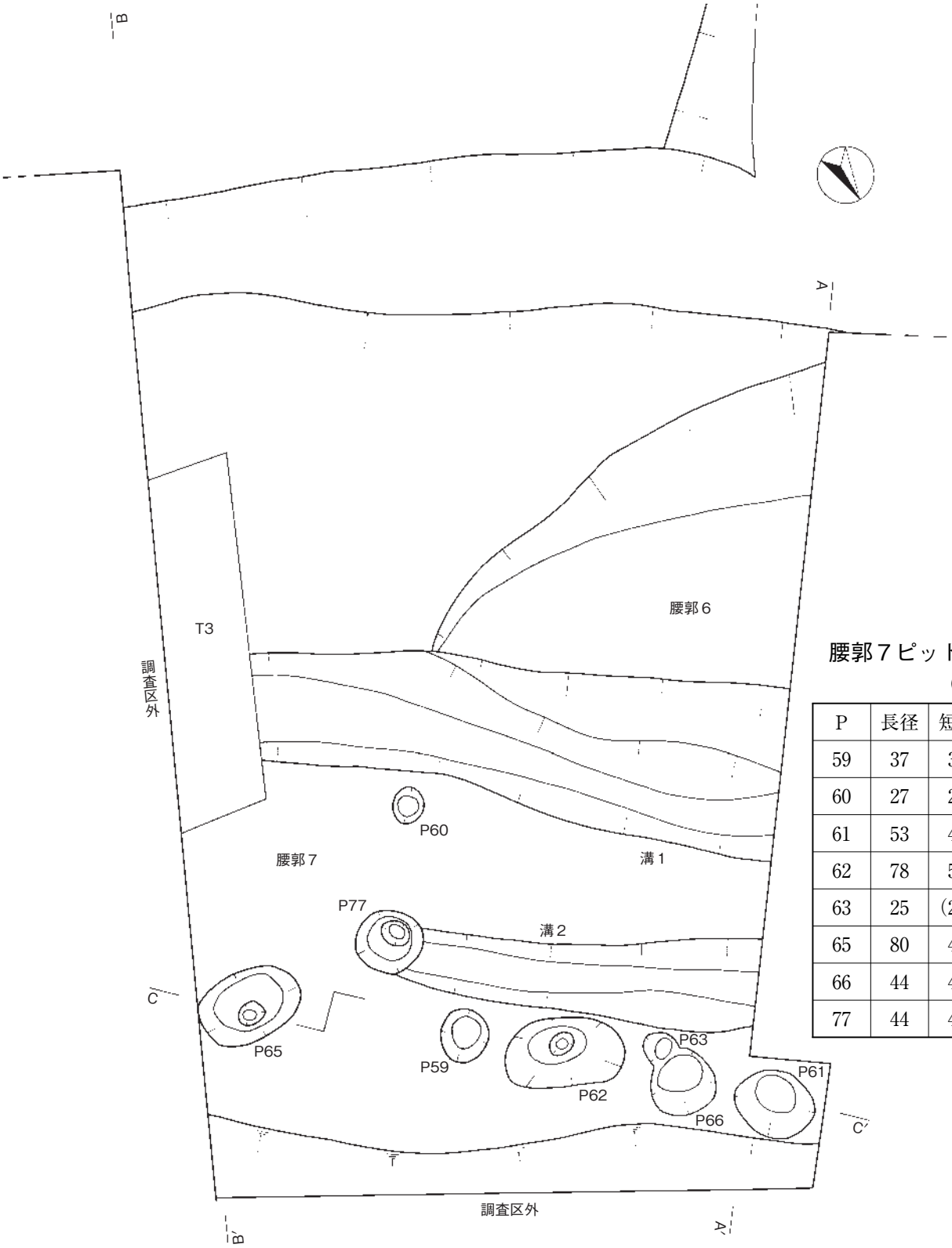
第13図　腰郭７出土遺物

る。空堀の掘形は直線的ではなく、楕円状の掘り込みが連続する形態となっていることから、複数の掘削者での掘削が窺える。

法面工事の関係で、完掘は行わず、断面形態と深さを確認するために、トレンチを２ヶ所（T1・T2）設定して調査を行い、それ以外は空堀２の北西側を工事の支障がない範囲で掘削を行った。断面形態は逆台形を呈し、埋土は下層には地山に由来する層（T1の14層、T2の５～８層）が北西から南東へ傾斜堆積していることから、空堀２の北西側に土塁の存在が想定される。地山に由来する堆積層の上層には地山ブロックが混じる層が堆積しており、人為的に埋め立てられている。



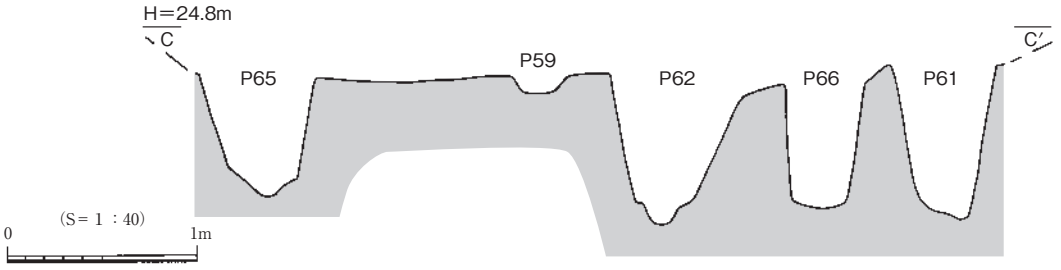
第14図　北東側斜面土層図



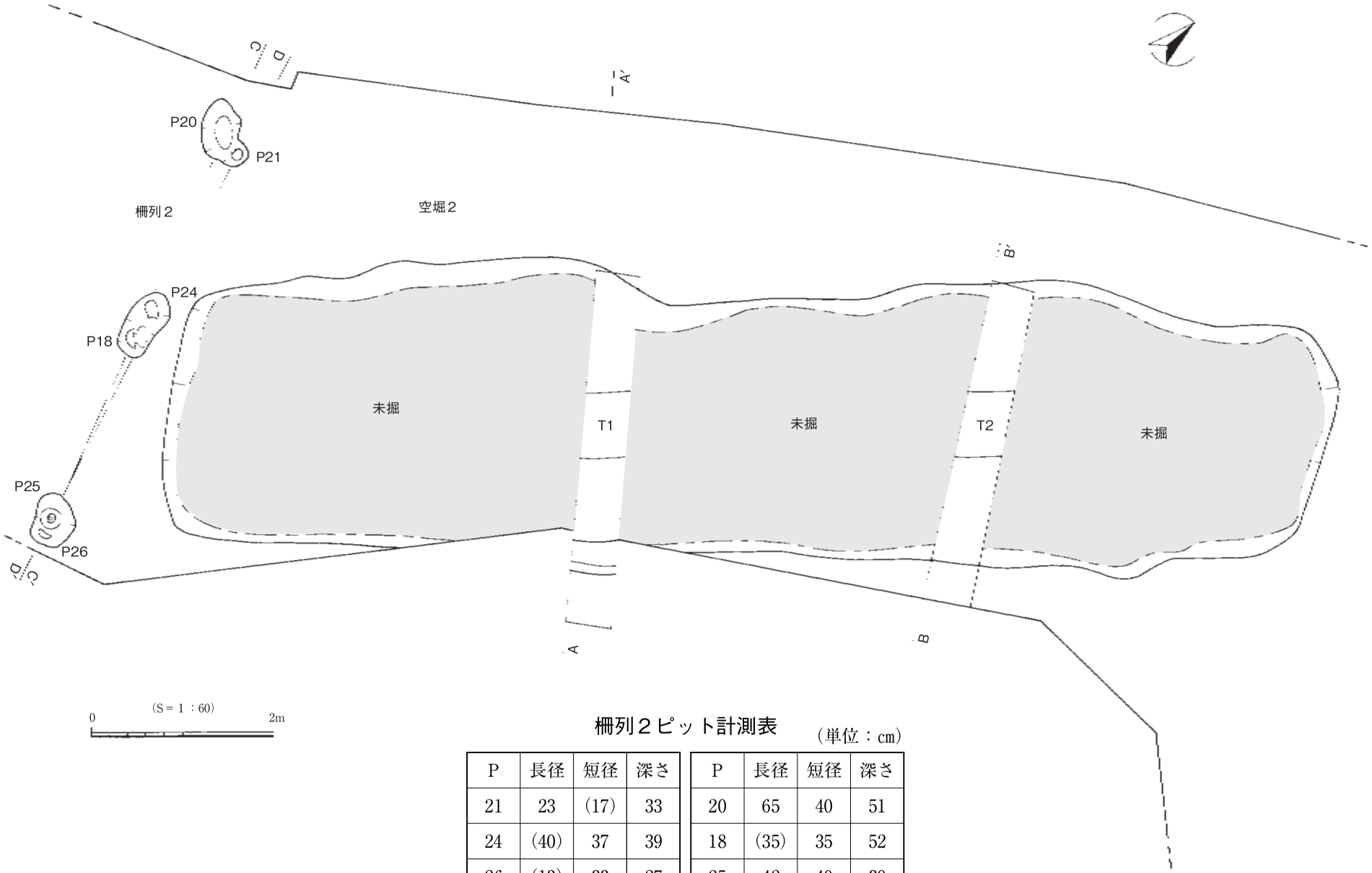
腰郭７ピット計測表

（単位：cm）

P	長径	短径	深さ
59	37	33	14
60	27	23	25
61	53	47	78
62	78	56	71
63	25	(20)	51
65	80	47	60
66	44	42	68
77	44	40	77



第15図　腰郭６、７



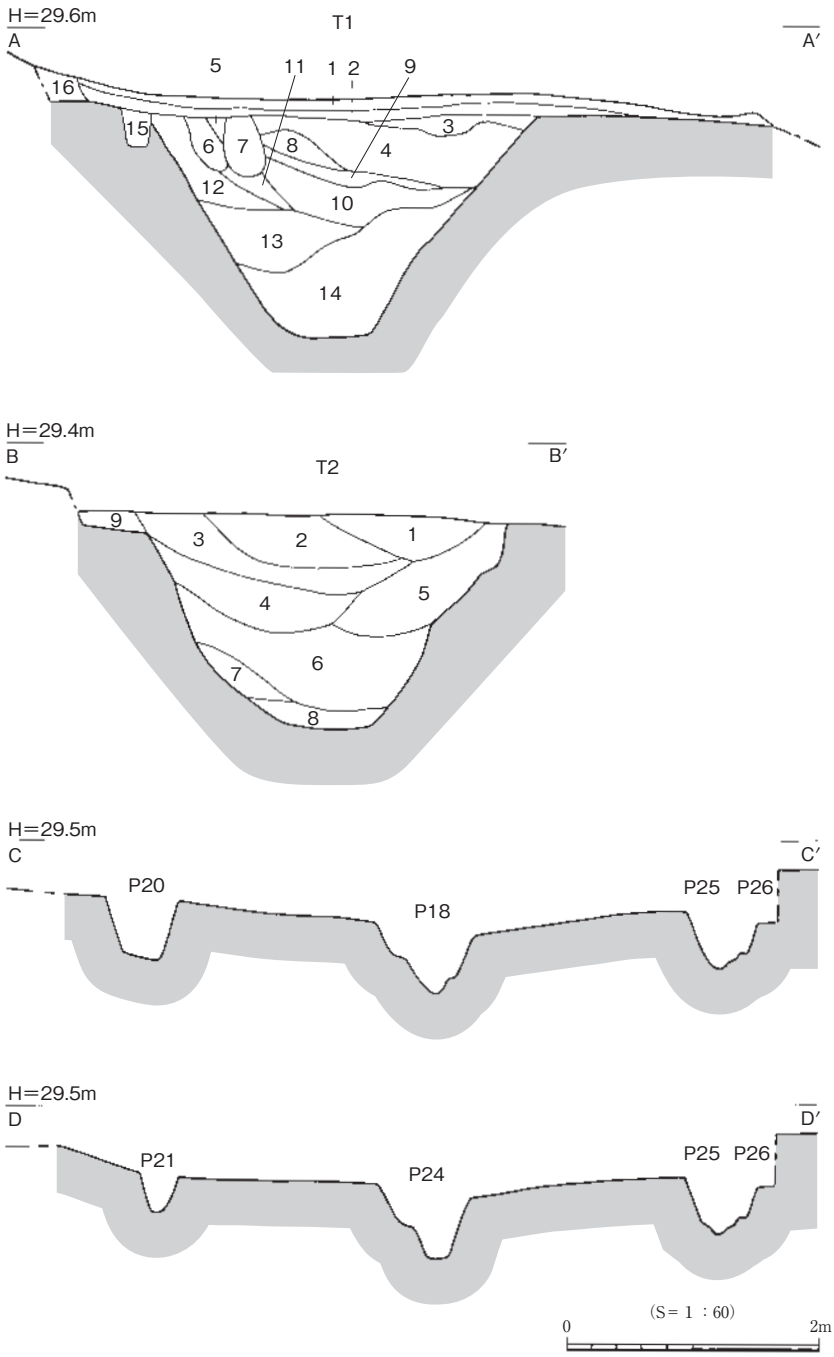
第16図　空堀２、柵列２平面図

柵列２ピット計測表

（単位：cm）

P	長径	短径	深さ
21	23	(17)	33
24	(40)	37	39
26	(13)	33	27

P	長径	短径	深さ
20	65	40	51
18	(35)	35	52
25	42	40	39



第17図　空堀２、柵列２断面図

土　塁

土塁は、空堀２の堆積状況から、空堀２の北西側に平行して、北東―南西方向にのびていたものと想定される。土塁の盛土はⅡ期に空堀２を埋め立てるために完全に削平されており、土塁の規模は不明である。なお、空堀２の南西側には柵列２があることから、空堀２の南西側には土塁は存在しなかったと考えられる。

柵列２（第16、17図）

柵列２は、空堀２の南西側で南北方向にのびる２間分（長さ5.3m）を検出した。いずれの柱穴も

２基の柱穴が切り合っており、建て替えが行われたと考えられるが、先後関係は確認できなかった。P21・24・26で構成される柵列の柱間距離はP21―P24間は1.9m、P24―P26間は2.7mを測り、主軸はN－24°－Wである。P20・18・25で構成される柵列の柱間距離はP20―P18間は2.4m、P18―P25間は2.2mを測り、主軸はN－26°－Wである。なお、各ピットの規模は、第16図のピット計測表を参照されたい。

遺物は、P24から土師質土器の細片が出土したが、図示することができなかった。

３．Ⅱ　期

Ⅱ期には、Ⅰ期の土塁を削平して、空堀２を埋め立てて、頂部平坦面の郭を拡張するとともに、頂部平坦面の南西側の腰郭４も拡張を行っている。また、北東側斜面では腰郭６を版築状に埋め立てており、版築状に埋め立てる過程で段状遺構を３基検出した。

郭１（第21～26図）

郭１は、出丸の頂部平坦面の郭で、標高28.5～29.0mを測る。当該期には、Ⅰ期の土塁を削平して、空堀２を埋め立てて郭を北西側に拡張している。拡張された郭１の平坦面ではピットを54基検出したが、建物跡や柵列として断定できるものはなかった。空堀２の人為的な埋め立て土上面から掘り込まれているため、検出が困難であり、空堀２の掘削中に検出したものもあり、他にも検出しきれていないピットが存在するものと思われる。ピットは深く掘り込まれたものや、P14のように柱の根固めとして用いられたと考えられる礫や陶磁器がピット内に据え付けられているものもあることから、建物跡あるいは柵列が存在した可能性がある。各ピットの規模は、第18図のピット計測表を参照されたい。なお、A4グリッドのP1の北東側では、長さ45㎝、幅23㎝を測る焼土面を検出した。

第21図は、郭を拡張するために空堀２を埋め立てた造成土から出土したものである。

12は上田分類の青磁碗B4類で、外面には線描きによる蓮弁文が施文されている。

13は備前焼の壺の肩部から胴部にかけての部分で、外面には、肩部に１条の沈線、胴部に４条の波状文が施されている。乗岡編年の中世6a期に比定される。

14～18は土師質土器である。14は皿で、底部外面には静止糸切りが施されている。15～18は坏身で、いずれも外傾して立ち上がり、15は摩滅のため不明であるが、それ以外の底部外面には静止糸切りが施されている。

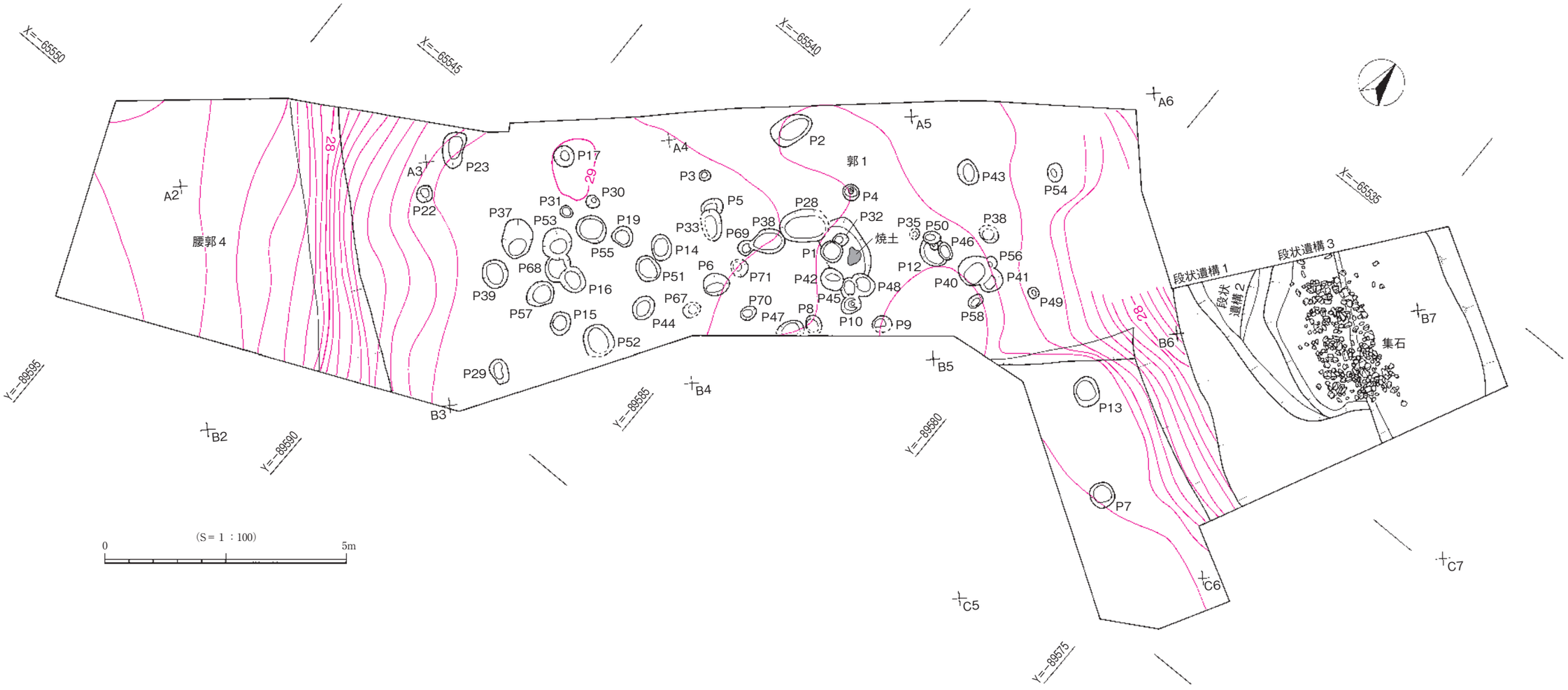
19、20は須恵器の坏身である。19は受け部を有するもので、受け部は外上方へのび、口縁端部は丸くおさまる。

21～23は粘板岩製の碁石である。平面形態は楕円形を呈し、長さ1.6～2.4㎝、幅1.2～1.7㎝、厚さ0.45～0.7㎝を測る。

24は甲冑に用いられる鉄小札で、２枚が綴じ合わされた状態となっている。横は２列に７㎜、縦は６列に７～８㎜間隔で、直径３～４㎜の孔が穿たれている。

第22図は、郭１から出土したものである。

25～27は青磁で、25、26は碗である。25は上田分類の青磁碗E類で、外面には１条の沈線文が施文されている。26はP40から出土した上田分類の青磁碗C2類で、外面には雷文帯が施文されている。27はP1から出土したもので、器種は不明であるが、口縁端部が大きく外方へ屈曲し、外面には線描き

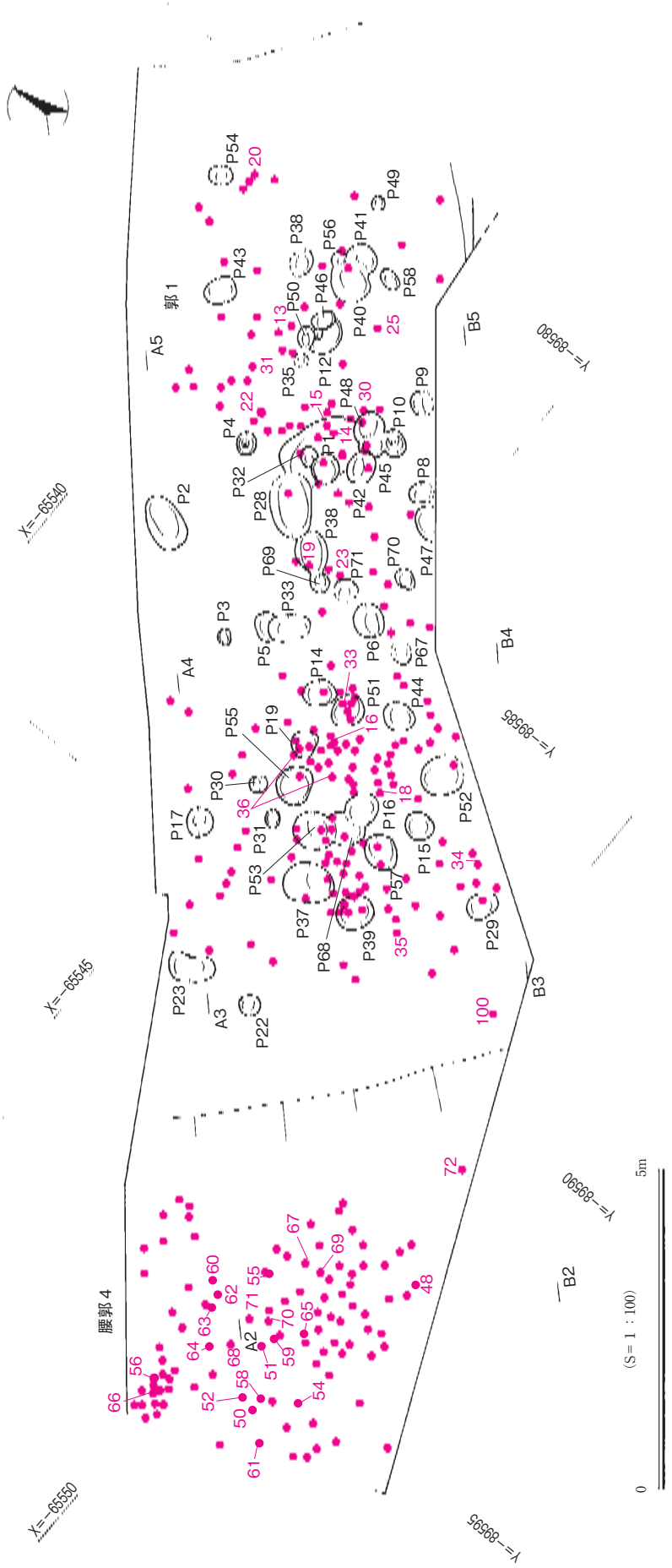


郭１ピット計測表

（単位：cm）

P	長径	短径	深さ	P	長径	短径	深さ	P	長径	短径	深さ	P	長径	短径	深さ	P	長径	短径	深さ	P	長径	短径	深さ
1	51	49	24	10	43	35	32	23	73	47	50	37	77	66	64	46	38	30	48	55	70	54	13
2	87	56	25	12	64	56	19	28	94	65	21	38	35	(21)	44	47	(55)	(22)	15	56	28	(16)	17
3	22	18	12	13	63	54	24	29	50	35	43	39	59	43	42	48	(46)	47	23	57	58	49	28
4	32	29	37	14	53	41	44	30	31	26	22	40	73	60	45	49	23	21	29	58	33	27	39
5	50	38	18	15	49	40	13	31	28	28	10	41	46	(38)	63	50	38	25	49	67	(30)	(18)	47
6	56	46	35	16	55	52	24	32	(113)	99	24	42	48	43	38	51	56	49	26	68	(60)	53	53
7	56	50	27	17	44	38	17	33	(67)	(43)	62	43	51	46	33	52	(59)	60	14	69	35	30	28
8	34	(25)	17	19	47	43	26	35	(24)	(9)	28	44	51	44	58	53	66	54	58	70	34	28	40
9	38	(14)	28	22	34	30	24	36	70	51	56	45	43	38	28	54	38	32	27	71	(25)	(20)	46

第18図　Ⅱ期の遺構分布図



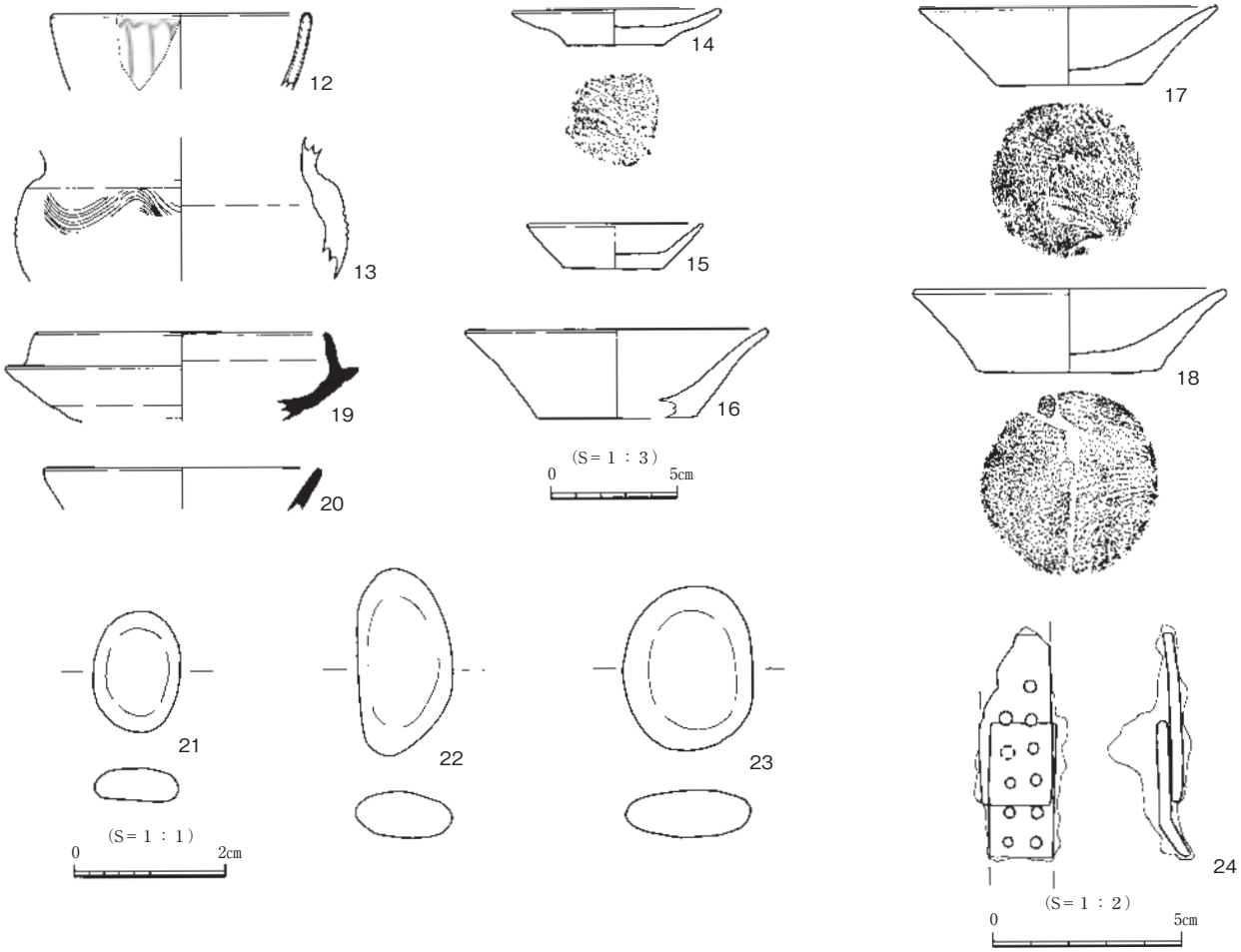
第19図　Ⅱ期　頂部平坦面出土遺物分布図

第20図　Ⅱ期　北東側斜面出土遺物分布図

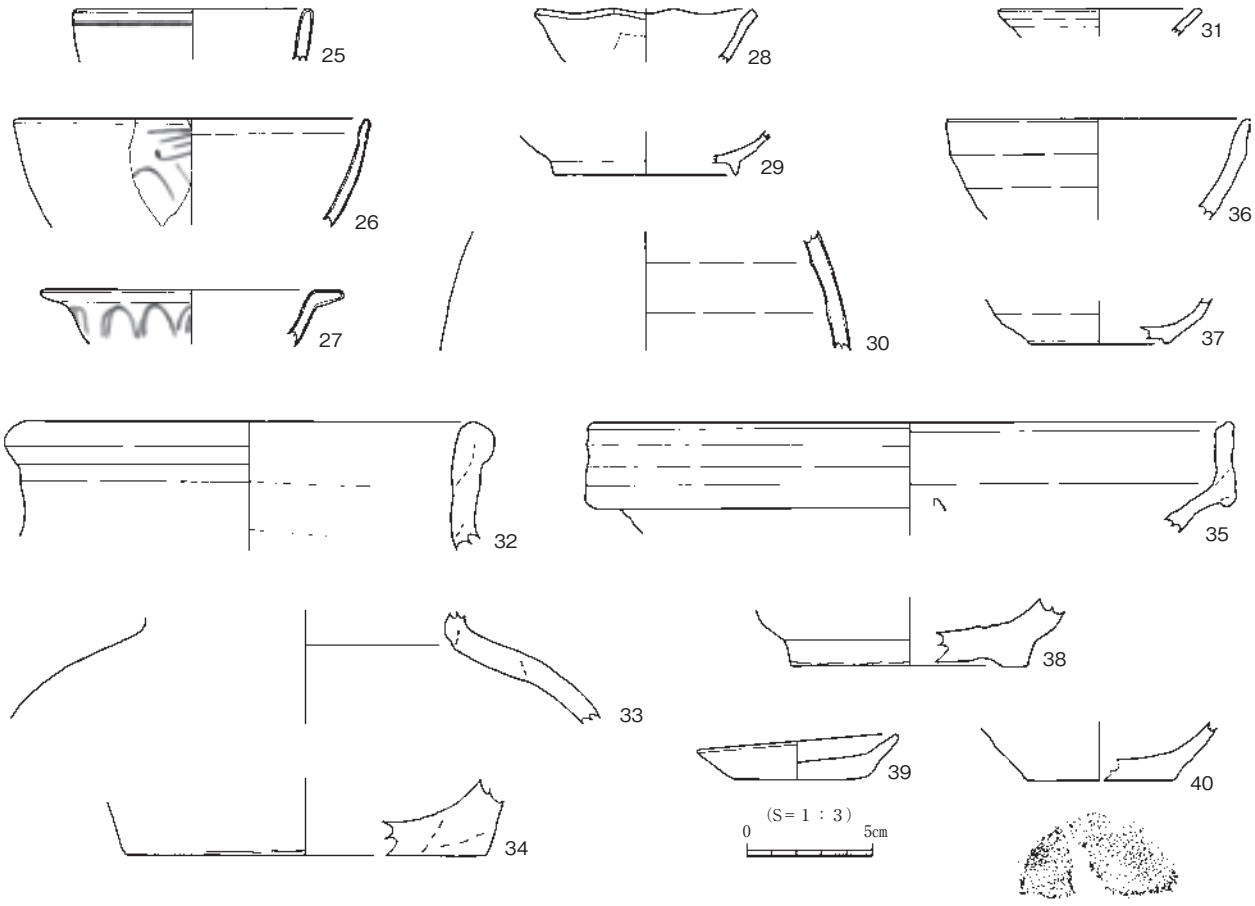
による蓮弁文が施文されている。

28～30は白磁である。28は森田分類のD群の皿で、口縁端部に稜をもつ。29は分類不明の皿である。30は壺の肩部で、内外面には貫入がある。産地は朝鮮半島である。31は朝鮮半島産の皿である。

32～35は備前焼である。32～34は壺で、32は口縁部が直立し、口縁端部外面を肥厚させている。乗岡編年の中世5b期に比定される。33は肩部、34は底部である。35は擂鉢で、口縁部は僅かに内傾し、口縁端部は外傾する面をもつ。口縁帯下角は鈍く垂下する。乗岡編年の中世6a期に比定される。36、37は瀬戸・美濃焼で、36は碗、37は皿である。なお、37はP43から出土した。38は瓷器系陶器の甕の



第21図　郭１造成土出土遺物



第22図　郭１出土遺物

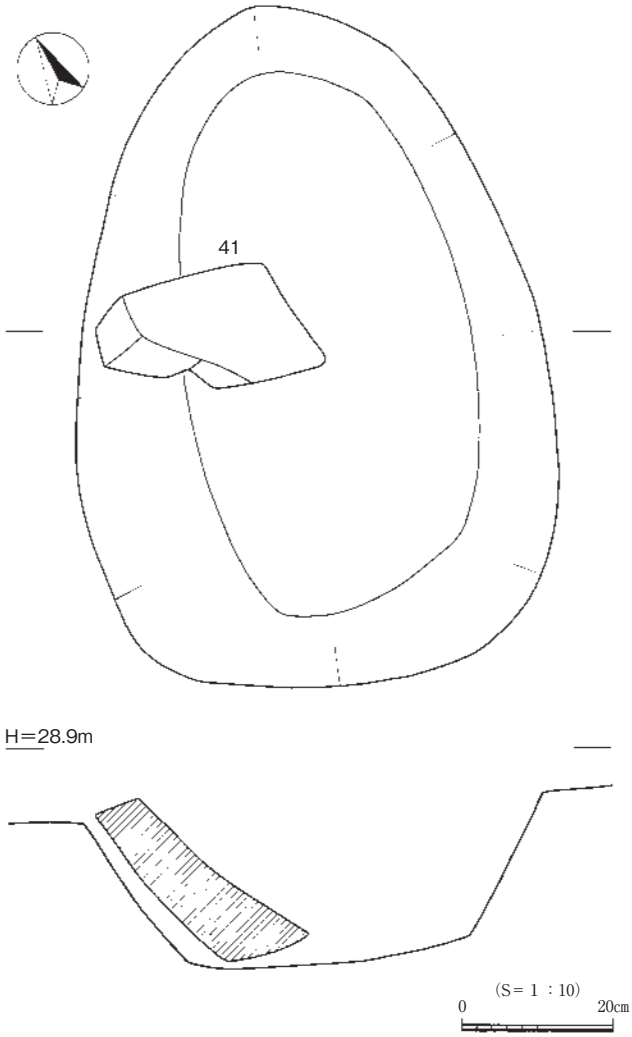
底部で、高台を削り出している。

39、40は土師質土器で、39はP52から出土した皿、40はP32から出土した坏身である。39は摩滅のため不明であるが、40の底部外面には静止糸切りが施されている。

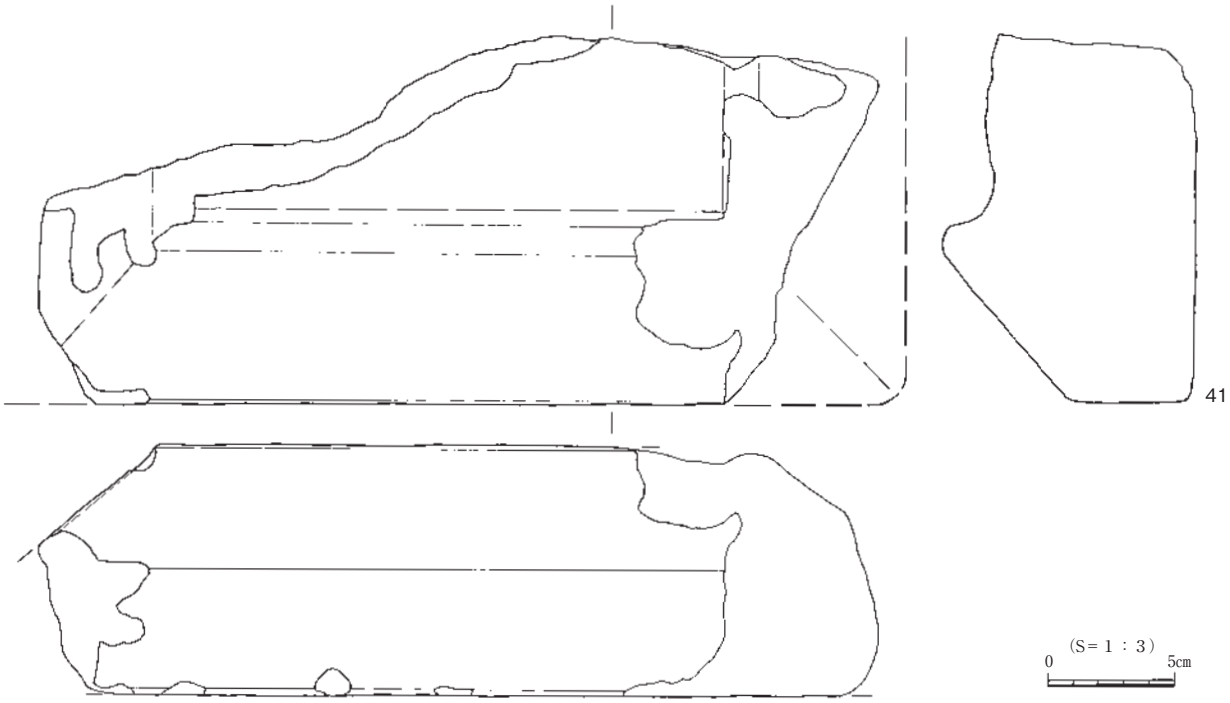
第24図は、P2から出土したものである。41は凝灰質砂岩(来待石)製の燈篭の中台で、上面には火袋を据え付けるための方形の刳り込みがある。近代以降に混入したものと考えられる。

第26図は、P14から出土したものである。42は青磁の盤で、口縁端部に稜を持ち、外面には丸ノミによる蓮弁文、内面には３条の波状文が施文されている。43は褐釉陶器の壺の肩部で、産地は中国南方系か。

44～47は備前焼の壺である。44は口縁部から肩部にかけての部分で、口縁部は僅かに外傾し、口縁端部外面を僅かに肥厚させている。45は肩部から胴部にかけての部分で、肩部には３条の波状文、胴部には４条の沈線を巡らせている。乗岡編年の中世6a期に比定さ



第23図　P2礫（燈篭）出土状況図



第24図　P2出土遺物

れる。46、47は底部である。

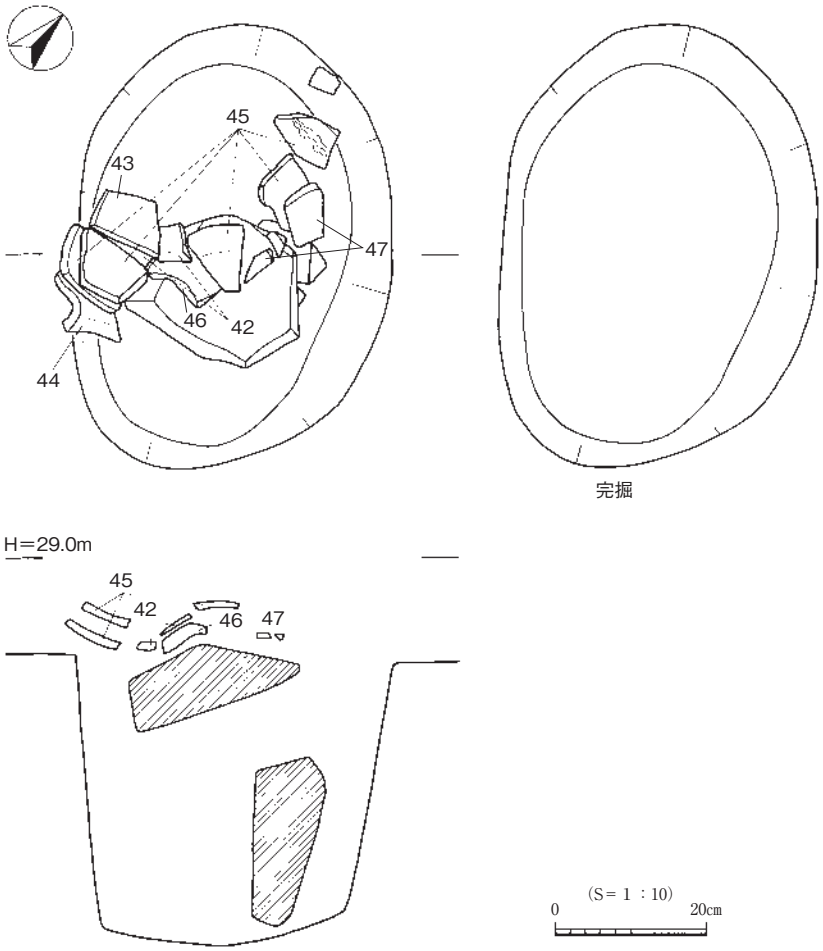
本遺構の帰属時期は、出土遺物から16世紀前半～中頃と考えられる。

腰郭４（第10、27、28図）

腰郭４は、調査区の南西側で検出した。北西―南東方向にのび、Ｉ期の腰郭５を埋め立てて、南西側に2.3～3.7m拡張している。規模は検出した範囲で長さ4.8m、幅3.8～5.6m、頂部平坦面との比高差1.5mを測る。埋土は淡褐色土の単層である。

第27図は、腰郭４の拡張に伴う造成土から出土したものである。

48、49は青磁である。48は上田分類の青磁碗C2類で外面には簡略化された雷文帯が施文されている。49は稜花皿で、口縁端部に稜を持ち、内面には３条の波状文が施文されている。



第25図　P14遺物出土状況図

50～53は青花皿である。50～52は小野分類の染付皿B1群で、50の外面には牡丹唐草文が施文されている。51の外面には牡丹唐草文、内面には一重圏線が施文され、52の外面には牡丹唐草文と一重圏線、内面には二重圏線が施文されている。53は小野分類の染付皿E群で、外面には口縁部と底部にそれぞれ一重圏線、内面には口縁部に一重圏線、見込みには一重圏線と海老が施文されている。

54は朝鮮半島産の粉青沙器の皿である。

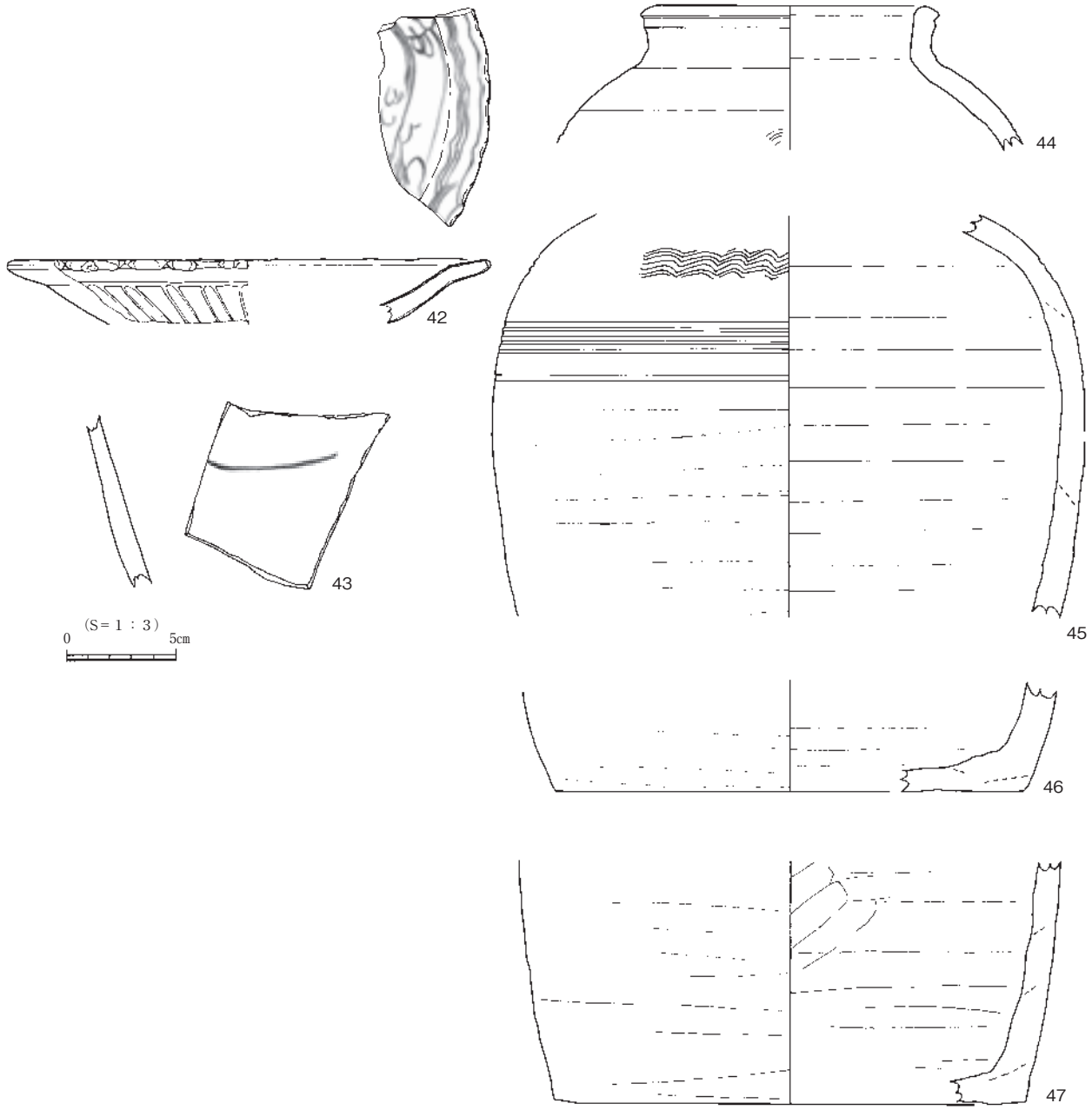
55、56は備前焼である。55は甕の口縁部で、口縁部は直立し、扁平な口縁帯を持つ。乗岡編年の中世5b期に比定される。56は徳利の口縁部から頸部にかけての部分で、乗岡編年の中世6a期に比定される。

57～65は土師質土器である。57～60は皿で、いずれも外傾して立ち上がり、57と59は摩滅のため不明であるが、58と60の底部外面には静止糸切りが施されている。58は内外面に煤がタール状に付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。61～65は坏身で、いずれも外傾して立ち上がり、61と63は摩滅のため不明であるが、62、64、65の底部外面には静止糸切りが施されている。62は外面に煤がタール状に付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。

第28図は、腰郭４の埋土から出土したものである。

66は白磁で、森田分類のB群あるいはC群の皿である。

67、68は備前焼である。67は壺で、口縁部は僅かに外傾し、口縁端部外面を肥厚させている。68は



第26図　P14出土遺物

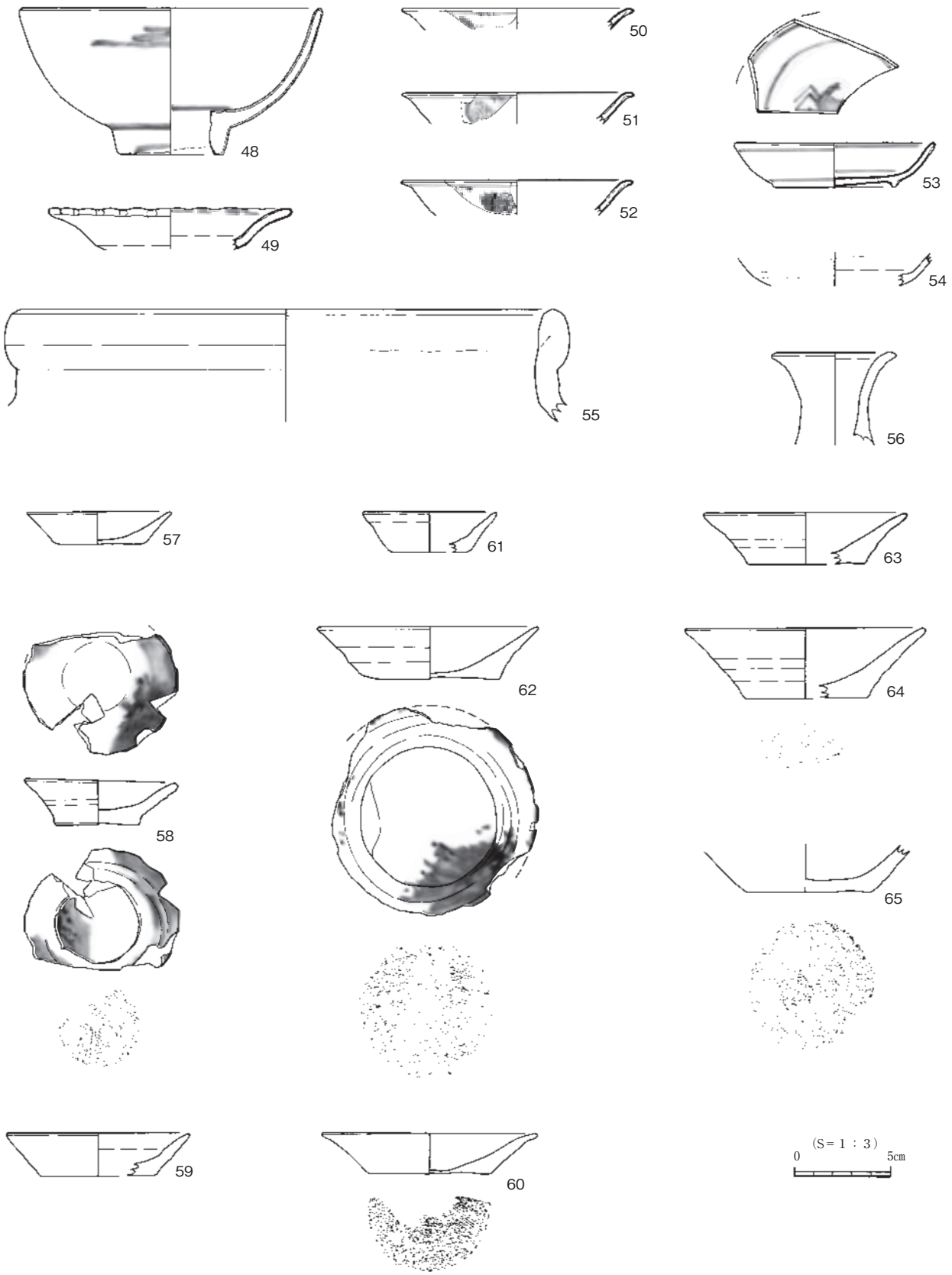
擂鉢で、口縁部は僅かに内傾する。口縁帯には５条の凹線が巡り、内面には７条１単位の擂り目がある。乗岡編年の中世6a期に比定される。69は瀬戸・美濃焼の壺の胴部で、外面には４条の沈線が巡る。70、71は京都系の土師質土器の皿である。

72は凝灰質砂岩（来待石）製の燈篭の火袋で、側面には円形と方形の刳り込みがある。

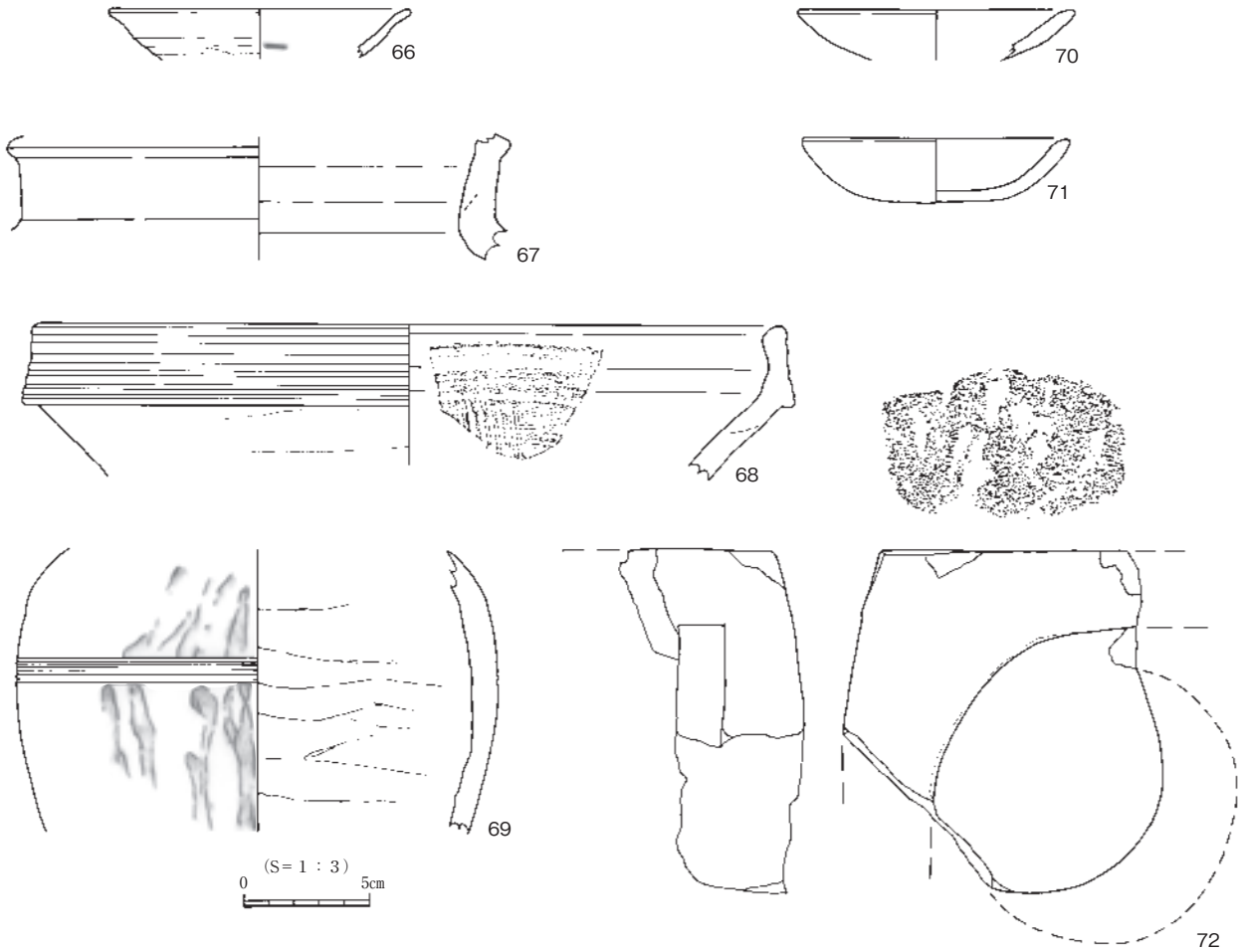
本遺構の帰属時期は、出土遺物から16世紀前半～中頃と考えられる。

段状遺構１（第29図）

段状遺構１は、北東側斜面の標高26.1～27.2mで検出した。Ⅱ期には北東側斜面では上下に３段連



第27図　腰郭４造成土出土遺物



第28図　腰郭４出土遺物

続して段状遺構が築かれており、段状遺構１はそのうち、最も上部に位置する段状遺構である。北西側は調査区外にかかっているが、平面形態は弧形を呈すると考えられる。規模は検出した範囲で長さ1.6m、幅1.4m、深さは最大で0.75m、頂部平坦面との比高差1.4mを測る。

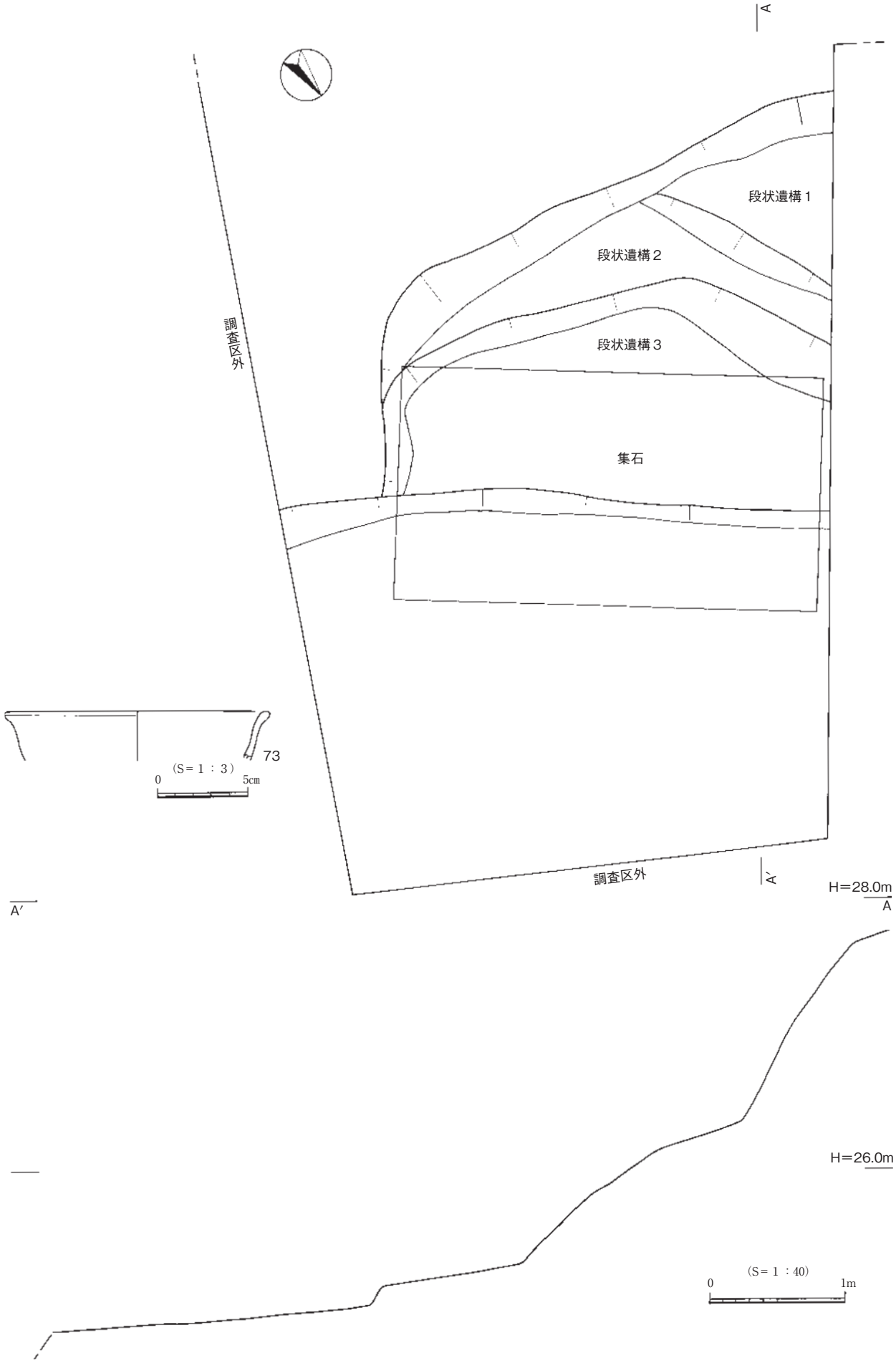
遺物は、青磁が出土した。73は上田分類の青磁碗D類である。

本遺構の帰属時期は、段状遺構３との位置的関係から16世紀前半～中頃と考えられる。

段状遺構２（第29図）

段状遺構２は、段状遺構１の北東側に隣接する。北西側は調査区外にかかっているが、平面形態は逆V字状を呈すると考えられる。規模は検出した範囲で長さ3.3m、幅は最大で0.8m、深さは最大で0.2mを測る。

本遺構からは遺物は出土しなかったが、段状遺構３との位置的関係から16世紀前半～中頃に帰属すると考えられる。



第29図　段状遺構１～３及び段状遺構１出土遺物

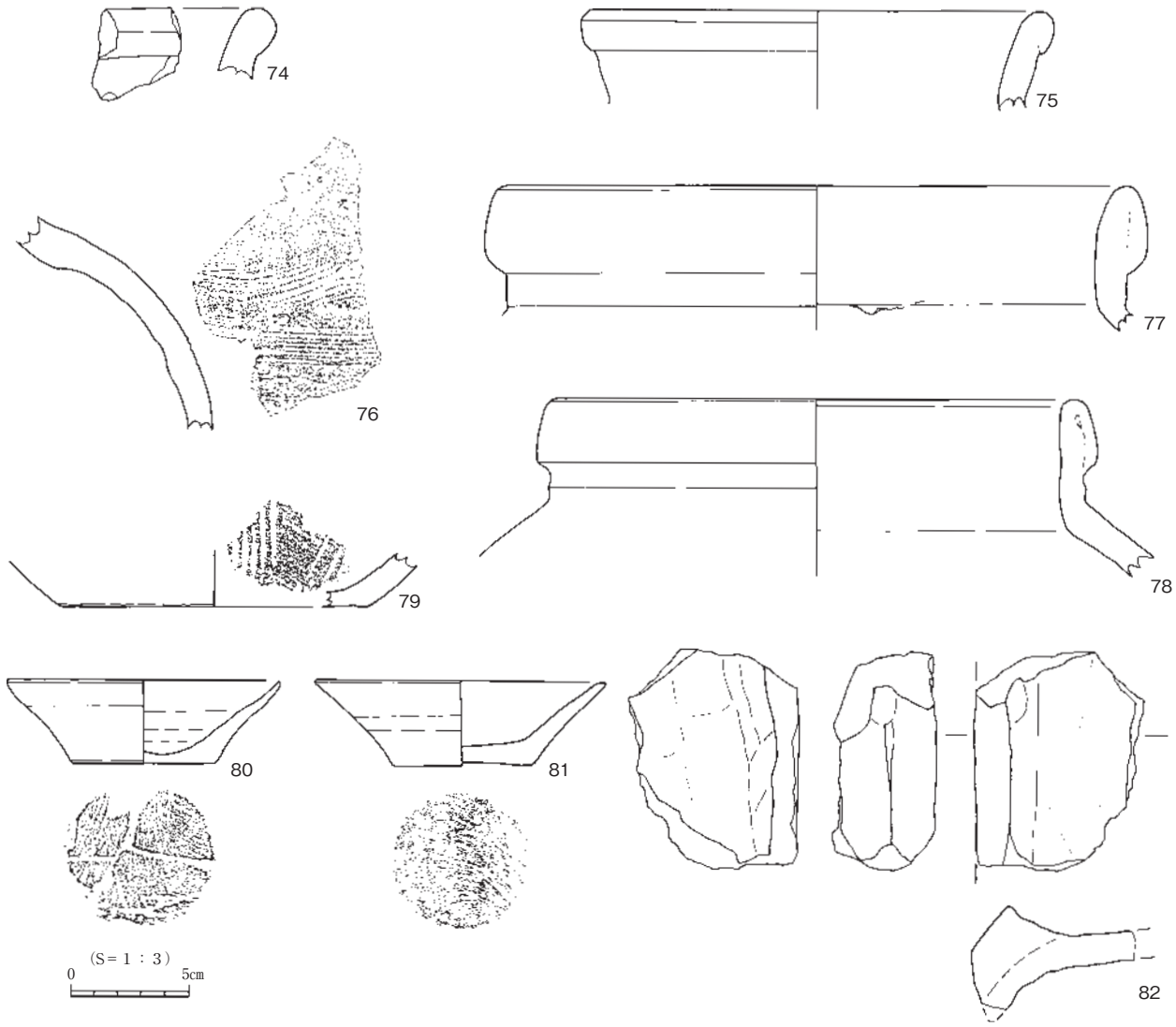
段状遺構３（第29～31図）

段状遺構３は、段状遺構２の北東側に隣接し、最も下部に位置する段状遺構である。北西側は調査区外にかかっているが、平面形態は五角形状を呈すると考えられる。規模は検出した範囲で長さ3.3m、幅は最大で1.8m、深さは最大で0.5mを測る。埋土中には礫が幾層にも敷き詰められたように混じるが、遺構全面に礫が認められるのではなく、上層では主に遺構の北東側に礫が認められ、下層にいくにつれて少しずつ遺構の南西側に移動して礫が認められる傾向にある。

遺物は、陶器と土師質土器が出土した。

74～79は備前焼で、74～76は壺である。74、75は口縁部で、いずれも僅かに外傾する。74は口縁端部外面を僅かに肥厚させ、75は口縁端部を外側に折り下げて肥厚させている。75は乗岡編年の中世6a期に比定される。76は肩部で、外面には７条と５条の波状文が施されている。77、78は甕の口縁部

第30図　段状遺構３



第31図　段状遺構３出土遺物

で、いずれも直立し、口縁端部を外側に折り下げた扁平な口縁帯を持つ。いずれも乗岡編年の中世5b期に比定される。79は擂鉢の底部である。

80、81は土師質土器の坏身で、いずれも外傾して立ち上がり、底部外面には静止糸切りが施されている。82は移動式竈である。

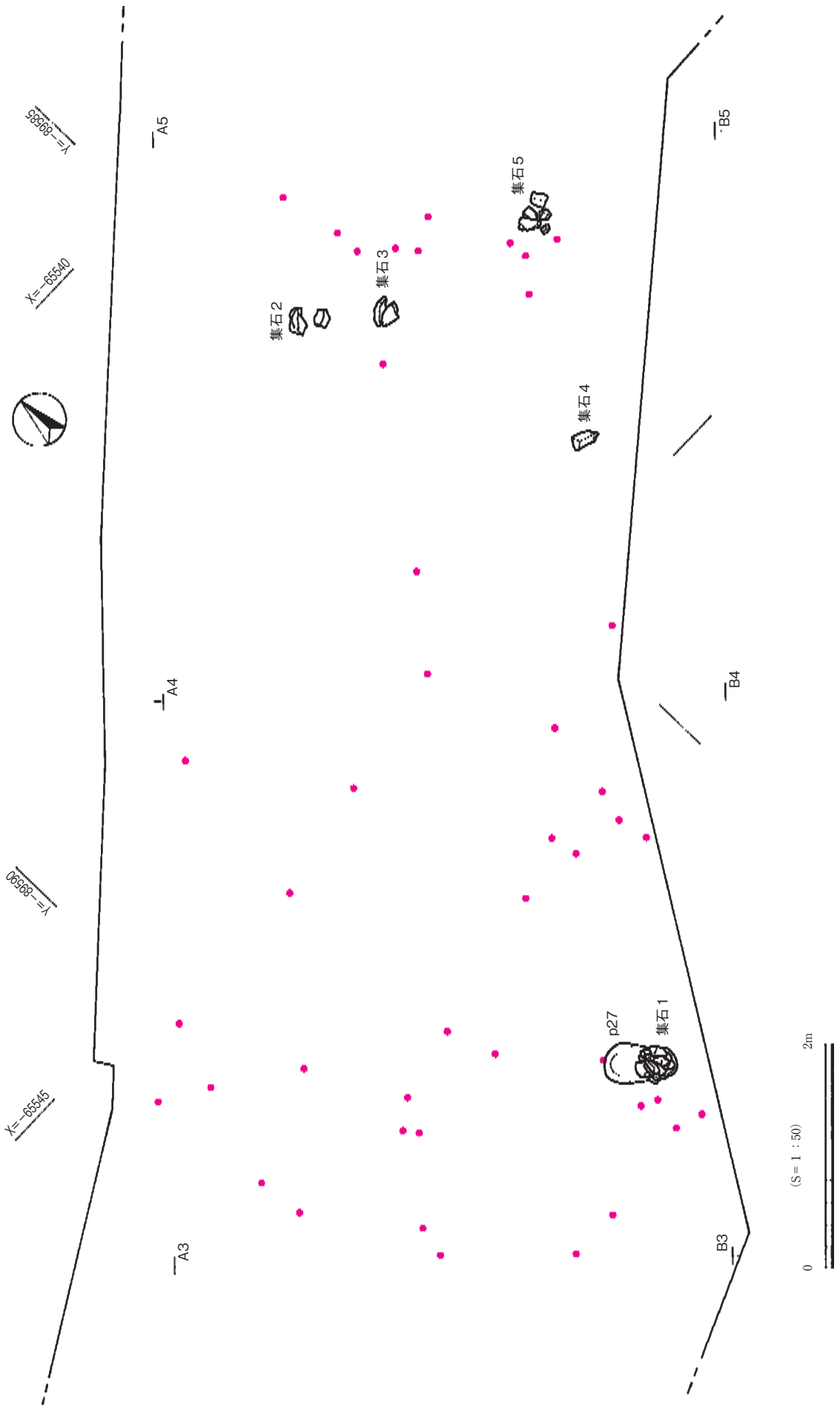
本遺構の帰属時期は、出土遺物から16世紀前半～中頃と考えられる。

４．Ⅲ　期

Ⅲ期の遺構は、A3・A4グリッドで表土及び旧表土の掘り下げ中に集石を５基検出した。このうち、集石１を伴うピット（P27）を地山上面で検出した。残りの４基も地山上面まで掘り下げたが、ピットは検出できなかった。本来はピット内に据えられていたものと考えられ、柱の根固めとして用いられたと考えられる。

集石１（第33、34図）

集石１は、A3グリッドで検出した。P27の南東側に35cm×35cmの範囲に、深さ25cmにわたって15石



第32図　Ⅲ期の遺構及び出土遺物分布図

が集石され、集石には燈篭や角礫が使用されている。

83はP27から出土した土師質土器の坏身の底部で、外面には静止糸切りが施されている。

84、85は凝灰質砂岩（来待石）製の燈篭で、84は中台である。85は長方形を呈すると考えられる部材で、上下端部と下面は欠損するが、上面と両側面には加工痕が認められる。

集石２（第35図）

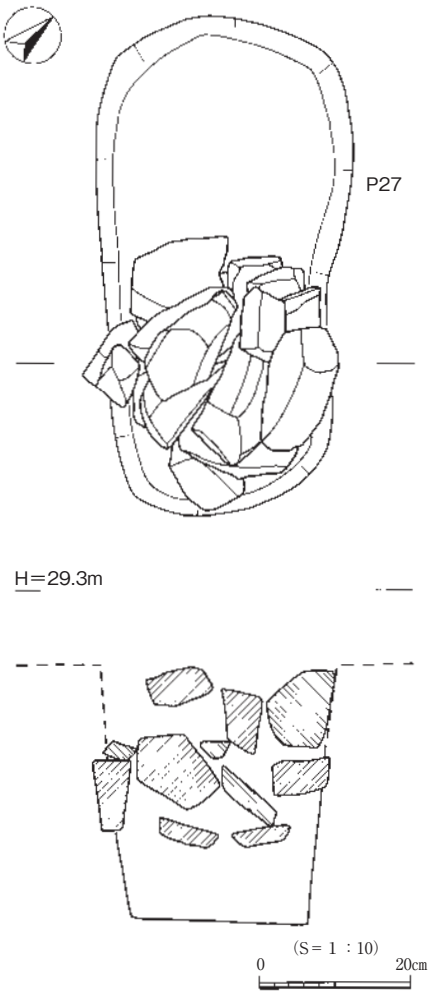
集石２は、A4グリッドで検出した。25cm×35cmの範囲に２石が集石され、集石には長さ25cm、幅15cm、厚さ10cmと長さ16cm、幅12cm、厚さ11cmの角礫が使用されている。

集石３（第35図）

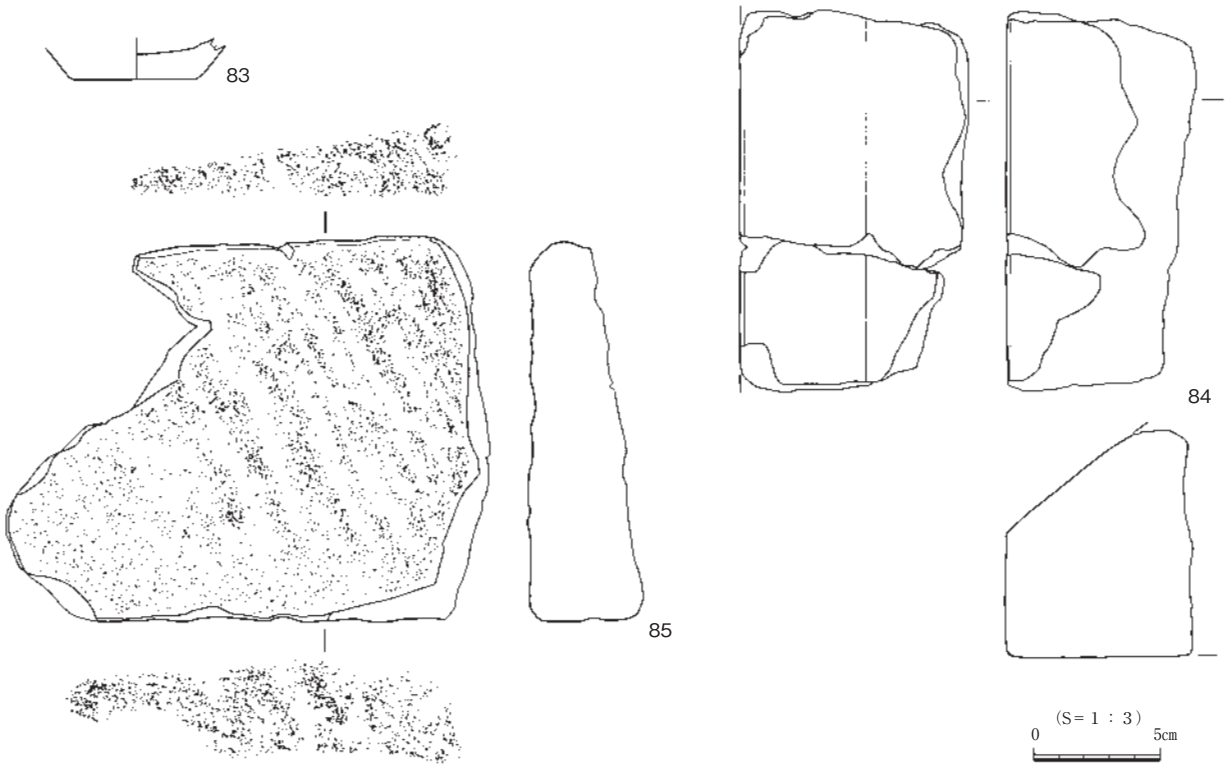
集石３は、A4グリッドで検出した。28cm×22cmの範囲に２石が集石され、集石には長さ28cm、幅８cm、厚さ６cmと長さ21cm、幅14cm、厚さ８cmの角礫が使用されている。

集石４（第35図）

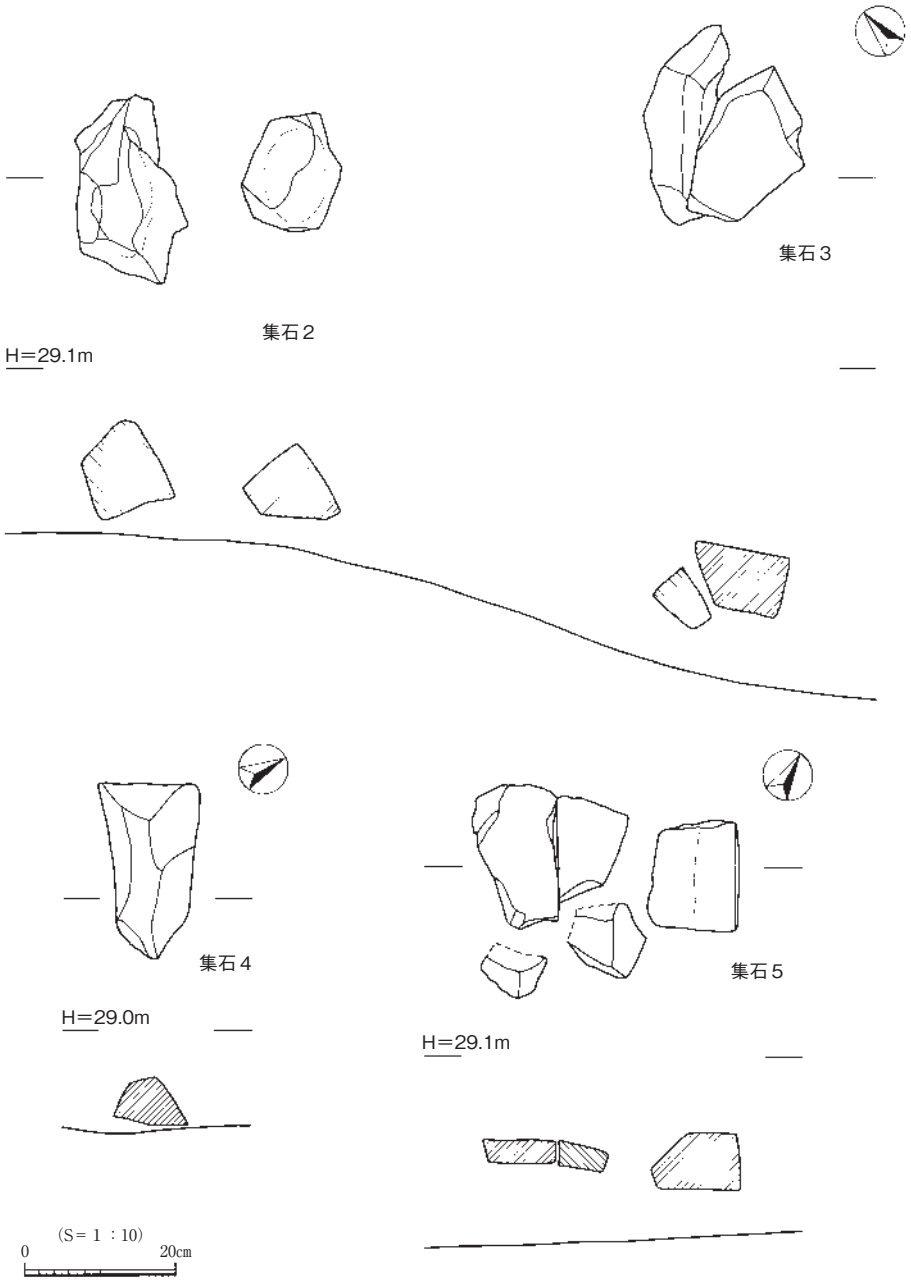
集石４は、A4グリッドで検出した。長さ24cm、幅14cm、



第33図　集石１



第34図　集石１出土遺物



第35図　集石２～５

厚さ７cmの角礫が１石のみである。

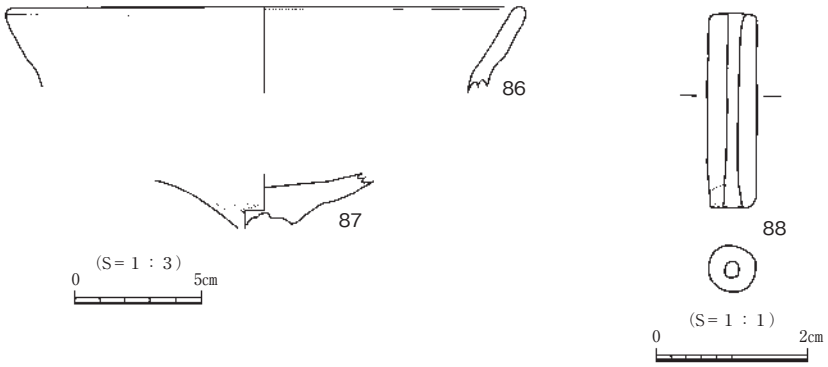
集石５（第35図）

集石５は、A4グリッドで検出した。35cm×28cmの範囲に５石が集石され、集石には長さ10～20cm、幅９～12cm、厚さ３～８cmの角礫が使用されている。

第４節　遺構外出土遺物

１．築城以前の遺物（第36図）

86、87は土師器である。86は甕の口縁部で､外傾して立ち上がる。87は高坏の坏部である。88は緑色凝灰岩製の管玉で、長さ2.6cm、直径0.7cm、孔径0.2cmを測る。



第36図　遺構外出土の築城以前遺物

２．中世の遺物（第37、38図）

89～91は青磁である。89は上田分類の青磁碗C2類で、外面には雷文帯が施文されている。90は分類不明の碗、91は香炉の底部である。

92～98は備前焼で、92～94は壺である。92は口縁部で、僅かに外傾し、口縁端部を外側に折り下げて玉縁状にしている。乗岡編年の中世6a期に比定される。93、94は底部である。95は甕の口縁部で、扁平な口縁帯を有する。乗岡編年の中世5b期に比定される。96は水屋甕の肩部で、吊紐形の耳環が貼り付けられている。乗岡編年の中世6a期に比定される。97は擂鉢の底部で、内面には10条１単位の擂り目がある。98は意図的に円形に打ち欠いたもので、直径は７cm前後を測る。99は信楽焼の壺の口縁部で、口縁端部は外反する。100は瀬戸・美濃焼の皿の底部である。101は越前焼の甕で、口縁部は外反し、口縁端部は屈曲して上方へ立ち上がる。102、103は瓷器系陶器である。102は壺の底部で、底部外面には回転糸切りが施されている。103はT字形を呈する製品で、用途は不明である。

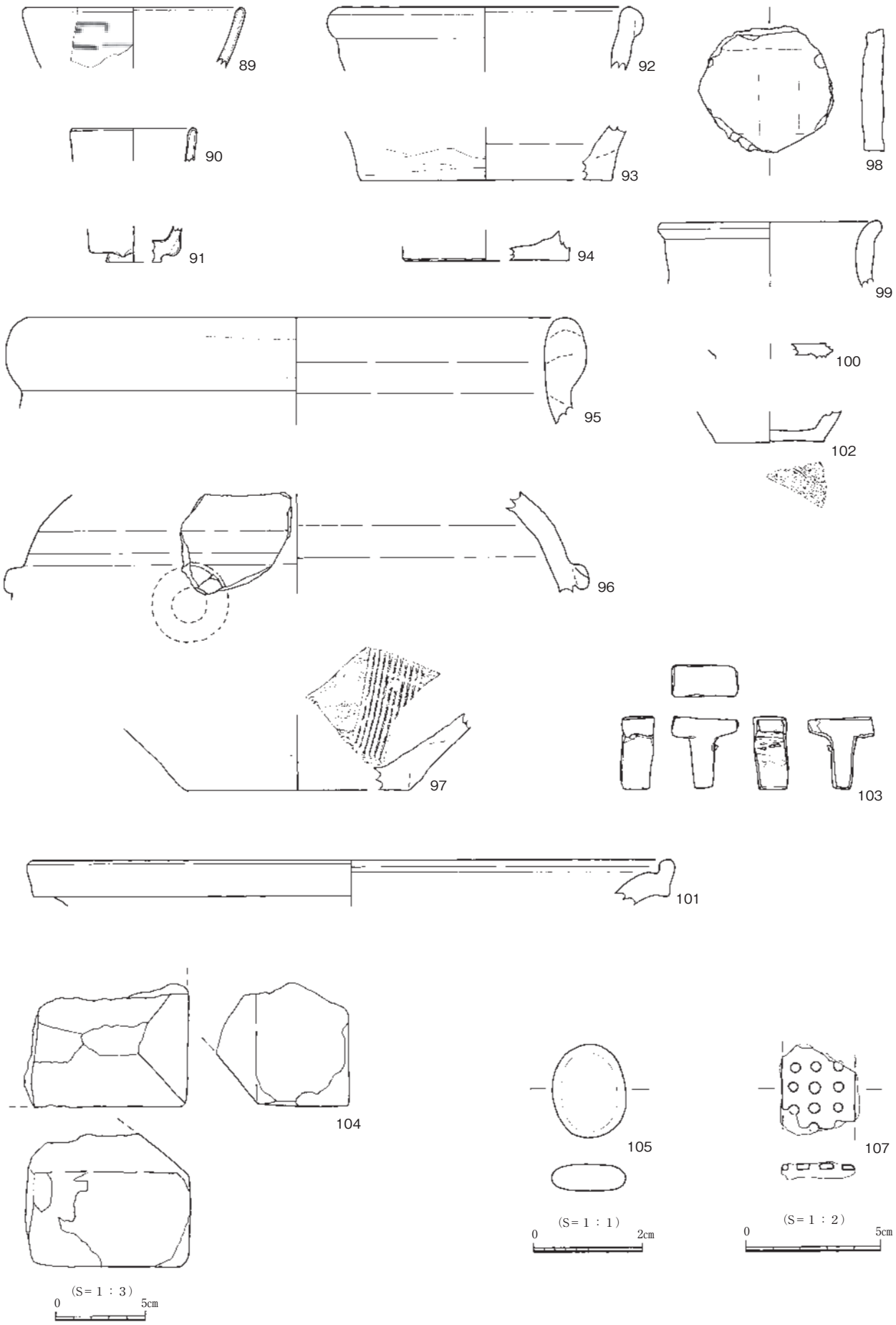
104～106は石製品である。104は凝灰質砂岩（来待石）製の燈篭の中台である。105は粘板岩製の碁石である。平面形態は楕円形を呈し、長さ1.7cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。106は安山岩製の茶臼の下臼で、臼部上面にはふくみは認められない。残存部の状況から８分画と推測され、分画内の副溝の数は８本である。台座の外面と受け皿の内面は平滑に磨かれ、臼部の外面は下端部のみが平滑に磨かれているが、それ以外は未調整である。また、台座の底部は鑿状の工具で削り出したまま未調整となっており、接地面のみ水平に成形されている。

107は甲冑に用いられる鉄小札で、上下端が欠損するが、横に３列に７～８㎜、縦に４列に７～８㎜間隔で直径３～４㎜の孔が穿たれている。

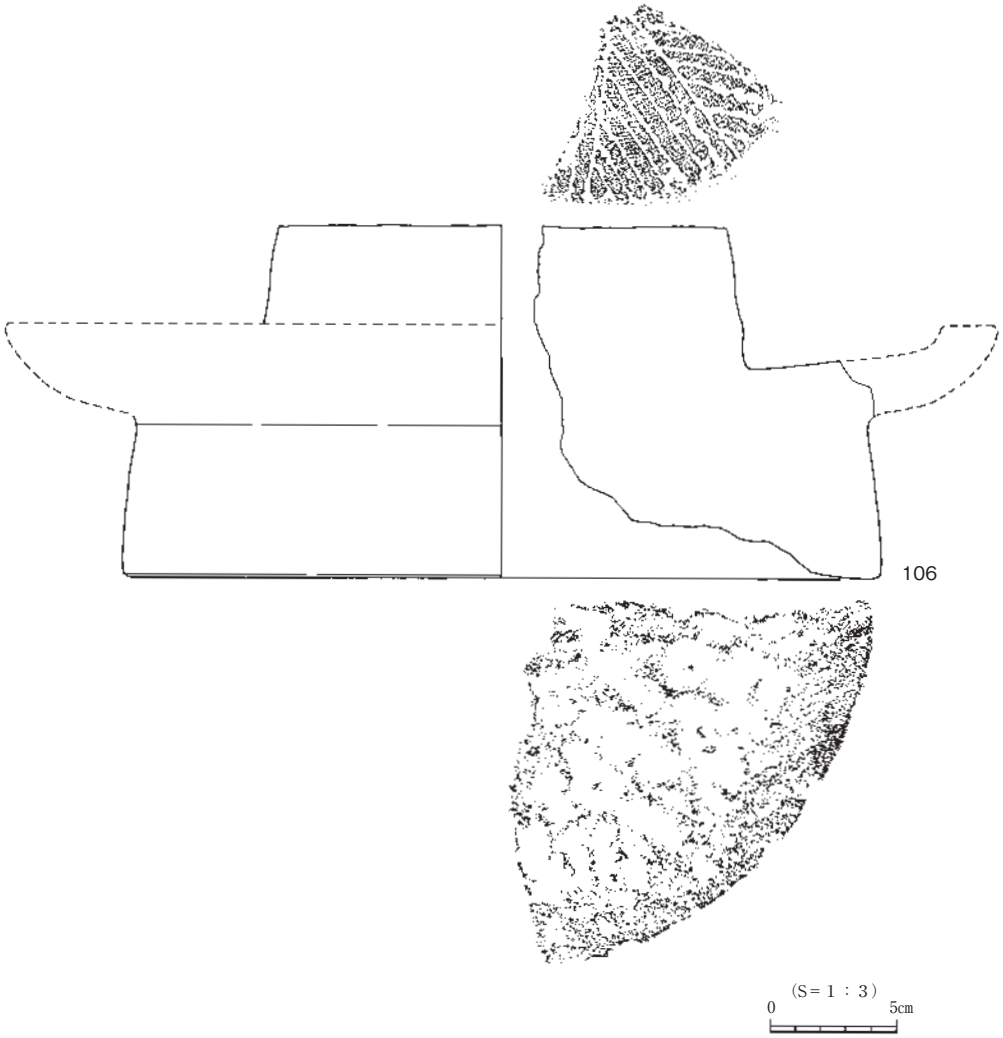
３．近世以降の遺物（第39図）

108、109は伊万里焼の皿で、108の見込みには蛇の目釉剝ぎが施されている。

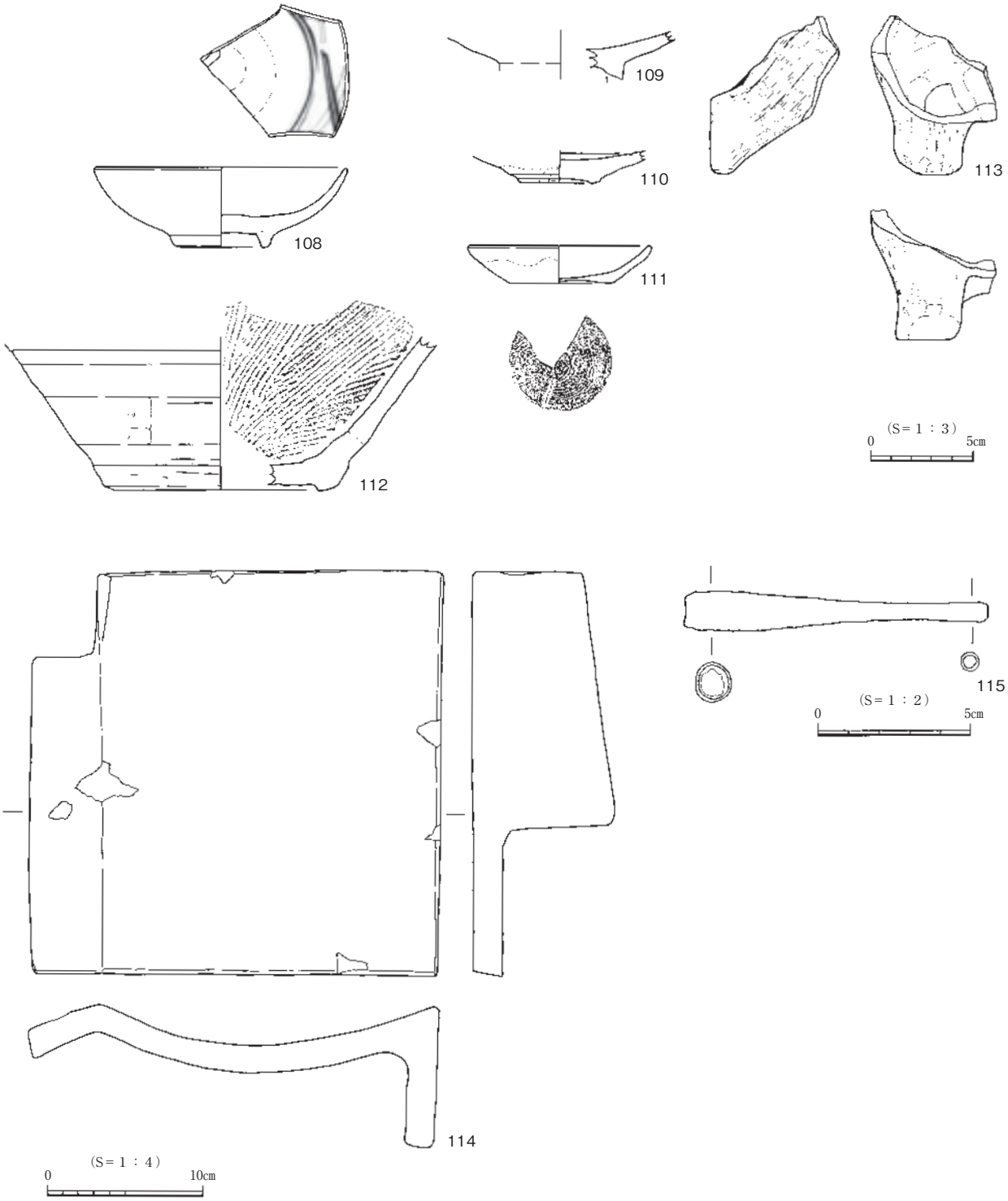
110～112は陶器で、110は唐津焼の皿である。111は在地産の皿で、底部外面には回転糸切りが施されている。112は須佐唐津焼の擂鉢で、高台を削り出し、内面には12条１単位の擂り目がある。113は土製品で、外面はハケメ調整を施している。動物の足か。114は袖瓦、115は煙管の吸口である。



第37図　遺構外出土の中世遺物（1）



第38図　遺構外出土の中世遺物（２）



第39図　遺構外出土の近世以降遺物

第４章　自然科学分析

第１節　石井要害跡における放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌さらには土器付着炭化物などが測定対象となり、約５万年前までの年代測定が可能である（中村、2003）。

本報告では、中世の城館である石井要害跡の遺構の年代を明らかにすることを目的として、放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

測定試料は、P37出土の木炭（試料１）と腰郭４の拡張に伴う造成土出土の木炭（試料２）の２点である。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

試料の付着物を取り除いた後、酸−アルカリ−酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/*l*（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と結果表に記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

測定方法は、加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。$\delta^{13}C$は、試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である。

^{14}C年代（Libby　Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach, 1977）。^{14}C年代は$\delta^{13}C$によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（$\pm 1\sigma$）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正

曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al., 2013）を用い、OxCalv4.3較正プログラム（BronkRamsey, 2009）を使用する。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。

３．結　　果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（^{14}C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。第２表にこれらの結果を示し、第40図に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

今回年代測定を実施した木炭の年代値（補正年代）は、290±20yrBP（試料１）、370±20yrBP（試料２）である。約80年の年代幅があるが、測定試料が炭化材の細片であり最外年輪を確認することが困難であったことから、誤差を考慮すると比較的短い時間幅であると考えられる。

第２表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料	方法	δ^{13}C（‰）	年代値 yrBP	暦年較正用 yrBP	暦年較正結果		測定番号 Code No.
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
試料1	AAA	−28.24±0.26	290±20	286±20	1527calAD−1555calAD（39.5%） 1633calAD−1649calAD（28.7%）	1521calAD−1592calAD（58.2%） 1620calAD−1656calAD（37.2%）	IAAA-181125
試料2	AaA	−25.96±0.26	370±20	366±19	1466calAD−1515calAD（47.2%） 1597calAD−1618calAD（21.0%）	1453calAD−1523calAD（59.5%） 1572calAD−1630calAD（35.9%）	IAAA-181126

４．所　　見

石井要害跡で検出された遺構の年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行った。その結果、P37出土の木炭（試料１）は、2σの暦年代で1521−1592cal AD（58.2%）、1620−1656cal　AD（37.2%）であり、16世紀前半～17世紀中旬、腰郭４の拡張に伴う造成土出土の木炭（試料２）は、2σの暦年代で1453−1523cal AD（59.5%）、1572−1630cal AD（35.9%）であり、15世紀中旬～17世紀前半の年代値を示した。

参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337−360.

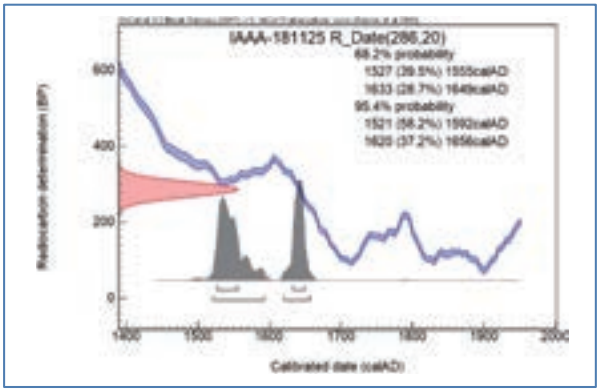
中村俊夫３（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」．日本第四紀学会，p. 3−20.

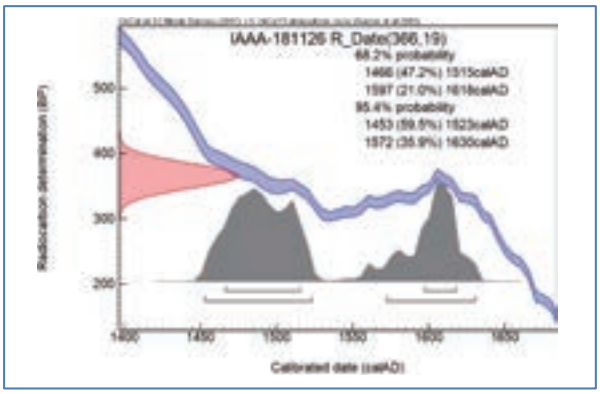
中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正．環境考古学マニュアル．同成社，p. 301−322.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L.,

Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E. M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50, 000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.

Stuiver, M. and Polach, H.A., 1977, Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355–363.





第40図　暦年較正結果

第５章　総　　括

今回の調査は、出丸の頂部平坦面の北西側と北東側斜面を対象として実施した。本稿では、調査で確認された遺構や遺物から出丸の構造や存続時期等について検討してみたい。

１．出丸の構造と機能

出丸の構造については、南西側と北西側及び北東側の中腹以下の斜面部は住宅団地の造成工事により削平されているが、現状では、Ⅰ期には頂部平坦面の南西側には腰郭４と腰郭５の２段の腰郭を構築し、北東側には傾斜度60°の切岸があり、頂部平坦面から3.5～４m下がった位置に腰郭６と腰郭７の２基の腰郭を構築している。腰郭７は、位置的に明治２年作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』の中段の腰郭に該当すると考えられ、本来はさらに北東へ大きく広がっているが、住宅造成工事により大きく削平され、幅2.5～3.3mしか残存していない。また、今回の調査では調査区の制約もあり、断定はできなかったが、腰郭７では北西―南東方向へのびるピット列を確認しており建物跡の存在が窺える。

頂部平坦面では北東―南西方向にのびる空堀２を配しているが、その掘形は直線的ではなく、楕円状の掘り込みが連続する形態となっていることから、空堀２を掘削するにあたっては複数の作業者での掘削が窺える。また、空堀２の埋土の状況から空堀２の北西側に土塁の存在が想定される。空堀２の南西側には柵列２があり、空堀２の北東側は切岸となっていることから、土塁は空堀２の北西側のみに存在したと想定される。土塁の北西側は、住宅団地の造成工事によって大きく削平されており、その様相は窺い知れないが、明治２年作成の『石井村田畑地続字限絵図・字要害』では、本丸と出丸との間が切通し状となっていることから、堀切が存在した可能性がある。第１次調査では、頂部平坦面においては空堀や土塁は確認されておらず、出丸の北西側に空堀と土塁を配したのには、防御のうえで何らかの意図があったものと考えられる。本丸と出丸との間に存在したと推察される堀切の深さがどれくらいあったのかは現在となっては不明であるが、おそらく、出丸において防御上、最も弱点である出丸の北西側の防御を強化するためにこの位置に空堀と土塁を配したものと考えられる。

このようにみてみると、Ⅰ期にはかなりの防御機能を有していることから、第１次調査と同様、軍事的性格が強いと考えられる。

Ⅱ期になると、Ⅰ期の土塁を削平して、空堀２を人為的に埋め立てて頂部平坦面の郭を拡張するとともに南西側の腰郭４も腰郭５を埋め立てて拡張を行っている。また、腰郭６も版築状に埋め立てられており、頂部平坦面の拡張に連動したものと考えられる。郭が拡張された郭１ではピット54基を検出した。建物跡や柵列として断定できるものはなかったが、P14のように柱の根固めに用いられたと考えられる礫や陶磁器が据え付けられているものがあることから建物跡の存在が窺える。また、貿易陶磁をはじめとする多量の遺物が出土していることから、日常的な居住が窺え、茶臼、天目茶碗といった茶道具も出土している。第１次調査では風炉、茶臼、建水、茶壷、天目茶碗などの茶道具が揃って出土しており、このことから第１次調査地側に茶の湯を行う会所的な施設も存在したと推察される。

２．存続時期

まず、築城時期についてであるが、Ⅰ期に帰属する腰郭５からは土師質土器と碁石、腰郭６からは越前焼の甕、土師質土器、茶臼、腰郭７からは青磁の香炉、土師質土器、茶臼が出土しており、その年代観が築城時期の手掛かりとなる。しかし、当地域の土師質土器の編年が未確立であるため、帰属時期を明らかにすることはできなかった。そこで、出土した陶磁器の編年を用いると、貿易陶磁の古いものでは青磁碗B3・C2・E類、白磁皿D群が出土しており、15世紀中頃まで遡る。これらは耐久消費材として伝世して使用される財産的価値があるものであるということを考慮しなければならないが、現時点では、第１次調査と同様に築城時期は15世紀中頃よりも遡らないと考えられる。

城の存続時期については、多量に出土した備前焼の年代観を用いると、乗岡編年の中世5b期～6a期に比定されるが、中世6a期のものが主体で、16世紀の第１四半期～第２四半期に帰属するものである。以上のことから、第１次調査と同様に15世紀中頃を上限として築城され、16世紀中頃まで存続したと考えられる。

なお、Ⅰ期からⅡ期への移行期である腰郭４の拡張に伴う造成土から検出された炭化物の放射性炭素年代測定では15世紀中頃～17世紀前半、Ⅱ期に帰属するP37から検出された炭化物の放射性炭素年代測定では16世紀前半～17世紀中頃の結果を得た（第４章参照）。続く16世紀後半に帰属する遺物が認められないことから、この時期には城主が不在、あるいは廃城となったと考えられる。

３．築城以前の様相

今回の調査では、築城以前の遺構も検出した。遺物が出土していないため帰属時期は特定できないが、頂部平坦面の北東端のA5グリッドで袋状の土坑１基を検出し、量的には少ないものの土師器と須恵器がA5グリッドからC5グリッドにかけて比較的集中して出土する傾向にあり、T4からは緑色凝灰岩製の管玉が出土した。第１次調査では、ごく僅かであるが弥生時代から古代の遺物が出土し、発掘調査後に行われた法面工事では横穴墓の一部と考えられる遺構が確認されており、これらの遺跡を削平して築城されたことが改めて確認された。

４．出土遺物について

石井要害跡第２次調査から出土した土器と陶磁器について、中世に帰属する破片点数をすべてカウントし、グラフ化した。また、調査地点による組成の違いを検討するために、第１次調査との比較を試みた。

第２次調査では、総出土点数1,285点のうち、土器が747点（58％）、国産陶器が402点（31％）、中国・朝鮮の陶磁器が136点（11％）であった。これに対して第１次調査では、土器が31％、国産陶器が53％、中国・朝鮮の陶磁器が15％で、中国・朝鮮の陶磁器の割合はほぼ同じであるが、土器と国産陶器の割合が逆転している。

土器については、土師質土器の坏・皿類が712点と最も多く、土器の出土点数のうち95％を占める。京都系の皿は、可能性のあるものも含めて18点しかなく、土器のなかでも２％しか存在しない。第１次調査では、土師質土器の坏・皿類が76％で、第２次調査よりも割合が低いのは、第１次調査では鍋・釜が17％を占めるのに対して、第２次調査では鍋・釜が７点（１％）しか出土しておらず、このことが反映されていると考えられる。土師質土器の坏・皿類を土器と陶磁器全体の割合からみてみる

第３表　石井要害跡　第２次調査出土土器・陶磁器集計表

	土師器				瀬戸・美濃			備前							瓷器系			青磁碗							青磁その他				白磁碗・皿				青花碗	青花皿・小杯					粗製青花		中国陶器		朝鮮				唐津		小計	備考
	坏・皿	鍋・釜	火鉢	その他・京都	皿	天目	その他	擂鉢	壺口縁	甕口縁	壺・甕体部	徳利	水屋甕	壺口縁	壺・甕体部	信楽壺	B3	B4	C2	D	E	不明	稜花皿	香炉	盤	不明	B・C	D	E	不明	不明	B	E	小坏	不明	碗	皿	褐釉	その他	碗	皿	壺	白磁	胎土目	碗		
合計	712	7	10	18	4	1	16	9	19	5	305	3	3	2	32	1	3	13	6	6	1	21	6	2	3	3	1	5	1	10	4	5	2	4	6	2	3	7	5	1	3	9	4	1	1	1285	
類別合計	747				21			344						35			50						14				17				4	17				5	12		17				2		1285	

と、第２次調査では55％で、第１次調査の24％を圧倒している。

国産陶器は、総点数402点のうち備前焼が344点（86％）と最も多いが、越前や常滑、信楽からの搬入品とみられる瓷器系陶器の壺・甕類が35点（９％）存在する。第１次調査では備前焼が89％、瓷器系陶器の壺・甕類が８％でほぼ同率である。さらに備前焼のみを器種別でみると、第２次調査では、壺・甕類が96％を占めており、第１次調査でも97％と貯蔵具が大半を占めている。

貿易陶磁については、総点数136点のうち、青磁製品が64点（47％）を占めている。このうち、碗では線描きの蓮弁文碗が多く、無文の碗も一定量存在するが、第１次調査ではみられなかった雷文帯を持つ碗が認められる。第１次調査では、線描きの蓮弁文碗と無文の碗が主体で、40％と第２次調査と比較するとやや割合が低くなっている。白磁はD群が主体で17点（13％）であり、第１次調査ではD・E群が主体で、12％とほぼ同率である。青花は碗・皿類を合わせても26点（19％）と少なく、B群の皿が主体とみられる。第１次調査でもB群の皿が主体で、16％とほぼ同率である。朝鮮陶磁器は17点（13％）で、第１次調査ではみられなかった白磁が認められる。第１次調査では24％であるのに対して、第２次調査では13％と割合が低くなっている。

第１次調査と第２次調査の土器、陶磁器の組成は、貿易陶磁については大きな差異は認められなかったが、土器と国産陶器は、その割合が逆転し、さらに、全体に占める土師質土器の坏・皿類の割合が大きく異なるのが特徴である。このような調査地点による出土遺物の様相の違いは、空間上の機能差を示していると考えられるが、出丸の北東側の第１次調査地と第２次調査地との間を第３次調査、第４次調査として調査することとなっていることから、現時点で結論を導き出すのは避け、その調査結果を待って検討することとしたい。

第４表　腰郭５出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
			口径	底径	器高					
1	11	土師質土器皿	7.0	4.4	1.7	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	
2	11	土師質土器坏身	※12.0	3.0	3.0	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	
3	11	土師質土器坏身	※12.2	※ 6.0	3.6	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部摩滅のため調整不明 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	
4	11	土師質土器坏身	―	7.2	△ 2.0	外面：体部回転ナデ、底部摩滅のため調整不明 内面：回転ナデ	密	良	灰白色	

第５表　腰郭５出土石製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			重量（g）	石　材	備　考
			長さ	幅	厚さ			
5	11	碁石	2.0	1.3	0.6	2.2	粘板岩	

第６表　腰郭６出土陶器・土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
			口径	底径	器高					
6	12	陶器甕	※48.0	―	△ 3.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、自然釉	密	良好	赤褐色	越前焼
7	12	土師質土器埦	※ 7.7	―	△ 3.1	外面：指押さえ 内面：指押さえ	密	良好	暗赤灰色	外面漆付着

第７表　腰郭６出土石製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			重量（g）	石　材	備　考
			残存高	復元幅	厚さ			
8	12	茶臼	3.8	38.0	2.3	256.8	デイサイト	下臼の受け皿部

第８表　腰郭７出土磁器・土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
			口径	底径	器高					
9	13	青磁香炉	―	3.8	△ 2.0	外面：高台露胎 内面：露胎	密	良好	灰褐色	P62出土
10	13	土師質土器坏身	※13.4	6.6	3.3	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部糸切り 内面：回転ナデ	密	良	橙色	P77出土

第９表　腰郭７出土石製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			重量（g）	石　材	備　考
			残存高	復元幅	厚さ			
11	13	茶臼	4.2	14.0	2.1	204.9	デイサイト	下臼の受け皿部

第10表　郭１造成土出土陶磁器・土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
			口径	底径	器高					
12	21	青磁 碗	※10.0	―	△ 3.0	外面：線描き蓮弁文	密	良好	オリーブ灰色	上田B4類
13	21	陶器 壺	―	―	△ 5.7	外面：回転ナデ、肩部１条の沈線、 胴部４条の波状文、自然釉 内面：回転ナデ、自然釉	密	良好	赤褐色	備前焼 中世6a期
14	21	土師質土器 皿	※ 8.0	3.8	1.4	外面：口縁部～体部摩滅のため調整不明 底部静止糸切り 内面：摩滅のため調整不明	密	良	褐色	
15	21	土師質土器 坏身	※ 6.9	3.9	1.8	外面：摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	密	良	灰白色	
16	21	土師質土器 坏身	※11.8	6.4	3.5	外面：口縁部～体部ナデ、底部糸切り 内面：ナデ	密	良	橙褐色	
17	21	土師質土器 坏身	※12.0	7.0	3.3	外面：口縁部～体部ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良	褐色	外面漆付着か
18	21	土師質土器 坏身	※11.8	5.8	3.0	外面：口縁部～体部ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良	褐色	
19	21	須恵器 坏身	※11.4	―	△ 3.5	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	
20	21	須恵器 坏身	※10.8	―	△ 1.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	

第11表　郭１造成土出土石製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			重量（g）	石　材	備　考
			長さ	幅	厚さ			
21	21	碁石	1.6	1.2	0.45	1.5	粘板岩	
22	21	碁石	2.4	1.3	0.6	2.8	粘板岩	
23	21	碁石	2.2	1.7	0.7	4.3	粘板岩	

第12表　郭１造成土出土金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			重量（g）	材　質	備　考
			長さ	幅	厚さ			
24	21	小札	5.9	2.0	0.3	18.0	鉄	平小札

第13表　郭１出土陶磁器・土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
25	22	青磁 碗	※ 9.1	—	△ 2.0	外面：１条の沈線文	密	良好	オリーブ灰色	上田E類
26	22	青磁 碗	※13.8	—	△ 4.3	外面：雷文帯	密	良好	灰色	上田C2類 P40出土
27	22	青磁 器種不明	※11.7	—	△ 2.2	外面：線描き蓮弁文	密	良好	灰色	P1出土
28	22	白磁 皿	※ 8.5	—	△ 2.1	外面：貫入 内面：貫入	密	良好	灰白色	森田D群
29	22	白磁 皿	—	※ 7.2	△ 1.7		密	良好	白灰色	分類不明
30	22	白磁 壺	—	—	△ 4.7	外面：貫入 内面：貫入	密	良好	灰白色	朝鮮半島産
31	22	陶器 皿	※ 7.6	—	△ 1.0		密	良好	オリーブ黒色	朝鮮半島産
32	22	陶器 壺	※17.6	—	△ 5.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	黒褐色	備前焼 中世5b期
33	22	陶器 壺	—	—	△ 4.5	外面：回転ナデ、自然釉 内面：回転ナデ	密	良好	浅黄色	備前焼
34	22	陶器 壺	—	※14.0	△ 3.0	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	褐灰色	備前焼
35	22	陶器 擂鉢	※25.0	—	△ 4.4	外面：回転ナデ、自然釉 内面：回転ナデ、擂り目	密	良好	暗赤褐色	備前焼 中世6a期
36	22	陶器 埦	※11.9	—	△ 4.0		密	良好	黒色	瀬戸・美濃焼
37	22	陶器 皿	—	※ 5.4	△ 1.8		密	良好	灰色	瀬戸・美濃焼 P43出土
38	22	陶器 甕	—	※ 9.2	△ 2.6	外面：体部ナデ、削り出し高台、自然釉 内面：回転ナデ	密	良好	褐灰色	瓷器系
39	22	土師質土器 皿	7.8	5.4	1.8	外面：口縁部～体部ナデ、 底部摩滅のため調整不明 内面：ナデ	密	良好	灰茶色	P52出土
40	22	土師質土器 坏身	—	5.8	△ 2.3	外面：口縁部～体部ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良	褐色	P32出土

第14表　P2出土石製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 残存長	残存幅	厚さ	重量（g）	石　　材	備　　考
41	24	燈篭	14.5	33.0	10.0	5160.0	凝灰質砂岩（来待石）	中台、上面に火袋を据える方形の刳り込みあり

第15表　P14出土陶磁器観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
42	26	青磁 盤	※21.4	—	△ 2.9	外面：丸ノミによる蓮弁文 内面：３条の波状文	密	良	灰色	
43	26	褐釉陶器 壺	—	—	△ 7.9		密	良好	黒褐色	中国南方系か
44	26	陶器 壺	※12.2	—	△ 6.6	外面：回転ナデ、波状文か、自然釉 内面：回転ナデ	密	良好	赤褐色	備前焼

45	26	陶器 壺	—	—	△ 4.0	外面：回転ナデ、３条の波状文、 ４条の沈線文、黒斑 内面：回転ナデ	密	良好	暗赤褐色	備前焼 中世6a期
46	26	陶器 壺	—	※21.1	△ 5.0	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	にぶい赤褐色	備前焼
47	26	陶器 壺	—	※21.5	△11.0	外面：体部回転ナデ、斜め方向のナデ、 底部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	にぶい赤褐色	備前焼

第16表　腰郭４造成土出土陶磁器・土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
			口径	底径	器高					
48	27	青磁 碗	※15.3	※ 5.3	7.5	外面：簡略化された雷文帯	密	良好	オリーブ灰色	上田C2類
49	27	青磁 稜花皿	※12.6	—	△ 2.1	内面：３条の沈線文	密	良好	オリーブ灰色	
50	27	青花 皿	※11.6	—	△ 1.1	外面：牡丹唐草文	密	良好	明青灰色	小野B1群
51	27	青花 皿	※11.8	—	△ 1.6	外面：牡丹唐草文 内面：一重圏線	密	良好	明青灰色	小野B1群
52	27	青花 皿	※11.6	—	△ 1.8	外面：牡丹唐草文、一重圏線 内面：二重圏線	密	良好	明青灰色	小野B1群
53	27	青花 皿	※10.2	※ 6.2	2.3	外面：口縁部一重圏線、底部一重圏線 内面：口縁部一重圏線、見込み一重圏線、 海老	密	良好	明青灰色	小野E群
54	27	粉青沙器 皿	—	—	△ 1.7	外面：ハケ状工具によるナデ 内面：ハケ状工具によるナデ	密	良好	灰白色	朝鮮半島産
55	27	陶器 甕	※27.4	—	△ 5.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	褐色	備前焼 中世5b期
56	27	陶器 徳利	※ 5.9	—	△ 4.7	外面：回転ナデ、自然釉 内面：回転ナデ	密	良好	暗青灰色	備前焼 中世6a期
57	27	土師質土器 皿	※ 7.5	4.7	1.7	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部摩滅のため調整不明 内面：回転ナデ	密	良	灰白色	
58	27	土師質土器 皿	7.7	4.3	2.4	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	黄橙色	内外面煤付着
59	27	土師質土器 皿	※ 9.4	※ 6.0	2.2	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部摩滅のため調整不明 内面：回転ナデ	密	良	灰黄褐色	
60	27	土師質土器 皿	※11.0	6.2	2.1	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	
61	27	土師質土器 坏身	※ 7.0	※ 4.0	2.1	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部摩滅のため調整不明 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	
62	27	土師質土器 坏身	※11.3	7.0	2.8	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	外面煤付着
63	27	土師質土器 坏身	※10.4	※ 6.0	2.7	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部摩滅のため調整不明 内面：回転ナデ	密	良	浅黄橙色	
64	27	土師質土器 坏身	※12.2	6.4	3.6	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	橙色	
65	27	土師質土器 坏身	—	6.5	△ 2.5	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	橙色	

第17表　腰郭４出土陶磁器・土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
66	28	白磁 皿	※12.0	—	△ 2.0		密	良好	灰白色	森田B・C群
67	28	陶器 壺	—	—	△ 4.9	外面：回転ナデ、自然釉 内面：回転ナデ、自然釉	密	良好	褐灰色	備前焼
68	28	陶器 擂鉢	※29.3	—	△ 5.6	外面：回転ナデ、５条の凹線 内面：回転ナデ、７条１単位の擂り目	密	良好	暗赤褐色	備前焼 中世6a期
69	28	陶器 壺	—	—	△11.2	外面：ナデ、４条の沈線 内面：ナデ	密	良好	灰オリーブ色	瀬戸・美濃焼
70	28	土師質土器 皿	※10.9	—	△ 2.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	にぶい黄橙色	京都系
71	28	土師質土器 皿	※10.5	—	2.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	浅黄橙色	京都系

第18表　腰郭４出土石製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 残存長	残存幅	残存高	重量（g）	石　　材	備　　考
72	28	燈篭	13.6	12.5	6.4	1188.9	凝灰質砂岩（来待石）	火袋、側面に円形と方形の刳り込みあり

第19表　段状遺構１出土磁器観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
73	29	青磁 碗	※14.4	—	△ 2.7		密	良	緑色	上田D類

第20表　段状遺構３出土陶器・土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
74	31	陶器 壺	—	—	△ 3.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	暗赤褐色	備前焼
75	31	陶器 壺	※19.0	—	△ 4.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	備前焼 中世6a期
76	31	陶器 壺	—	—	△ 8.8	外面：回転ナデ、７条と５条の波状文 内面：回転ナデ	密	良	暗赤褐色	備前焼
77	31	陶器 甕	※26.4	—	△ 6.1	外面：回転ナデ、自然釉 内面：回転ナデ、自然釉	密	良	暗赤灰色	備前焼 中世5b期
78	31	陶器 甕	※21.2	—	△ 7.5	外面：回転ナデ、自然釉 内面：回転ナデ、自然釉	密	良	黒褐色	備前焼 中世5b期
79	31	陶器 擂鉢	—	※12.8	△ 2.3	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密	良	にぶい橙色	備前焼
80	31	土師質土器 坏身	※11.4	※ 6.0	2.5	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	褐色	
81	31	土師質土器 坏身	※12.2	5.9	3.7	外面：口縁部～体部回転ナデ、 底部静止糸切り 内面：回転ナデ	密	良	橙色	
82	31	移動式竈	残存長 9.2	残存幅 6.7	残存厚 4.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	橙色	

第21表　集石１出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
			口径	底径	器高					
83	34	土師質土器 坏身	―	4.8	△1.6	外面：口縁部～体部ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良	褐色	P27出土

第22表　集石１出土石製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別器種	法量（cm）			重量（g）	石　　材	備　　考
84	34	燈篭	残存長	残存幅	残存高	1251.2	凝灰質砂岩（来待石）	中台
			7.5	15.0	9.0			
85	34	燈篭	残存長	幅	残存厚	1219.6	凝灰質砂岩（来待石）	上面、両側面加工痕あり
			19.0	15.2	4.5			

第23表　遺構外出土の築城以前土器観察表

遺物番号	挿図番号	出土地層　位	種別器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
				口径	底径	器高					
86	36	T5	土師器 甕	※20.0	―	△ 3.4	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	橙色	
87	36	T5	土師器 高坏	―	―	△ 2.2	外面：ハケメ 内面：ナデ	密	良	橙色	

第24表　遺構外出土の築城以前石製品観察表

遺物番号	挿図番号	出土地層　位	種別	法量（cm）			重量（g）	石　　材	備　　考
				長さ	直径	孔径			
88	36	T4	管玉	2.6	0.7	0.2	1.7	緑色凝灰岩	

第25表　遺構外出土の中世陶磁器観察表

遺物番号	挿図番号	出土地層　位	種別器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色　調	備　考
				口径	底径	器高					
89	37	B6 流入土２	青磁 碗	※11.8	―	△ 3.3	外面：雷文帯	密	良好	オリーブ灰色	上田C2類
90	37	A3 表土	青磁 碗	※ 6.9	―	△ 1.8		密	良好	オリーブ灰色	分類不明
91	37	B6 流入土	青磁 香炉	―	※ 3.0	△ 2.0		密	良	緑色	
92	37	A6 流入土	陶器 壺	※16.0	―	△ 3.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	褐灰色	備前焼 中世6a期
93	37	B6 流入土	陶器 壺	―	※13.7	△ 3.0	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	褐灰色	備前焼
94	37	C5 表土	陶器 壺	―	※ 9.0	△ 1.7	外面：ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	暗灰黄色	備前焼
95	37	B6 流入土	陶器 甕	※29.5	―	△ 5.9	外面：回転ナデ、自然釉 内面：回転ナデ、自然釉	密	良好	暗赤褐色	備前焼 中世5b期
96	37	A4 表土	陶器 水屋甕	―	―	△ 5.5	外面：回転ナデ、耳貼付 内面：回転ナデ	密	良好	暗赤灰色	備前焼 中世6a期
97	37	A3 表土	陶器 擂鉢	―	※12.0	△ 4.2	外面：回転ナデ 内面：10条１単位の擂り目	密	良好	暗褐色	備前焼
98	37	B6 流入土	陶器 円板状製品	長さ	幅	厚さ	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	灰黄色	備前焼
				6.9	7.4	1.3					

99	37	B6 表土	陶器 壺	※12.0	—	△ 3.6		密	良	オリーブ灰色	信楽焼
100	37	A2 表土	陶器 皿	—	—	△ 0.8	外面：貫入 内面：貫入	密	良好	灰オリーブ色	瀬戸・美濃焼
101	37	B5 表土	陶器 甕	※35.2	—	△ 2.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	暗赤褐色	越前焼
102	37	B6 流入土	陶器 壺	—	※ 6.0	△ 1.7	外面：体部ヨコナデ、底部回転糸切り 内面：ヨコナデ	密	良好	オリーブ褐色	瓷器系
103	37	A3 流入土	陶器 T字形製品	長さ 3.8	幅 3.5	厚さ 1.7		密	良好	灰褐色	瓷器系

第26表　遺構外出土の中世石製品観察表

遺物番号	挿図番号	出土地層位	種別	法量（cm）			重量（g）	石材	備考
				残存長	残存幅	残存高			
104	37	A4 表土	燈篭	6.8	9.0	7.3	539.2	凝灰質砂岩（来待石）	中台
				長さ	幅	厚さ			
105	37	B6 流入土	碁石	1.7	1.4	0.5	2.0	粘板岩	
				高さ	残存幅				
106	38	A6 流入土	茶臼	13.9	30.0		2960.0	安山岩	下臼

第27表　遺構外出土の中世金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	出土地層位	種別	法量（cm）			重量（g）	材質	備考
				残存長	幅	厚さ			
107	37	B6 流入土	小札	3.1	2.7	0.2	7.2	鉄	

第28表　遺構外出土の近世以降陶磁器・土製品観察表

遺物番号	挿図番号	出土地層位	種別 器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	器高					
108	39	B6 流入土	磁器 皿	※12.2	※ 4.6	3.9	内面：見込み蛇の目釉剥ぎ	密	良	白色	伊万里焼
109	39	B6 流入土２	磁器 皿	—	—	△ 2.4		密	良好	灰色	伊万里焼
110	39	B6 流入土	陶器 皿	—	※ 4.0	△ 1.6	外面：体部回転ナデ、削り出し高台 内面：回転ナデ	密	良	濃緑色	唐津焼
111	39	C5 表土	陶器 皿	8.9	4.9	1.8	外面：口縁部施釉、体部～底部露胎 底部回転糸切り 内面：施釉	密	良好	赤褐色	在地産
112	39	B6 流入土	陶器 擂鉢	—	※11.4	△ 7.5	外面：回転ナデ、削り出し高台 内面：12条１単位の擂り目	密	良	赤褐色	須佐唐津
				残存長	幅						
113	39	B5 表土	土製品	6.3	5.2	—	外面：ナデ、ハケメ	密	良好	黄褐色	動物の足か

第29表　遺構外出土の近世以降瓦観察表

遺物番号	挿図番号	出土地層位	種別器種	法量（cm）			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				長さ	幅	厚さ					
114	39	B5 表土	袖瓦	26.3	26.8	1.85	凹面：ナデ 凸面：ナデ	密	良好	黒灰色	

第30表　遺構外出土の近世以降金属製品観察表

遺物番号	挿図番号	出土地層位	種別	法量（cm）			重量（g）	材質	備考
				長さ	幅	厚さ			
115	39	B6 流入土	煙管 吸口	9.9	1.3	1.1	10.8	銅	

写 真 図 版

北東側斜面　調査前状況（北東から）

北西側及び南西側斜面　調査前状況（西から）

図版２

頂部平坦面　調査前状況（北東から）

南西側腰郭　調査前状況（北東から）

北東側斜面　調査前状況（北西から）

調査位置全景（上が北西）

図版４

調査地全景（上が北西）

調査地全景（南西から）

調査地全景（北西から）

調査地全景（北東から）

図版６

築城以前の遺構全景（北西から）

土坑４（北西から）

腰郭５（南西から）

腰郭４、５土層断面（南東から）

図版８

空堀２（北東から）

空堀２（南西から）

空堀２土層断面　A–A′（北東から）

空堀２土層断面　B–B′（北東から）

図版10

柵列２（南東から）

腰郭６、７（北東から）

北東側斜面　南東壁土層断面（北西から）

北東側斜面　北西壁土層断面（南東から）

図版12

頂部平坦面　Ⅱ期の遺構全景（北東から）

頂部平坦面　Ⅱ期の遺構全景（南西から）

P2燈篭検出状況

P14礫・遺物出土状況

図版14

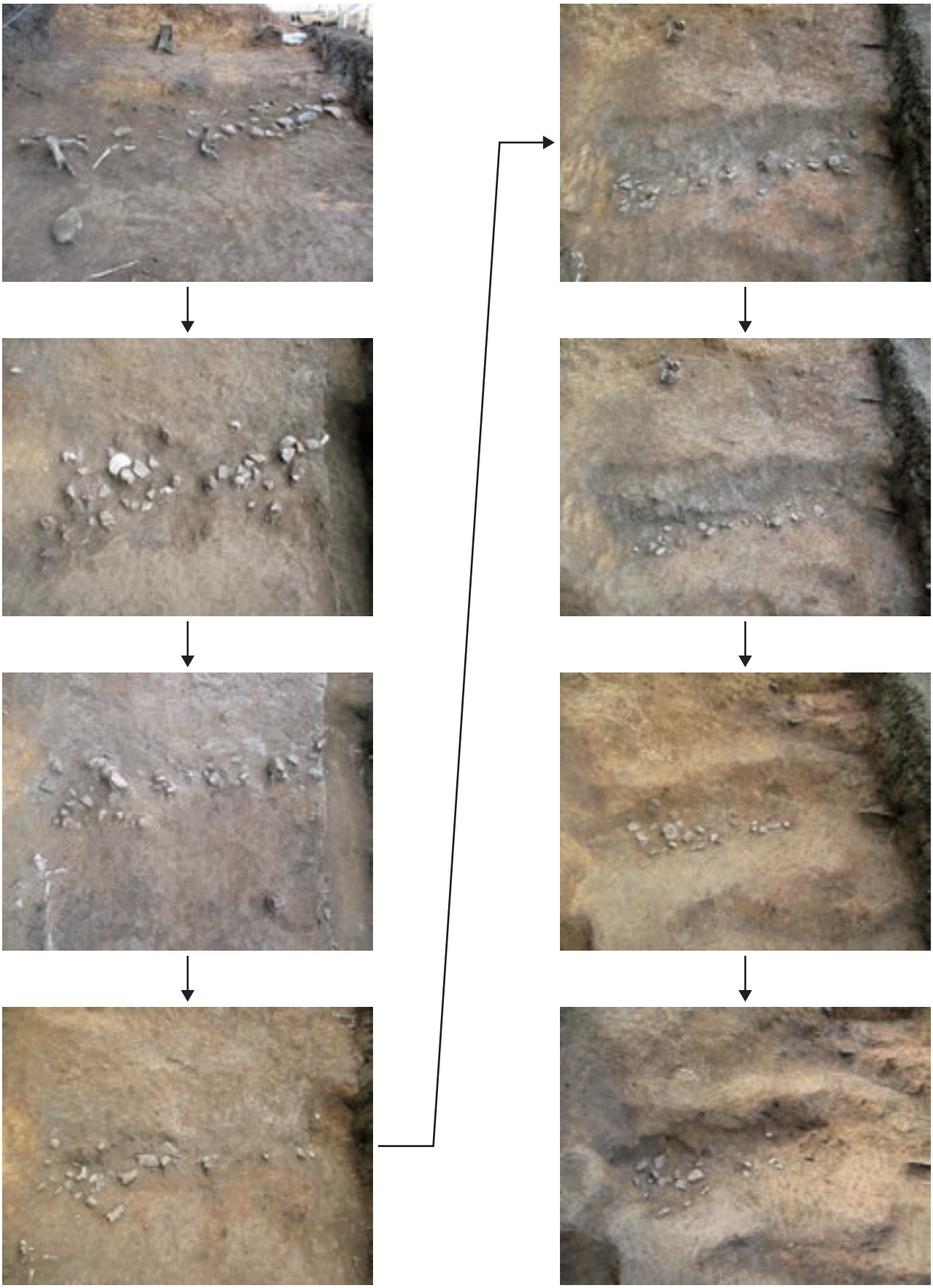
腰郭４（南西から）

腰郭４（南東から）

段状遺構１～３（北東から）

段状遺構１～３（北西から）

図版16



段状遺構３内礫検出状況推移（北東から）

集石２～５検出状況（南東から）

集石１上面

集石１下面（P27）

集石２

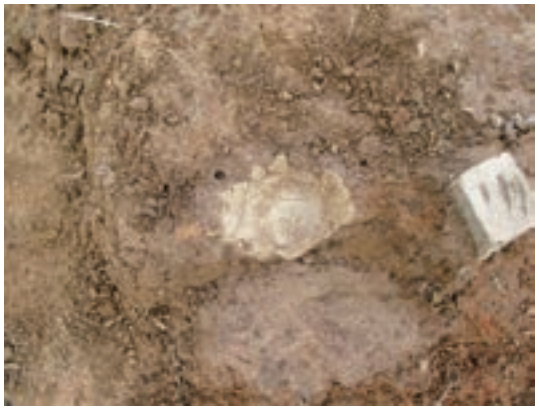
集石３

図版18

集石４

集石５

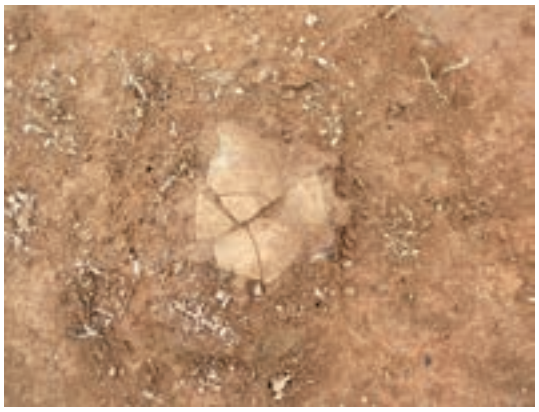
郭１　焼土検出状況（南西から）



郭１造成土遺物（15）出土状況

郭１造成土遺物（17）出土状況

郭１造成土遺物（18）出土状況



腰郭４遺物（71）出土状況

茶臼（106）出土状況

腰郭５～７出土遺物　　（S＝１：２）

図版20

郭１造成土出土遺物　　（S＝１：２）

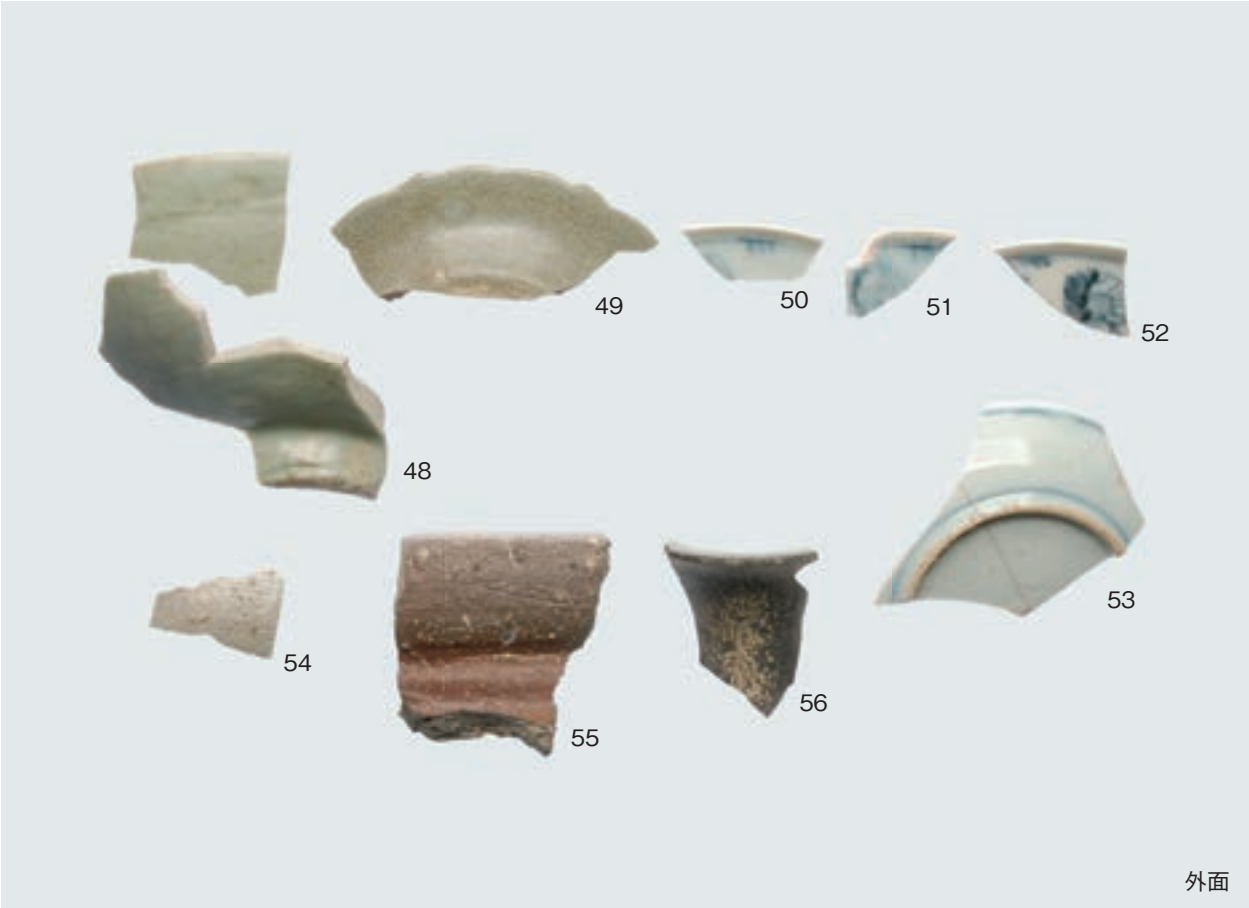
25
26
27
28
29
30
31
32
33
35
36
37
38
39
40
外面

25
26
27
28
29
30
31
32
33
35
36
37
38
39
40
内面

郭１出土遺物　　（S＝１：２）

図版22

P14出土遺物　　（S＝１：２）



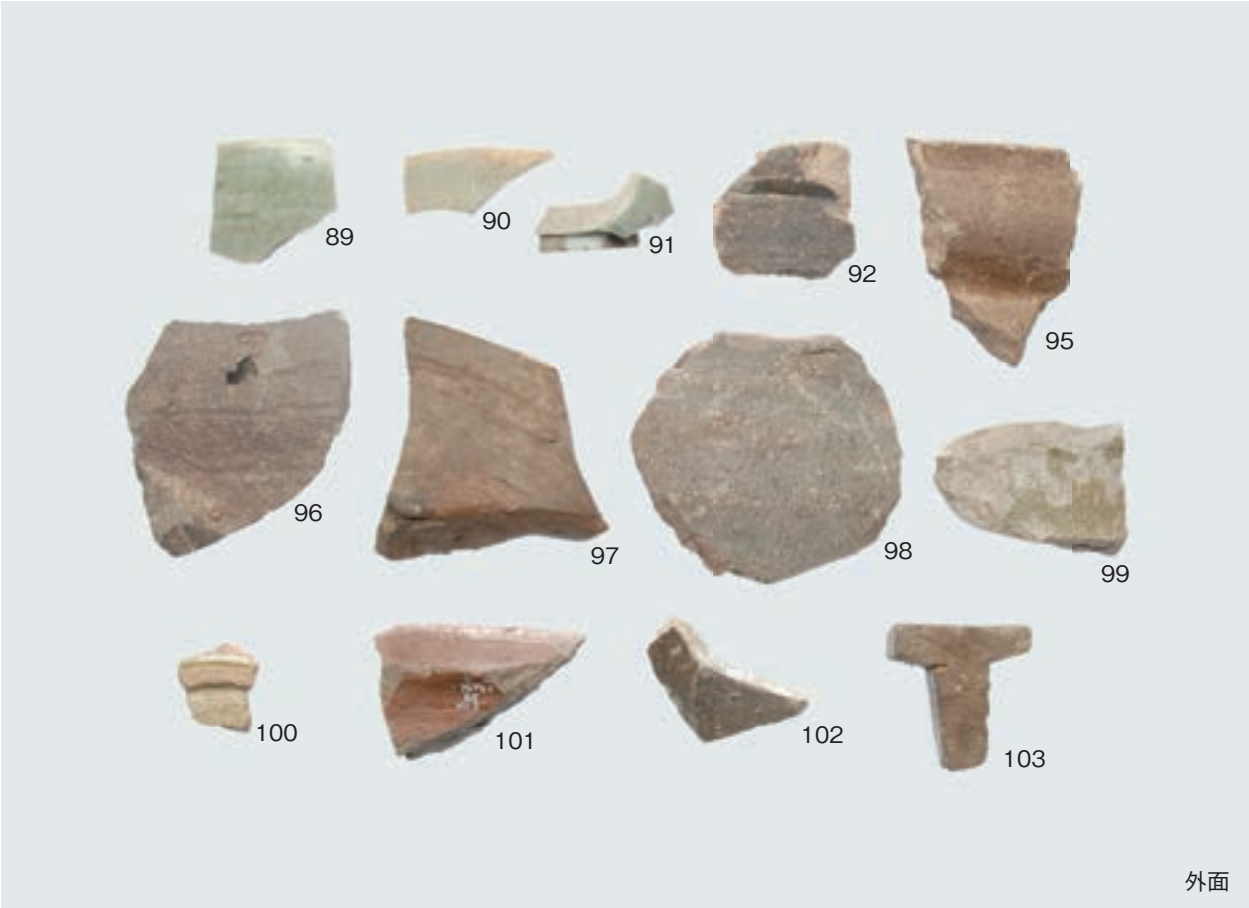
腰郭４造成土出土遺物（１）　（S＝１：２）

腰郭４造成土出土遺物（２）　　（S＝１：２）

腰郭４出土遺物　（S＝１：２）

図版26

段状遺構１、３出土遺物　　（S＝１：２）



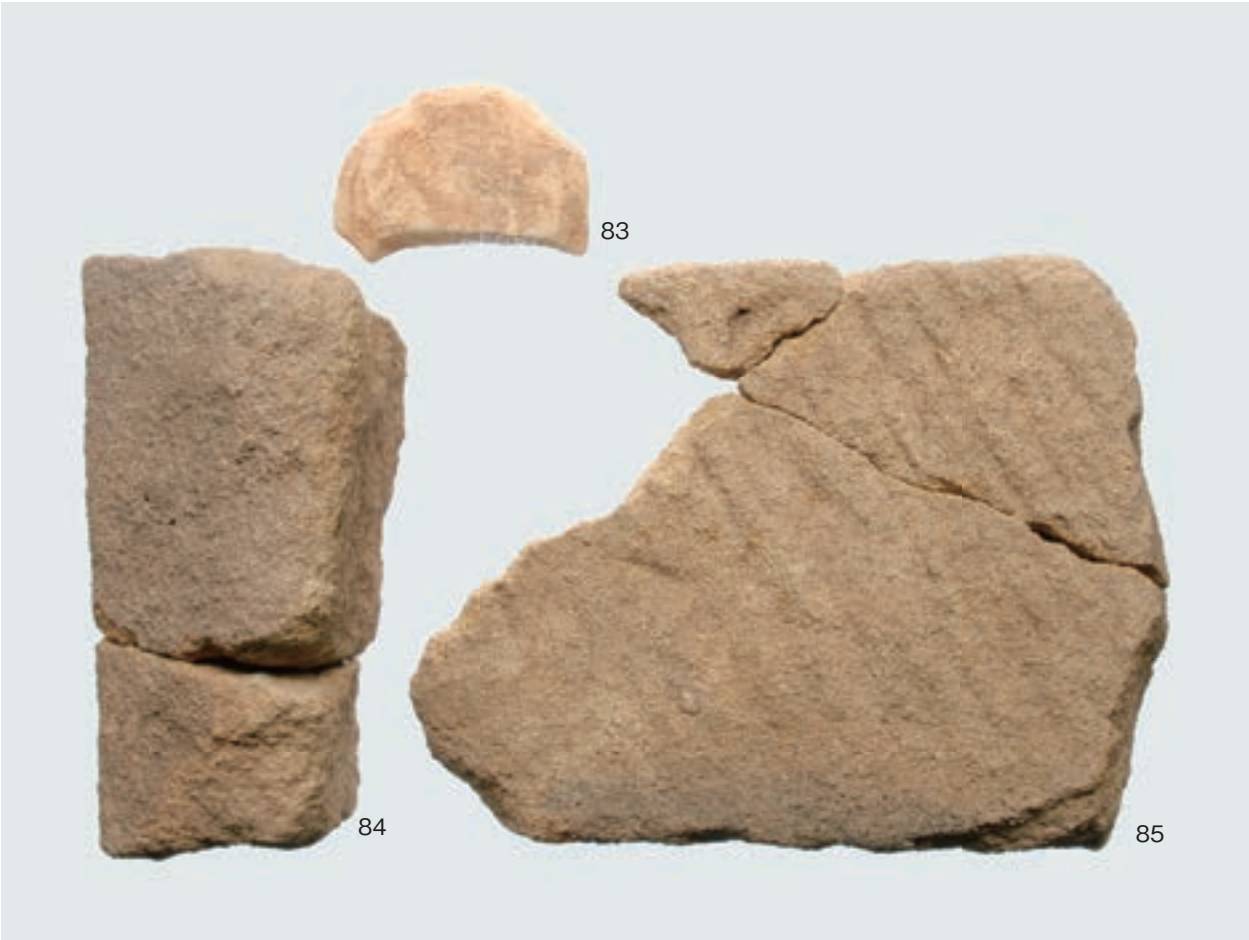
遺構外出土の中世遺物　（S＝１：２）

図版28

段状遺構３出土遺物　（S＝１：２）

P2出土石製品　（S＝１：３）

腰郭４出土石製品　（S＝１：２）



集石１出土遺物　（S＝１：２）

図版30

遺構外出土石製品（１）　（S＝１：２）

腰郭５、郭１造成土、遺構外出土石製品　（S＝１：１）

遺構外出土石製品（２）
（S＝１：１）

郭１造成土、遺構外出土鉄製品　（S＝１：１）

報　告　書　抄　録

ふ り が な	いしいようがいあとに
書　　名	石井要害跡Ⅱ
副　書　名	
巻　　次	
シリーズ名	一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	17
編 著 者 名	高橋浩樹
編 集 機 関	一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財調査室
所　在　地	〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地　TEL・FAX　0859-26-0455 ｅメールアドレス　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp
発行年月日	西暦2019年３月27日　平成31年３月27日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石井要害跡	鳥取県 米子市 石井	31202	米子市 156	35度 24分 19秒	133度 20分 50秒	2018年 ８月27日 ～ 2018年 10月31日	1,039㎡	急傾斜地 対策工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石井要害跡	城館	中世	郭、腰郭、空堀、土塁、柵列、段状遺構、土坑、集石	土師器、須恵器、青磁、白磁、青花、褐釉陶器、朝鮮産陶磁器、国産陶磁器（越前、信楽、備前、瀬戸・美濃、唐津、伊万里）、土師質土器、石製品、金属製品	

要　　約

石井要害跡は、米子市西部に位置し、加茂川左岸の標高29mの独立丘陵上に立地する。

今回の調査は、出丸と称される丘陵の頂部平坦面の北西側と北東側斜面の調査を実施した。

調査の結果、Ⅰ期（15世紀後半）には、頂部平坦面の南西側には腰郭を２段設け、北東側には傾斜度60°の切岸があり、頂部平坦面より3.5～４m下がった位置に腰郭を２郭構築している。頂部平坦面では北東―南西方向にのびる空堀を配しているが、空堀の掘形は直線的ではなく、楕円状の掘り込みが連続するような形態となっていることから、複数の掘削作業単位が存在したと考えられる。また、空堀の埋土の状況から空堀の北西側（空堀の外側）に土塁の存在が想定される。

Ⅱ期（16世紀前半～中頃）になると、空堀を人為的に埋め立てて郭の拡張を行っている。拡張された郭ではピットを54基検出したが、建物跡や柵列として断定できるものはなかった。しかし、柱の根固めとして用いられたと考えられる礫や陶磁器がピット内に据え付けられているものがあることから、建物跡の存在が窺える。

16世紀後半は遺物が出土していないことから、城主が不在、あるいは廃城となったと考えられる。

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書17

鳥取県米子市

石井要害跡Ⅱ

２０１９年３月

編集・発行　一般財団法人　米子市文化財団

〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地

ＴＥＬ　０８５９－２６－０４５５

印　　刷　　勝 美 印 刷 株 式 会 社